

萩 浦

— 古 墳 編 —

福岡県前原市萩浦土地区画整理事業に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 58 集

1 9 9 5

前原市教育委員会

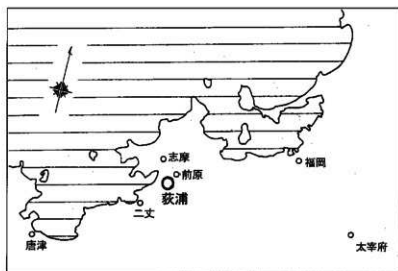
萩 浦

— 古 墳 編 —

福岡県前原市萩浦土地区画整理事業に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 58 集



1995

前原市教育委員会



菰浦丘陵上空から前原市街をのぞむ
(住宅街が国道202号、J R筑肥線に沿って福岡市域に続く)



a. 立石1号墳全景（真上から）



b. 立石1号墳出土方格T字鏡



a. 坂の下2～5号墳（南上空から）



b. 砂魚塚1号墳全景（北西上空から）



a. 砂魚塚1号墳玄室装身具出土状況



b. 砂魚塚1号墳装身具C群



c. 砂魚塚1号墳羨道出土雲珠金具

序

前原市は福岡都市圏のベッドタウンとして近年急激な人口増加、都市化が進んでまいりました。とりわけ国道202号線、JR筑肥線沿線地帯の都市化はめざましく、開発の進行にともない、街並もその姿を刻一刻と変えております。

JR筑肥線沿いの荻浦地区でも隣接する大浦地区土地区画整理事業に連動して平成4年度から新たな街づくりが始まりました。

事業に先駆けて予定地内の埋蔵文化財の調査を行いましたところ、当初の予想を大きく覆し、前方後円墳の発見、銅鏡の出土をはじめとして古墳時代を中心としたさまざまな遺跡、遺物が発見されるところとなり、糸島地方の古代史研究に大きく貢献するとともに新たな課題を投げ掛けることとなりました。

とりわけ砂魚塚1号墳から発見された碧玉の原石は、遠く出雲地方からもたらされた可能性が指摘され、古墳時代の糸島人の活動範囲の広さを改めて感じさせるとともに、この地に、広く海を舞台として活躍した人々の拠点があったこともうかがわせ、興味深い成果となりました。

本書はこれら貴重な調査成果を報告書としてまとめたものです。本書が当地の歴史を解明する上での一助となれば幸いです。

発掘調査にあたっては地元の荻浦、大浦地区や荻浦土地区画整理組合の方々の篤い御理解と御協力をいただきました。末尾ではありますが、心から感謝申し上げます。

平成7年3月31日

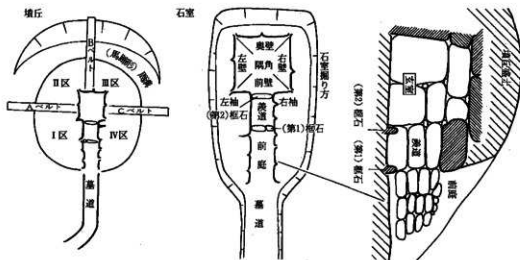
前原市教育委員会
教育長 橋木昭生

例言

1. 本書は、福岡県前原市荻浦土地区画整理事業の施工に伴い実施した文化財調査の報告書である。本書では事業地内における古墳時代墳墓遺構を中心に報告する。

奈良時代集落をはじめとする他の遺構、遺物についての報告、および総括については、集落・生産遺構編で行いたい。

2. 本書に使用した遺構の実測、および写真撮影は岡部裕俊、野田純子、瓜生秀文が、平板地形測量図は、主に岡部、野田、瓜生、坂本悦子、中原マチ子、川上豊子、高田トヨミ、藤木和子、高岡早苗、竹原ヒトミ、富岡美佐枝が協力して作成した。
3. 現場における空中写真の撮影は(有)空中写真企画(代表 榎隆夫)の器材を使用した。
4. 遺物実測図は、主に川上辰子、高橋久枝、末松伸子、島影やよい、岡部、野田が作成したが、遺物拓本は高橋久枝、土器実測は川上、装身具、鉄器実測については島影によるところが大きい。
5. 製図は主に岡部、野田が行った。
6. 遺物の写真撮影はフォトハウスおか(岡紀久夫)に委託した。
7. 本書で報告した遺物は一括して前原市立伊都歴史資料館に保管している。
8. 出土した鉄器の一部は九州歴史資料館の横田義章氏に保存処理をお願いした。
9. 本書で使用する横穴式石室古墳各部の名称は基本的に下図のとおり統一して使用する。



10. 本書では、報告する土器の編年の位置づけについて、土師器は柳田康雄、須恵器は田辺昭三の下掲文献において提示された編年案に基づいて報告することとし、実年代についても、基本的に両者の年代観に従った。

柳田康雄「土師器の編年」九州『古墳時代の研究』第6巻 1991年 雄山閣出版

田辺昭三『須恵器大成』1981年 角川書店

11. 本書の執筆は主に岡部が行ったが、立石1号墳出土銅鏡の鉛同位体比分析結果報告については松岡信明氏、同墳土器棺出土人骨の鑑定結果については中橋孝博氏、坂の下4号墳出土赤色顔料の科学分析結果報告については本田光子氏に執筆をお願いした。

なお、編集は野田の協力を得て岡部が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査にいたる経過	1
2.	調査の工程	1
3.	調査の組織	3
II	調査の記録	4
1.	位置と環境	4
2.	調査の概要	9
(1)	A-2地点	9
a.	概要	9
b.	前田古墳	9
c.	奥壁下土壌	16
d.	甕棺	16
e.	小 結	17
(2)	A-3地点	18
a.	概要	18
b.	立石1号墳	18
c.	小 結	30
(3)	D-1地点	33
a.	概要	33
b.	立石2号墳	33
c.	小 結	37
(4)	A-4地点	38
a.	概要	38
b.	坂の下1号墳	38
c.	小 結	42
(5)	B-20-b地点	44
a.	概要	44
b.	坂の下2号墳	44
c.	坂の下3号墳	52
d.	坂の下4号墳	56
e.	坂の下5号墳	68
f.	小 結	78
(6)	C-6地点	82
a.	概要	82
b.	砂魚塚1号墳	82
c.	竪穴式小石室	113

d. 砂魚塚2号墳	113
e. 小 結	114
(7) E-2・B-11地点	117
a. 概要	117
b. 石川1号墳	118
c. 石川2号墳	133
d. 石川3号墳	135
e. 溝状遺構	139
f. 小 結	142
3. 自然科学的調査の結果	150
(1) 荻浦坂の下4号墳出土の赤色顔料について	150
(2) ICP-MSによる立石1号墳および東真方古墳群出土青銅鏡の鉛同位体比分析	152
(3) 立石1号墳出土土人骨について	158
III おわりに	159

図 版 目 次

図版 1	荻浦地区工事着手前現況航空写真
図版 2	a. A-2 地点全景 b. 前田古墳全景 c. 玄室閉塞状況（羨道から） d. 閉塞状況（玄室から） e. 玄室（羨道から） f. 玄室奥壁付近遺物出土状況
図版 3	a. 前田古墳出土鉄器 b. 前田古墳出土装身具
図版 4	a. 前田古墳玄室出土土器 b. 前田古墳出土壘棺片 c. 奥壁下土壇高杯出土状況 d. 出土高杯
図版 5	a. 立石1号墳全景（上から） b. 立石1号墳全景（東から）
図版 6	a. 立石1号墳前方部南墳裾 b. 南墳裾周溝土層 c. 前方部北東コーナー溝状遺構
図版 7	a. 立石1号墳 a 土器群土器出土状況

- b. 不整形土墳土器出土状況
 - c. 銅鏡出土状況
 - d. 主体部検出状況
 - e. 主体部掘り下げ状況
 - f. 主体部掘り下げ状況
- 図版8 a. 立石1号墳出土方格T字鏡
- b. <参考資料>東真方1号墳出土方格T字鏡
- 図版9 a. 立石1号墳北西裾土器棺墓検出状況
- b. 土器棺墓越しに後円部をのぞむ
- c. 土器棺の埋納状況
- d. 棺内頭骨出土状況
- e. 墓墳完掘状況
- 図版10 A-3地点出土大形二重口縁壺
- 図版11 a. D-1地点全景
- b. 立石2号墳全景
- c. 玄室
- 図版12 a. 立石2号墳玄室奥壁付近遺物出土状況
- b. 立石2号墳玄室奥壁付近遺物出土状況
- c. 立石2号墳出土遺物①
- 図版13 立石2号墳出土遺物②
- 図版14 a. A-4地点全景
- b. 板の下1号墳全景
- 図版15 a. 板の下1号墳玄室閉塞状況
- b. 羨道
- c. 玄室
- d. 墳裾土墳遺物出土状況
- e. 板の下1号墳出土土器
- 図版16 a. B-20地点全景
- b. 板の下2~5号墳全景
- 図版17 a. 板の下2号墳墳丘遺存状況
- b. 墳丘地山整形状況
- c. 石室全景
- d. 羨道土器出土状況
- 図版18 板の下2号墳出土遺物①
- 図版19 板の下2号墳出土遺物②
- 図版20 a. 板の下3号墳墳丘遺存状況
- b. 墳丘地山整形状況
- c. 石室

- d. 玄室
 - e. 羨道遺物出土状況
 - f. 玄室左袖下遺物出土状況
- 図版21 板の下3号墳出土遺物
- 図版22 a. 板の下4号墳墳丘遺存状況
b. 地山整形状況
c. Bベルト土層断面
d. 追葬時床面と遺物出土状況
- 図版23 a. 板の下4号墳初葬時床面検出状況
b. 玄室前壁
c. 玄門部
d. 玄室左側壁
e. 玄室奥壁
- 図版24 板の下4号墳出土遺物
- 図版25 a. 板の下4号墳東周溝内土壌土器出土状況
b. 土壌内遺物出土状況近景
c. 4号墳北東堀土器棺墓
d. 土器棺内水晶切り玉出土状況
e. 土器棺
f. 水晶切り玉
- 図版26 a. 板の下5号墳墳丘遺存状況
b. 地山整形状況
c. 石室掘り方土層断面
d. 玄室閉塞状況
e. 初葬時閉塞石遺存状況
f. 初葬時閉塞石遺存状況
g. 石室全景
- 図版27 a. 板の下5号墳玄室白磁碗出土状況
b. 玄室左袖下土壌須恵器出土状況
c. 玄室左袖下土壌下層遺物出土状況
d. 羨道主頭大刀柄頭、馬具出土状況
e. 出土遺物①
- 図版28 板の下5号墳出土遺物②
- 図版29 板の下5号墳出土遺物③
- 図版30 板の下5号墳出土遺物④
- 図版31 a. C-6地点調査前全景
b. 砂魚塚1号墳調査前全景
c. 砂魚塚1号、2号墳表土除去後(上から)

- 図版32 a. 砂魚塚1号墳全景(西上空から)
b. 砂魚塚1号墳全景(北西上空から)
- 図版33 a. 砂魚塚1号墳後円部墳丘北、東土層
b. 後円部墳丘西土層
c. 東土層近景
d. 後円部石室掘り方東土層
e. 墳丘地山整形状況
- 図版34 a. 砂魚塚1号墳後円部近景
b. 墓道から前庭をのぞむ
- 図版35 a. 砂魚塚1号墳墓道土層断面
b. 前庭、羨道を正面からのぞむ
c. 前庭、羨道左壁
d. 前庭、羨道右壁
- 図版36 砂魚塚1号墳石室全景および玄室四壁
- 図版37 a. 砂魚塚1号墳玄室装身具出土状況
b. A群
c. B群
d. C群
e. D群
- 図版38 a. 砂魚塚1号墳墳丘土器群F、G土器出土状況
b. 墳丘土器群F杯セット出土状況
c. 墳丘土器群B(下)、C(上)出土状況
d. (上)墳丘土器群E遺物出土状況、(下)碧玉原石出土状況
- 図版39 a. 砂魚塚1号墳北西裾整穴式小石室
b. 砂魚塚1号墳北西裾整穴式小石室
- 図版40 砂魚塚1号墳出土遺物①(a~d. 雲珠金具 e. 鞍金具、鉾他)
- 図版41 砂魚塚1号墳出土遺物②(a. 鉄鏃 b. 鉄刀 c. 鋤先 d. 鋤先 e. 手斧)
- 図版42 砂魚塚1号墳出土遺物③(a. 耳環 b. 装身具A群 c. 装身具B群
d. 装身具C群 e. 墳丘土器群E出土碧玉半製品)
- 図版43 砂魚塚1号墳出土遺物④(a. 装身具D群 b. 装身具E群 c. その他
d. 石室埋土 e. 墳丘土器群D、F土器)
- 図版44 砂魚塚1号墳出土遺物⑤(墳丘土器群A~C)
- 図版45 砂魚塚1号墳出土遺物⑥(墳丘土器群D、E)
- 図版46 砂魚塚1号墳出土遺物⑦(墳丘土器群E~H)
- 図版47 a. 砂魚塚2号墳全景
b. 石室近景
- 図版48 a. B-11、E-2地点全景
b. 石川1号墳墳丘遺存状況

- 図版49 a. 石川1号墳玄室閉塞状況
b. 石川1号墳玄室閉塞状況
c. 追葬時閉塞石除去後
d. 閉塞石除去後
e. 地山整形状況
- 図版50 石川1号墳石室全景および玄室四壁
- 図版51 a. 石川1号墳墳丘A土器群出土状況
b. 墳丘A土器群皮袋形土器出土状況
c. 墳丘B土器群出土状況
d. B-①出土状況
e. B-②出土状況
f. 墳丘Bベルト土層とCベルト周溝土層
- 図版52 石川1号墳出土鉄器、装身具
- 図版53 石川1号墳出土土器①
- 図版54 石川1号墳出土土器②
- 図版55 石川1号墳出土土器③
- 図版56 石川1号墳出土土器④
- 図版57 石川1号墳出土土器⑤
- 図版58 a. 石川2号、3号墳全景
b. 石川2、3号墳近景
- 図版59 a. 石川2号墳箱式石棺（南から）
b. 石川2号墳箱式石棺（東から）
c. 箱式石棺小口部近景
d. 石川3号墳東周溝土器出土状況
e. 石川3号墳東周溝高杯出土状況
f. 周溝出土土器
- 図版60 a. 石川3号墳墳丘角石検出状況（北西から）
b. 墳丘角石検出状況（南西から）
c. 墳丘（西裾から）
d. 主体部土壌検出状況
e. 主体部木棺、鉄剣、甕出土状況（西から）
- 図版61 a. 石川3号墳鉄剣、甕出土状況
b. 鉄刀子出土状況
c. 鉄剣、甕、刀子
d. 主体部完掘状況

挿 図 目 次

第1図	荻浦地区画整理事業施工範囲と文化財調査地点	2
第2図	砂魚塚1号墳での現地説明会風景	3
第3図	下山報告にみる糸島低地帯の貝層分布域と干拓の名残をのこす小字	4
第4図	糸島低地帯俯瞰(加布里湾上空から)	5
第5図	荻浦地区の位置と周辺の既知古墳分布(1/75,000)	7
第6図	前田古墳墳丘遺存状況(1/150)	10
第7図	前田古墳石室実測図(1/40)	11
第8図	前田古墳石室内遺物出土状況図(1/25)	12
第9図	前田古墳石室出土鉄器、装身具実測図(1/2, 1/3)	13
第10図	前田古墳石室出土土器実測図(1/4)	14
第11図	前田古墳玄室奥壁下土壌実測図(1/20)	15
第12図	古墳下土壌出土高杯実測図(1/4)	16
第13図	壘棺復元推定図(1/8)	16
第14図	A-3・4、D-1地点周辺地形と遺構の配置図(1/750)	19
第15図	立石1号墳調査前地形図(1/400)	20
第16図	立石1号墳前方部南墳裾周溝土層図(1/40)	20
第17図	立石1号墳墳丘遺存状況図(1/250)	21
第18図	立石1号墳主体部実測図(1/30)	22
第19図	立石1号墳出土鏡拓影および実測図(1/1)	23
第20図	立石1号墳北西裾土器棺墓実測図(1/20)	25
第21図	立石1号墳北西裾土器棺使用土器実測図(1/6)	25
第22図	立石1号墳不整形土壌実測図(1/30)	26
第23図	立石1号墳墳丘周辺土器出土地点点描図(1/200)	27
第24図	立石1号墳不整形土壌出土大形壘実測図(1/6)	28
第25図	立石1号墳墳丘出土土器実測図(1/4)	29
第26図	D-1地点の地形と立石2号墳の位置(1/300)	32
第27図	立石2号墳墳丘遺存状況(1/150)	33
第28図	立石2号墳石室実測図(1/400)	34
第29図	立石2号墳出土鉄器実測図(1/2)	35
第30図	立石2号墳石室出土土器実測図(1/4)	36
第31図	A-4地点の地形と坂の下1号墳の位置(1/300)	39
第32図	坂の下1号墳墳丘遺存状況および墳裾土壌実測図(1/150, 1/20)	40
第33図	坂の下1号墳石室実測図(1/40)	41
第34図	坂の下1号墳出土土器実測図(1/4)	42
第35図	B-20-b地点遺構配置図(1/750)	43
第36図	B-20-b地点調査後地形図(1/400)	45
第37図	B-20-b地点調査後地形図(1/400)	46
第38図	坂の下2号墳墳丘遺存状況図(1/150)	47

第39図	坂の下2号墳石室実測図 (1/50)	48
第40図	坂の下2号墳石室閉塞状況図 (1/50)	48
第41図	坂の下2号墳羨道遺物出土状況図 (1/20)	49
第42図	坂の下2号墳出土鉄器、装身具実測図 (1/2, 2/3)	50
第43図	坂の下2号墳出土土器実測図① (1/4)	51
第44図	坂の下2号墳出土土器実測図② (1/4)	52
第45図	坂の下3号墳墳丘遺存状況図 (1/150)	53
第46図	坂の下3号墳周溝土層断面図 (1/40)	53
第47図	坂の下3号墳石室実測図 (1/50)	54
第48図	坂の下3号墳石室内遺物出土状況図 (1/30)	55
第49図	坂の下3号墳出土鉄器実測図 (1/2, 1/3)	57
第50図	坂の下3号墳出土土器実測図 (1/4)	58
第51図	坂の下4号墳墳丘遺存状況図 (1/150)	59
第52図	坂の下4号墳墳丘土層断面 (左)および墳丘地山整形 状況図 (1/150, 1/80)	60
第53図	坂の下4号墳石室実測図 (1/40)	61
第54図	坂の下4号墳石室遺物出土状況図 (1/30)	62
第55図	坂の下4号墳石室内出土大刀実測図 (1/4)	63
第56図	坂の下4号墳石室内出土鉄器実測図 (1/2)	64
第57図	坂の下4号周溝内土壌土器出土状況図 (1/20)	65
第58図	坂の下4号周溝内土壌出土土器実測図 (1/4)	66
第59図	坂の下4号墳墳丘下土器棺墓 (1/20)、出土土器棺 (1/8)、副葬切子玉 (2/3)実測図	67
第60図	坂の下5号墳墳丘遺存状況図および墳丘土層断面図 (1/150, 1/60)	69
第61図	坂の下5号墳墳丘地山整形図 (1/150)	70
第62図	坂の下5号墳石室実測図 (1/60)	71
第63図	坂の下5号墳石室閉塞状況図 (1/30)	72
第64図	坂の下5号墳石室遺物出土状況図 (1/40, 1/80)	73
第65図	坂の下5号墳出土馬具実測図 (1/2)	75
第66図	坂の下5号墳出土鉄器、装身具実測図 (1/2, 2/3)	76
第67図	坂の下5号墳出土土器実測図① (1/4)	77
第68図	坂の下5号墳出土土器実測図② (1/4)	78
第69図	C-6地点遺構配置図 (1/500)	83
第70図	砂魚塚1号墳調査前地形図 (1/400)	84
第71図	砂魚塚1号墳墳丘遺存状況図 (1/200)	85
第72図	砂魚塚1号墳墳丘土層断面図 (1/75, 1/150)	86
第73図	砂魚塚1号墳地山整形状況図 (1/200)	87
第74図	砂魚塚1号墳石室実測図 (1/60)	89
第75図	砂魚塚1号墳石室遺物出土状況図 (1/20)	91
第76図	砂魚塚1号墳石室出土装身具A、B、C群出土状況図 (1/2)	93
第77図	砂魚塚1号墳石室出土装身具実測図① (2/3)	94

第78图	砂魚塚1号墳石室出土装身具実測図② (2/3)	95
第79图	砂魚塚1号墳石室出土装身具実測図③ (2/3)	96
第80图	砂魚塚1号墳石室出土装身具実測図④ (2/3)	97
第81图	砂魚塚1号墳出土鉄器実測図① (1/2, 1/4)	98
第82图	砂魚塚1号墳出土鉄器実測図② (1/2)	99
第83图	砂魚塚1号墳出土鉄器実測図③ (1/2)	100
第84图	砂魚塚1号墳石室内出土土器実測図 (1/4)	101
第85图	砂魚塚1号墳墳丘土器群出土地点位置図 (1/200)	102
第86图	砂魚塚1号墳出土碧玉半製品実測図 (1/1)	103
第87图	砂魚塚1号墳墳丘土器群B、C、D、E出土状況図 (1/20)	104
第88图	砂魚塚1号墳墳丘土器群F、G出土状況図 (1/20)	105
第89图	砂魚塚1号墳墳丘土器群出土土器実測図① (1/4)	106
第90图	砂魚塚1号墳墳丘土器群出土土器実測図② (1/4)	107
第91图	砂魚塚1号墳墳丘土器群出土土器実測図③ (1/4)	108
第92图	砂魚塚1号墳墳丘土器群出土土器実測図④ (1/6)	109
第93图	砂魚塚1号墳北西裾箱式石棺墓実測図 (1/20)	112
第94图	砂魚塚2号墳遺存状況図 (1/75)	113
第95图	砂魚塚2号墳石室実測図 (1/30)	114
第96图	B-11・E-2地点調査前地形と遺構の位置 (1/750)	116
第97图	石川1号墳調査前地形図 (1/200)	117
第98图	石川1号墳墳丘遺存状況図 (1/150)	118
第99图	石川1号墳墳丘土層断面図 (1/60)	119
第100图	石川1号墳石室実測図 (1/60)	120
第101图	石川1号墳石室閉塞状況図 (1/15)	121
第102图	石川1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	122
第103图	石川1号墳出土装身具実測図 (2/3)	123
第104图	石川1号墳墳丘土器群出土地点描図 (1/200)	124
第105图	石川1号墳墳丘A土器群出土状況図 (1/20)	125
第106图	石川1号墳墳丘B土器群出土状況図 (1/20)	126
第107图	石川1号墳墳丘出土土器実測図① (1/4)	127
第108图	石川1号墳墳丘出土土器実測図② (1/4)	128
第109图	石川1号墳墳丘出土土器実測図③ (1/3, 1/6)	129
第110图	石川1号墳墳丘出土土器実測図④ (1/4)	130
第111图	石川1号墳墳丘出土土器実測図⑤ (1/4)	131
第112图	石川2、3号墳周辺遺構配置図 (1/200)	132
第113图	石川2号墳墳丘遺存状況図 (1/100)	133
第114图	石川2号墳主体部実測図 (1/20)	134
第115图	石川3号墳墳丘遺存状況図 (1/100)	135
第116图	石川3号墳主体部実測図 (1/20)	136
第117图	石川3号墳主体部出土鉄器実測図 (1/2)	137

第118図	石川3号墳周溝土器出土状況図(1/30)	138
第119図	石川3号墳周溝出土土器実測図(1/4)	139
第120図	石川3号墳小形箱式石棺実測図(1/20)	139
第121図	前原市出土青銅鏡の鉛同位体比	156

付 図 目 次

付図	荻浦地区画整理事業地内新旧地形と調査地点位置図(1/2,000)
----	----------------------------------

表 目 次

第1表	荻浦発掘調査工区別工期概要表	2
第2表	前田古墳出土土器観察表	15
第3表	立石1号墳出土土器観察表	31
第4表	立石2号墳出土土器観察表	37
第5表	坂の下古墳群出土土器観察表①	79
第6表	坂の下古墳群出土土器観察表②	80
第7表	坂の下古墳群出土土器観察表③	81
第8表	砂魚塚1号墳出土土器地点別器種内訳表	109
第9表	砂魚塚1号墳出土土器観察表①	110
第10表	砂魚塚1号墳出土土器観察表②	111
第11表	砂魚塚1号墳出土装身具の出土位置別種類内訳表	115
第12表	石川古墳群出土土器観察表①	140
第13表	石川古墳群出土土器観察表②	141
第14表	荻浦出土装身具観察表①	143
第15表	荻浦出土装身具観察表②	144
第16表	荻浦出土装身具観察表③	145
第17表	荻浦出土装身具観察表④	146
第18表	荻浦出土装身具観察表⑤	147
第19表	荻浦出土装身具観察表⑥	148
第20表	荻浦出土装身具観察表⑦	149
第21表	ICP-MSによるNIST-SRM-981の鉛同位体比分析の結果	157
第22表	ICP-MSによる前原市出土鏡の鉛同位体比分析結果	158
第23表	荻浦地区内における古墳、墳墓の返遷	159

I はじめに

1. 調査にいたる経過

近年糸島地方は福岡都市圏のベッドタウンとして人口増加が続き、福岡市営地下鉄とJR筑肥線の相互乗り入れによる交通の利便化によってその流れに弾みがつくこととなった。糸島地方の中核都市であった前原町も1990年の国勢調査では人口5万人を越え、翌年10月には前原市が誕生した。市政運営にあたっての当面の課題としては生活基盤の整備が急務とされ、道路、公共福祉施設の整備、建設が急ピッチで進められている。

荻浦地区は前原市の中心部から西南西2kmに位置する。標高70mほどの丘陵地の北側の斜面から裾にかけて営まれる集落である。この周辺においても中小の宅地開発が進み、以前は牧歌的な様相をみせた集落も、国道202号線沿いの水田部を中心に次々に宅地化が進みその様相は一変した。

さて、荻浦集落の後背丘陵地帯は戦後、南面する斜面一帯で柑橘類栽培を中心とした農業用地として活用されていたが、農業経営の多角化等の余波をうけて最近では栽培が下火となった。1987年頃から東に隣接する大浦の丘陵地帯において住宅都市整備公団による土地区画整理事業が着工し、これに呼応するかのよう荻浦地区でも土地区画整理事業の話が持ち上がったのである。

荻浦はJR筑肥線の筑前前原駅と加布里駅のほぼ中間地点にあるため、ここに新駅を設置して交通の利便化を図るとともに、新駅を十分に活用し、新たな街づくりを積極的に推進しようとして、荻浦土地区画整理組合設立準備委員会が発足したのが1988年である。

事業の施工に先立ち、予定地内の埋蔵文化財への対応について市文化課と準備委員会との間で平成元年9月から数度にわたる協議を重ねることとなった。平成2年6月7日から同年7月5日にかけて事業地内の分布調査を実施して大まかな分布状況を把握し、その結果を委員会に報告するとともに、現地での発掘調査事業には4年の工期が必要であることを報告した。

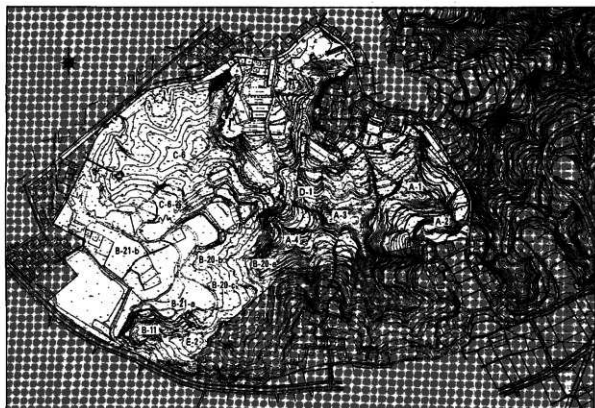
同年9月には委員会から文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届け出が提出され、調査期間、費用負担について協議をはじめた。そして翌平成3年10月1日付けで埋蔵文化財包蔵地発掘調査に関する全体協定ならびに平成3年度発掘調査委託契約を交わし、以後平成6年度末までの発掘調査がスタートすることとなった。

発掘調査は事業の施工を睨みながら、まず予定地の東端部から開始し、以後事業地内を4カ年度にわたり調査することとなった。

2. 調査の工程

調査は区画整理事業に先行して実施することとなったが、着工後は工事と並行して進めざるをえないため、工事工程を先取りして調査を実施することにした。工事は東部から事業地を縦断する作業幹線道路の造成から着手される予定であったため、A工区とされる東部からD工区の一部、B工区、C工区と移り最後にB工区の残り一部とE工区の調査を行った。

B-21工区、C-6-谷工区については調査開始当初は文化財の包蔵が確認されていなかったが、



第1図 荻浦土地区画整理事業施工範囲と文化財調査地点

期 \ 理	63年			4年			5年												6年												7年		
	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
A-1	■																																
A-2	■																																
A-3	■																																
A-4	■																																
D-1	■																																
B-20	■																																
B-21	■																																
C-68	■																																
C-6	■																																
E-2	■																																
B-11	■																																
試掘	■			■			■			■			■			■			■			■			■								
立会	■																																
整理	■																																
調査	○																																

第1表 荻浦発掘調査工区別工期概要表

調査着手後に試掘調査を実施したところその包蔵が確認されたため、急きょ調査を実施した。

発掘調査の実施期間中に調査成果の一部を紹介し、事業関係者および地域住民に文化財への理解と保護思想の普及を図る目的で、1992年10月にB-20工区（坂の下古墳群）、翌1993年5月にはC-6工区（砂魚塚1号墳）で遺跡の現地説明会を実施し、あわせて400名ほどの参加を得ることができた。



第2図 砂魚塚1号墳での現地説明会風景

また、調査の状況を簡単に紹介した速報パンフレットを各年度末に作成し、地元および事業関係者に配布して、発掘調査の進行状況を報告するとともに、調査への理解をお願いした。

1993年9月末には現地での発掘調査を終了し、以後平成6年度末まで補足調査や遺物整理を行いながら報告書作成業務を行った。各作業内容、調査工区における工期の概略は第1表にまとめている。本書では以後「工区」を「地点」と呼びかえて報告することとする。

3. 調査の組織

今回の調査に係る組織は以下のとおりである。

調査主体 前原市教育委員会

総括	教育長	榑木昭生	
	文化部長	中原直國	(前任) 菊竹利嗣
	文化課長	井上 尚	(前任) 清水義弘 菊竹利嗣 加幡怡都城
	文化財係長	川村 博	(前任) 吉村耕治
庶務	文化振興係長	清水真澄	(前任) 吉村耕治 中園俊二
	文化振興係	鎌田早苗	
調査	文化財係	岡部裕俊	野田純子 瓜生秀文

また調査を委託した荻浦土地区画整理組合の組織は以下のとおりである（1995年3月現在）。

理事長	重富宣昭
副理事長	田中正裕 東島与一郎
理事	竹原幸次郎 重富龍彦 重富耕作 田中一馬 重富龍一 吉村千鶴
監事	青柳辰實 田中貢太郎
事務局長	山崎昭夫
次長	菊地浩一 慶越 豊
係長	浜田博幸 秦 昭一
係員	末松美代子

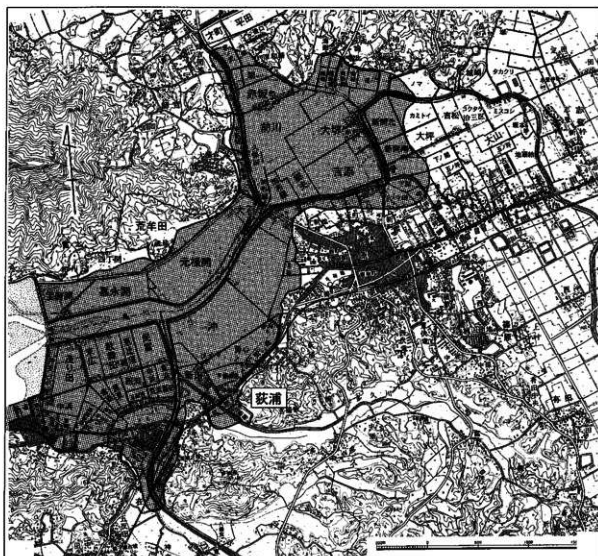
II 調査の記録

1. 位置と環境

荻浦地区は福岡県前原市の北東部に位置する。糸島半島の西基部を扶るように入り込んだ加布里湾の最奥部からさらに東に2.5kmほど入った地点である(第5図)。荻浦集落の南背後に残った標高70mを頂とする丘陵地が今回の区画整理事業地である。

事業地の北西3kmには「筑紫富士」の異名をとる可也山(標高365m)が端正な姿をみせるが、この可也山と荻浦地区の間には標高2.5~5mの低地水田が広がり、この水田地帯は東西20kmにおよぶ半島基部を帯状に縦断している。

この低地帯には最近まで加布里から今津に抜ける狭い海峡(糸島水道)があったと考えられていたが、下山正一らによる貝化石層の分布調査の結果、遅くとも縄文後期以降では前原市の泊~志登間は陸地として繋がっていた可能性が高いことが報告され、海峡の存否について新たな論議の展開



第3図 下山報告にみる糸島低地帯の貝層分布域(薄アミ部)と干拓の名残をのこす小字

をみせている。しかし、荻浦一可也山の低地帯には中世末期にいたるまで加布里湾側から入りこんだ潟状の内海があったことが日野尚志による研究でも明らかにされており、当地が北に海を望む海辺の地であったことは明らかである。古代荻浦地区の歴史はこの内海に近い地理的特性の下で展開したことは想像に難くない。

本編で報告する古墳時代について旧加布里湾岸部周辺を中心とした糸島地方西部の古墳を中心に概観してみよう。

まず荻浦の南西1km、加布里湾に注ぎこむ長野川の旧河口左岸に位置する釜塚古墳(円墳、径56m)、さらにその南西500m右岸に位置する一貴山鏡子塚古墳(前方後円墳、全長103m)が著名である。いずれも糸島地方を代表する大型古墳である。長野川の旧河口を挟んで両岸に対峙する。

釜塚古墳の南東には標高118mの宮地嶽があり、その山麓にも少なからず古墳が分布する。

北麓には1983年に宅地造成にともない発掘調査を行った神在上ノ山古墳群がある。300㎡足らずの狭い調査区内から3基の古墳(横穴式石室)が発見された。いずれも後世の開墾によって墳丘が大破していたが、なかでも比較的遺存状況の良かった1号墳の横穴式石室からは水晶製管玉が4個出土している。その他、宮地嶽の西麓、東麓にも各数基単位の後期古墳が確認されているが、調査は行われておらず詳細は明らかでない。

釜塚古墳から長野川を遡ること2km、右岸丘陵上には6世紀前半に築かれたとみられる東二塚古墳(前方後円墳)がある。1989年に行われた測量調査によって墳丘長45m、2段築成で周囲に周溝をめぐらすとみられる。対岸には真方古墳群があり、A-1号墳は6世紀中頃に築かれた帆立貝形の前方向後円墳、C群は4世紀後半の低墳丘古墳群で、1号墳(円墳)の主体部(箱式石棺)内から面径9.2cmの方格T字鏡が出土している(図版8-b)。

真方古墳群から川をさらに2kmほど遡ると左岸丘陵上には日明古墳群がある。柳田康雄による精力的な踏査によってその存在が知られて久しいが、その後の詳細な調査の手が及んでいないため、個々の古墳の詳しい内容については明らかではない。しかし、林崎古墳(前方後円墳)については筆者が以前に墳裾の箱式石棺から出土した内行花文鏡片、古式土師器を紹介し、長野川流域で最古期の前方後円墳である可能性を指摘した。

そのさらに上流域には長嶽山古墳群、別処古墳群など5~7世紀の群集墳がある。長嶽山古墳群は長野川右岸の独立丘陵上に築かれた総数14基からなる5~6世紀の古墳群である。群の最南端にある1号墳(奥の院古墳)は南に低平な前方部を持つ前方後円墳である可能性が高い。別処古墳群は左岸の沢斜面に築かれた6世紀末~7世紀の群集墳である。県立糸島高校には当古墳群出土と伝える焼成前に人物像を線刻した須恵器長頸壺が収められている。

荻浦の南から北西に向かって流れる多久川の中流右岸には多久口木古墳群がある。3基からなる古墳群のうち2基が調査され、1号墳は片側に張り出す前室を有する複式の横穴式石室であることが判明した。2号墳からは2枚の鉄地金銅貼棘葉形杏葉が出土している。



第4図 糸島低地帯俯瞰(加布里湾上空から)

また口木古墳群と多久川をはさんで左岸に対峙する坂元古墳群では2号墳奥壁下の屍床から獸文鏡が出土している。^{註5}

荻浦の東に隣接する大浦土地区画整理事業地内でも丘陵部を中心に古墳～近世にいたる多数の墳墓遺構が調査されており、こと古墳時代遺構としては南面する尾根先端に築かれた箱式石棺を主体部とする前期の方形周溝墓、後期の横穴式石室墳等の調査が行われている。また、南では多久川を挟んで右岸の元多久遺跡では県営は場整備にともなう発掘調査の際に火葬土壌や掘立柱建物、溝等が発見されている。詳細が明らかにされていないが、荻浦遺跡とは地理的にも時間的にも近接する遺構が多く、注目される。

一方、糸島低地帯を挟んで北の志摩半島西南部では、可也山南麓には荒無田古墳群、相川古墳群、罇口古墳群など中期～後期の群集墳が確認されている。これらは1グループを10～15基で構成する群集形態をとっており1～4基程度で1グループを構成する荻浦周辺の古墳群とは趣を異にしている。しかし、昭和30年代に相次いで行われた蜜柑園造成によってその多くが破壊の憂き目にあい、詳細が明らかにされないまま姿を消した古墳も多いという。幸いにも荒無田古墳群についてはその一部が故大神邦博氏によって概要が報告されている。氏が1号墳と称した横穴式石室墳から「小札頸鏡片」をはじめとして鉄器、装身具、土器等が出土したことが紹介されている。^{註9}

可也山東南麓には前期の前方後円墳を有する稲葉古墳群がある。^{註10}1号墳は全長40～45mで前方部が撥形を呈し、後円部墳頂から竪穴式石室が検出されている。2号墳は前方後方墳として報告されたが、地形的には尾根筋に近接して築かれた2基の方墳としてとらえたほうが自然に思える。

稲葉古墳群の北1.5kmには糸島第2の墳丘規模を誇る井田原岡古墳がある。全長90m以上はあるとみられるが、未調査で後円北半部の損壊が著しく、規模、主体部の構造の解明は今後の調査に期待がかかる。古墳出土の長直子孫内行花文鏡と埴輪が福岡市博物館に収蔵されている。^{註11}

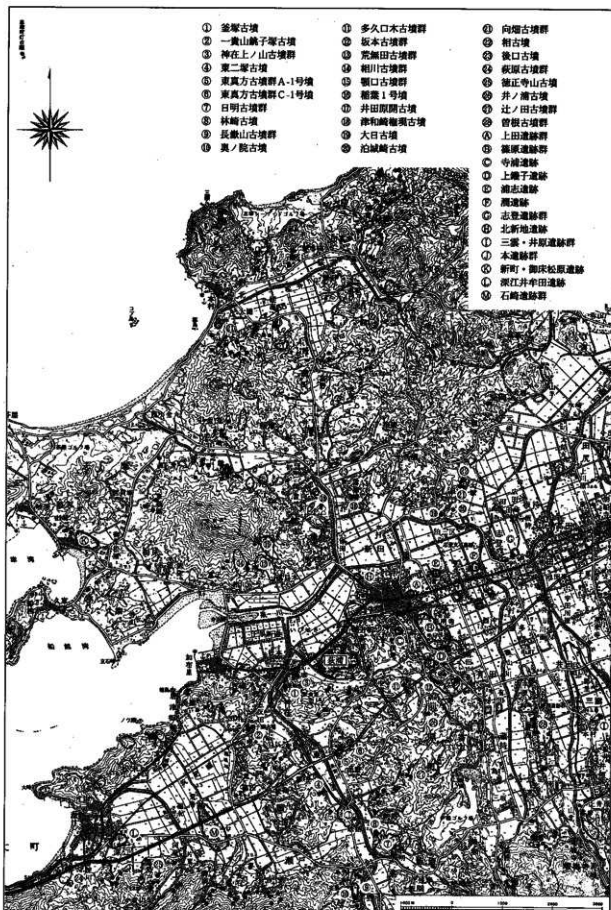
井田原岡古墳から南西に800m、西に突き出た丘陵先端には竪穴式小石室、箱式石棺を主体部として群集する四反田古墳群がある。2号墳の竪穴式小石室内から仿製四獣鏡が出土している。^{註12}

稲葉古墳群の東、初川を挟んで対岸の津和崎集落裏の丘陵先端には仿製画像鏡を出土した津和崎権現古墳がある。中心にお堂を配す円丘の南西裾に前方部の一部とおぼしき低い土盛が観察され、前方後円墳とみられている。鏡はお堂の直下の箱式石棺から出土した。

旧加布里湾の最奥部、泊一区の丘陵南端には大日古墳があった。明治42年に発見され、半肉彫獣帯鏡2面、環頭大刀2振、管玉15、勾玉1が出土したという。古墳の正確な位置はわからないが、小字名から推定すると現在の泊保育園付近ではないかと思われる。城崎古墳は径32m以上を測り葺石を有する円墳で、周溝から陶質土器が出土したとされるが詳細は未報告である。同地区からは他に半肉彫獣帯鏡が1面出土している(糸島高校蔵)が、出土地点、経緯については明らかでない。^{註13}糸島最古の前方後円墳とされる御道具山古墳、泊大塚古墳は、同地区に含まれるが、立地的には旧今津湾の最深部に位置し、今津湾側を強く意識した立地である。

糸島地方西部における古墳(時代)研究については東部の福岡市域に対して資料の収集、整理の遅滞感が拭えない状況にある。資料の整理、報告を早急に進め、情報の充実化を急ぐ必要がある。なお、当地の古墳消長の概要については考察においてまとめてみたい。

大浦・荻浦の丘陵地の東裾には標高15～20m前後のなだらかな低丘陵地帯が拓ける。この地一帯で縄文時代以降現代にいたるまで連続と人々の生活空間として利用された。北から上町遺跡群、篠



第5図 荻浦地区の位置と周辺の既知古墳分布 (1/75,000)
 (細線の囲みは古墳群、太線の囲みは主要弥生~古墳時代集落遺跡、●は古墳を示す。)

原遺跡群、寺浦遺跡、上鎌子遺跡など多くの集落遺跡が発見・報告されている。さらにその北側の糸島低地帯沿い微高地にも北新地、浦志、潤、志登遺跡群などの集落遺跡が分布している。上町遺跡群では弥生～古墳時代の墳墓群が相次いで発見され、細形銅剣、素環頭大刀が出土している。浦志遺跡A地点からは小銅鐸が、志登遺跡群では銅鐸、墨書須恵器、高麗青磁等が発見されるなど時代、内容ともに多岐におよぶ貴重な資料が報告されている。

しかし、いずれも新興住宅街のなかにあるため、調査が部分的に実施されているもの十分とはいえない状況である。古代「イト」の社会の構造を研究するうえで欠くことのできない貴重な遺跡が多いだけに、各遺跡個別の規模、構造等の調査・研究が今後の重要課題である。

荻浦地区は事業地周辺を含めて周知されていた遺跡は少なく、1981年に刊行された『福岡県遺跡等分布地図』（福岡県教育委員会）では立屋敷1～4号墳（本報告中の立屋敷1号墳、坂の下2、3、4号墳に相当する。）と荻浦集落内の荻浦遺跡（縄文～弥生時代の遺物散布地）が知られているに過ぎなかった。しかし今回の一連の調査によって縄文時代から近世にかけての多くの遺跡が新たに発見され、この地の歴史評価を一変させることとなった。

- 註1 下山正一他 「糸島低地帯の完新統および貝化石集団」『九州大学理学部研究報告』地質学14-4 1986年
- 註2 日野尚志 「筑前国怡土・志麻郡における古代の歴史地理学的研究」『佐賀大学教育学部研究論文集』第21集 1972年
- 註3 石山 勲 『釜塚』前原町文化財調査報告書 第5集 1981年
- 註4 小林行雄 『福岡県一貴山鈍子塚古墳の研究』1952年
- 註5 石井扶美子 『神在上ノ山古墳群』前原町文化財調査報告書 第12集 1984年
- 註6 角 浩行 『今宿バイパス関係文化財調査報告書』前原町文化財報告書 第42、48集 1992、1993年
- 註7 岡部裕俊 「井原1号墳の測量調査」『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書 第35集 1991年
- 註8 川村 博 『坂元古墳群』前原町文化財調査報告書 第1集 1980年
- 註9 大神邦博 「荒無田古墳調査報告」『糸島文林』九号 1961年
- 註10 柳田康雄 『稲葉古墳群』志摩町文化財調査報告書 第5集 1985年
- 註11 岡部裕俊他 「糸島地方の古墳資料集成（その1）」『福岡考古』第16号 1994年
- 註12 河村裕一郎 『四反田古墳群』志摩町文化財調査報告書 第13集 1991年
- 河村裕一郎 『四反田古墳群』Ⅱ 志摩町文化財調査報告書 第15集 1992年
- 註13 後藤守一 『漢式鏡』雄山閣 1925年
- 埋蔵文化財研究会 『倭人と鏡』1994年
- 註14 岡部裕俊 『前原地区遺跡群』Ⅱ 前原町文化財調査報告書 第40集 1992年
- 常松幹夫 『浦志遺跡群A地点』前原町文化財調査報告書 第14集 1984年
- 常松幹夫 『志登遺跡群B地点』前原町文化財調査報告書 第17集 1984年
- 岡部裕俊 『志登遺跡群』第5次調査 前原町文化財調査報告書 第18集 1985年
- 林 寛 『志登遺跡群』第4次調査 前原町文化財調査報告書 第20集 1985年

2. 調査の概要

(1) A-2 地点

a. 概要

A-2 地点は大字大浦字前田に位置する。荻浦丘陵から大浦集落の営まれる谷に向かって派生した短い尾根先端に位置する。尾根西北部では蜜柑の植樹溝が多く検出されたが遺構等は検出されなかった。南東端部では一見して顕著な墳丘は認められなかったが、露出した花崗岩塊があったため、手作業によって表土を除去し、折り重なる花崗岩塊をチェンブロックを用いて除去すると、半壊した石室が姿をあらわし古墳であることを確認した。所在地の字名から前田古墳とした。

b. 前田古墳

立地と墳丘 (第6図、図版2-a, b)

古墳は大浦谷の最深部に位置する。谷に突き出た短い尾根の先端に築かれており、先端から南方の谷への勾配は急で、谷底からの標高差は約10mを測る。墳裾を明確に規定できるほどの地山整形は行われていないため、古墳裾と尾根斜面の境は明瞭ではないが、わずかに標高31.75mの等高線上で勾配角度の違いが認められることから墳裾と推定した。墳裾が不明瞭であることから、築造当初から本来尾根と墳丘が一体化するように盛土されていた可能性が高い。下から見上げた際に墳丘規模を視覚的により大きく見せる効果を狙ったものとみられる。

表土を除去すると石室腰石がほぼ露出状態となり、墳丘盛土はほとんど遺存していなかった。墳丘基底面には旧表土は認められず、尾根筋標高32.75mから33.75mの等高線にかけて地山をカットし基底部を整地して石室を構築した後、墳丘盛土を行ったとみられる。

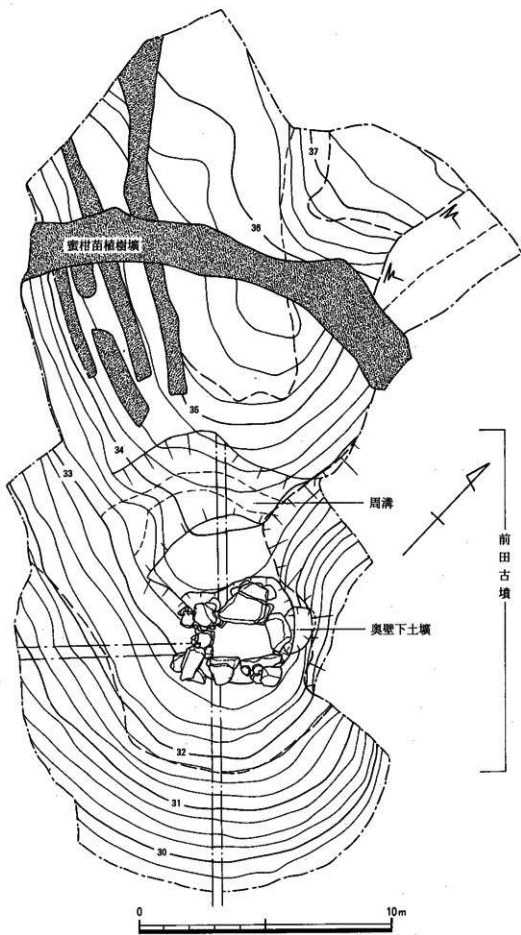
墳丘の遺存状態が芳しくないため、墳丘の形態、規模を詳細に復元することは難しいが、石室の北5.5mには尾根末筋を切断し弧状に巡る周溝が、また南では前述の標高31.75mの等高線ラインの傾斜変換線があることから径10~10.5mほどの円墳と考える。なお北周溝は一部花崗岩塊にぶつかったため掘削を途中で取り止めており、ややいびつにめぐる。

石室 (第7図、図版2-c, d, e)

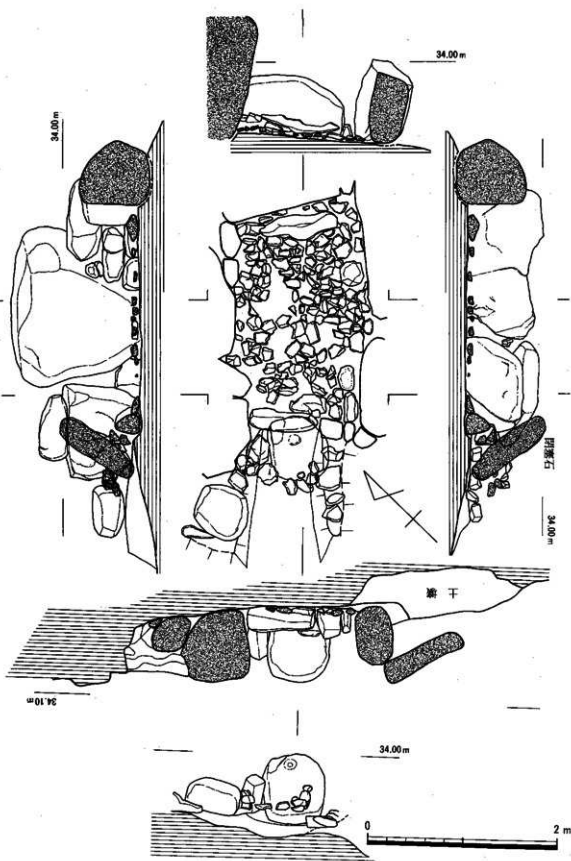
羨道床面は地山を断面U字型に掘り込み玄室にむかって登り勾配をとって柩石にいたる。前庭の有無、および羨道の長さ等は遺存状況が悪いため不明である。

羨道壁は左壁は高さ76cm、幅76cmの花崗岩角石を腰石として据え、その上に高さ28cmの転石を横積みしている。右袖は石を残していないため旧状が明らかではないが基底部に石材を据えたと思われる長楕円形の土壇を検出し、土壇の縁に根締め石が遺存していたことから、平石を据えたものと考えられる。玄室は高さ96cm、幅66cmの花崗岩の平石と高さ45cmの角柱石を柩石の外から立てて閉塞していた。隙間には角礫を詰めて充填していたようである。

玄室は破壊、崩落が著しいが、腰石が辛うじて旧状を保っていたためプランを確認することができた。玄室は主軸をN-45°-Eにとり、南西方向に開口する単室右片袖式の横穴式石室である。玄室は地山を80cmほど長方形に掘り下げて基底面とし腰石を据えている。腰石にはいずれも転石



第6図 前田古墳墳丘遺存状況 (1/150)



第7図 前田古墳石室実測図 (1/40)

が用いられていたが、左側壁の腰石が最も大きく、玄室構築の要石であったとみられる。玄室は長方形プランを呈するが法量は左側壁長2.0m、右側壁長2.4m、幅は羨道側1.18m、奥壁側で1.3mを測り、右側壁が長いためプランはややびつである。

床面には白色と赤色の角礫が敷石として使用されていた。

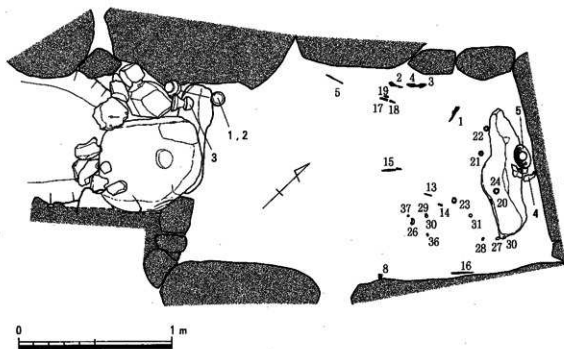
遺物の出土状態（第8図、図版2-f）

玄室左半部に敷石を剥がした跡がみられ出土遺物も床面からかなり浮いた状態で散乱していたことから、盗掘による攪乱を受けたとみられるが、埋土中からは少なからず副葬品が発見された。出土位置は玄室奥壁寄りの左半部を中心に鉄鎌、刀子などの鉄器が、右半部では耳環、玉などの装身具が集中して出土した。また板石と奥壁の間から須恵器提瓶と土師器直口壺が、また柩石上には須恵器甕、蓋付無頸壺が置かれていた。鉄器、装身具類はいずれも床面からかなり浮いた状態で出土しており、大きく攪乱を受けているが、装身具類が奥壁側だけで出土していること、石室の幅が狭いことから遺体は石室の主軸方向に沿って頭位を奥壁にむけて葬られたとみられる。

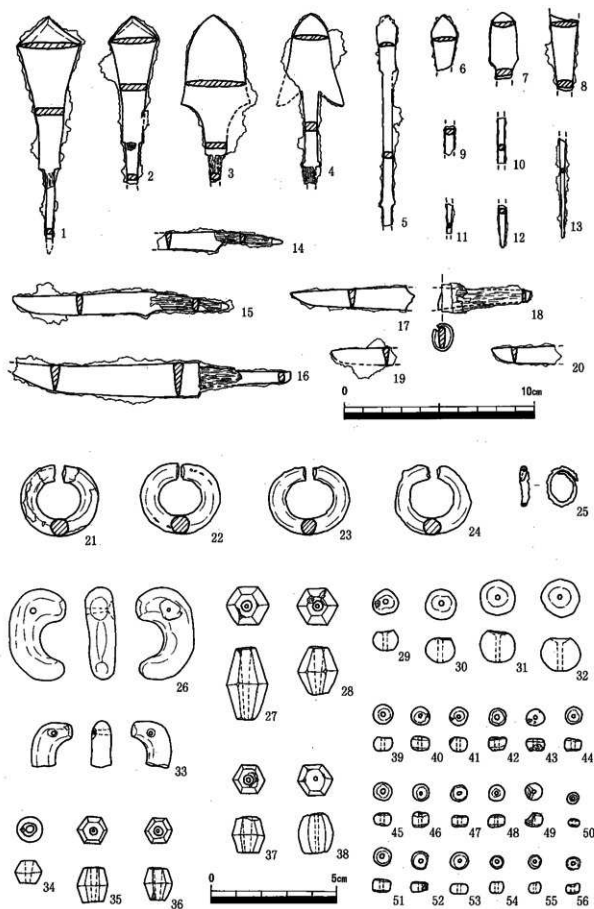
奥壁に近接して長さ80cm、幅20～27cm、厚さ10cmの平石が置かれていた。副葬土器がこの石の上背後に据え置かれていることから埋葬当時の状態を保っていることは明らかである。この石の用途について、棺台、枕石の二つの用途が想定できる。石材は中央から両端にむかって緩やかな凹みを有し、この凹み付近に各1対の耳環が出土しており、特に左側の耳環は床面直上で出土し、その配置から原位置に近い状況を保って出土した可能性が高いと考えられること、また盗掘、攪乱を受けているとはいえ、石室の左奥部では武器、工具類、右奥部では装身具を中心に出土しており、石室の左右で出土物の内容に差異が認められることなどから、性質を異にする2体の遺体を並葬した可能性が高い。石材は枕石として使用されものと考えられる。

出土遺物（第9、10図、図版3、4）

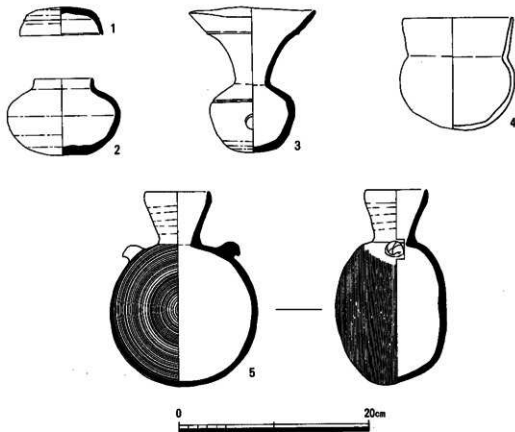
玄室内からは以下の遺物が出土している。



第8図 前田古墳石室内遺物出土状況図（1/25）



第9図 前田古墳石室出土鉄器、装身具実測図(1/2、1/3)



第10図 前田古墳石室出土土器実測図 (1/4)

鉄器 (第9図、図版3-a)

鉄鐙 (1~13) 1、2、3は圭頭式、4は三角形形式で脇袂を有するものである。5~8は柳葉式の範疇に含まれるものである。

刀子 (14~20) 14、15、17は小形、16は中形である。15は刃部長7.2cm、16は9.7cmを測る。18は鞘金具が遺存する。

装身具 (第9図、図版3-b)

大半が玄室右奥部からの出土であるが、盗掘によって攪乱されており原状を保ったものはなかった。

耳環 (21~24) 21、22が玄室右、23、24は玄室左からの出土である。各1対で使用されたと思われる。後者は攪乱のため表面が腐食し遺存状況が悪い。いずれも銅地に金メッキをほどこしたもので、前者がやや大きく径も太めである。

指輪状環 (25) 鉄線地に銅メッキしたものを指輪状にまげたもので長径1.5cm、短径1.2cmを測る。断面は幅3.9mm、厚1.6mmの菱形で線の両端は剣先状に尖る。出土箇所不詳。

メノウ勾玉 (26、33) いずれも右半部から出土した。26はほぼ完形。33は頭部のみ出土で前者より一回り小形である。

切子玉 (27、28、34~38) 38は青色透明のガラス製、他は白色透明の水晶製である。30は算盤玉状であるが、他は断面六稜タイプである。38は中央の稜を持たず紐通し孔も細い。大きさは最も大きい27から最小の34までばらつきがあり全体的に色、形、大きさでまとまりを欠く。

丸玉、小玉 (29~32、39~56) 29~32はメノウ製の丸玉、39~56はガラス製の小玉である。

土器 (第10図、図版4-a)

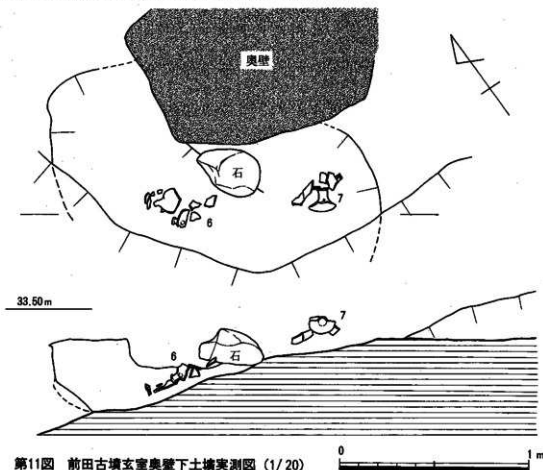
須恵器 (1~3、5) 1、3は榎石上、2は榎石下の玄室内からの出土。1は2の蓋が落下した

神田 番号	図版 番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
1	4-1	蓋	1号墳石室内	2.9	8.6		白色砂粒	暗灰色	良好	
2	-2	短頸壺	1号墳石室内	8.1	6.3		白色砂粒	暗灰色	良好	
3	-3	甌	1号墳石室内	15.2	13.2		白色砂粒	暗灰色	堅緻	
4	-4	壺(土師)	1号墳石室内	11.9	12.4		精良	茶色	良好	外面へら磨き
5	-5	提瓶把手	1号墳石室内	20.5	6.6		白色砂粒	黄茶灰褐色	良好	
6	-6	高杯	1号墳奥壁下土壌	14.3	22.0	13.8	白色砂粒	淡赤・茶色	軟質	
7	-7	高杯	1号墳奥壁下土壌	15.7	22.1	13.1	白色砂粒	橙褐色	軟質	
8	-8	壺	1号墳墳丘盛土内	97.6	66.4		長石・石英質	明赤褐色	良好	雲母の中砂粒も含む

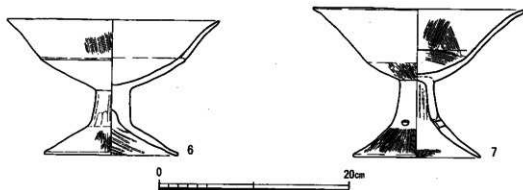
第2表 前田古墳出土土器観察表

ものとみられる。4、5は奥壁下、枕石背後に据えられていたものである。いずれもほぼ完形に復元された。1は蓋で体部と天井部との境に明瞭な段を有し口縁部は裾広がりに口唇部にむかって広がる。口唇部は尖り気味におさめる。2は無頸壺で肩は張らずなで肩きみで口頸部はほぼ直立する。胴下半部は回転へら削りによって仕上げる。3は甌で口頸部径が胴部よりも肥大化している。胴部の肩にはへら描きの沈線がめぐり、肩が張る。円孔は胴中位より若干下方に設ける。5は提瓶で体部上半にかき目を施し、下半は回転へら削りを行なう。肩部に付設された耳は釣手状をなす。

土師器(4) 4は直口壺である。内外面ともへら磨きによって仕上げられている。内外面とも濃赤褐色で、焼成も良く器表に光沢を残す。底部に黒斑を有す。



第11図 前田古墳玄室奥壁下土壌実測図 (1/20)



第12図 奥壁下土墳出土高杯実測図(1/4)

c. 奥壁下土墳(第11図、図版4-c)

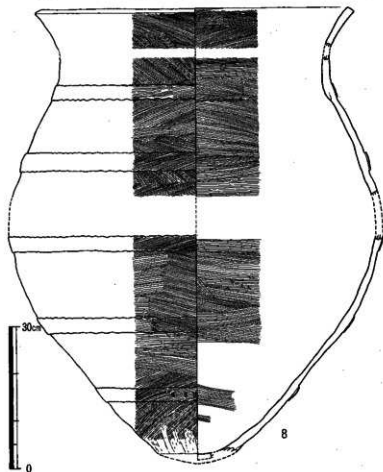
前田古墳の玄室背後は土採りによって崖面となっていたが、奥壁下から崖面にかけて石室掘り方とは別に不正楕円形状に黒色土層が認められ、土中から薄い赤色の土器片が露出していた。黒色土を掘り下げたところ土器片は土師器の高杯であることが判明した。さらに南側の黒色土を掘り下げるとさらにもう1個体分の高杯が姿を表した。この黒色土の溜りは東を土採りで、西を古墳石室掘り方でそれぞれ破壊され、全形は明らかでないものの現状では南北に主軸をもつ楕円形状を呈し、

南北長92cmを計る。底面は南に向かって深くなる。祭祀行為に伴う土器廃棄場とみるべきであろう。

出土土器(第12図、図版4-d 6, 7)

いずれも高杯であるが、6は杯底部と口縁部、脚柱部と裾部との境が明瞭で、脚柱がやや短い。脚部の透かし円孔は認められない。これに対し、7は脚柱部と裾部との境が不明瞭で、6よりも長脚で透かし円孔が三方にある。

図示しなかったが、この他に小型丸底壺口縁片も出土している。



第13図 壙棺復元推定図(1/8)

d. 壙棺

前田古墳の残存盛土を除去する最中に大型の土師器壺の一部とみられる数十片の土器片が出土した(図版4-b)。資料は底部から口

縁部にかけての破片と推定しているが、残存率が少ないため、器形を接合復元することはあえてせず、図上での復元に留めた(第13図)。

胴部最大径部と口縁下部に相当する部位を確認できなかったが、器高は96cm、口径66cm、胴部最大径が78cm程度に復元できる大型の甕である。底部は胴部との境に稜をもつが凸レンズ状に丸みをおびる。胴部は砲弾型を呈し、胴上部から口縁にかけての屈曲はなだらかで、口唇部にかけて緩やかに外反する。胴部には11~14cmの間隔で幅3cm程の扁平な凸帯を計5条貼りつけており、凸帯の上下縁を波状に擠み裝飾性に富む。胴最下部では底部との境に稜を作るため縦方向の削りが施されるが、他の箇所は概ね横あるいは斜め方向の粗い刷毛調整で仕上げている。焼成は良好で、色調は赤褐色~黄褐色。胴下部に黒斑が観察された。

この大型甕はおそらく壙棺として当地に埋納され、前田古墳の築造に際し破壊されたものとみられる。甕は底部の破片も発見されており、墓壇底面まで完全に破壊され、土器の一部が墳丘盛土内に混入したと考えられる。甕は1個体分しか発見されていないことから単棺で使用されたとみられる。前田古墳の下からは前述の土器廃棄土壌の他に玄室右側壁下にも土壌がみられた(第7図)が、壙棺との関連性は不明である。

e. 小結

前田古墳は墳丘径が10m強と小規模なわりには左側壁に顕著なように石室に巨石を用いていた。袖石を含めて腰石が大きいことが特徴といえる。

遺体の状況について、まず石室は幅が狭く遺体は主軸方向に沿って置かれたものと考えられる。奥壁下には合葬を意図した枕石が置かれていた。この枕石を境に左側に武器、工具、耳環、右側からは装身具が集中して出土した。副葬品の内容差を性別と考えれば左側に男性、右側に女性が安置された可能性が考えられる。

古墳の築造の時期については追葬時に閉塞石下に掘えられた須恵器の甕、短頸壺を田辺昭三の須恵器編年に照らし合わせるとTK43型式に対応するものとみられることから、追葬の時期は6世紀後半、築造はこれを超える段階に比定できよう。

出土壙棺について糸島の弥生後期末以後の大型壙棺墓は集団墓地の中で発見されることは稀で、逆に単独の特定個人墓、あるいは2~3基の特定集団墓として発見される例が多い。

萩浦に近い長野川中流左岸低丘陵上の東二塚遺跡^{註1}では丹塗り単棺内からガラス製銅、ガラス管玉、ガラス丸玉が出土したことが報告されている。近隣の東五反田遺跡^{註2}では方形周溝墓の中心主体を占めており、棺内から刀子状の小鉄片が出土している。東若宮遺跡^{註3}では丘陵斜面上に単独で出土しており他の墳墓遺構と共存していた可能性は低い。前田例も若宮例と似た立地を示し単独墓であったと考えられる。土器廃棄土壌はこの壙棺墓の葬送儀礼に伴う祭祀土壌である可能性が高い。壙棺および高杯はとりあえず、柳田編年のⅡ-a期に位置づけておく。

註1 原田大六 『実在した神話』 1965年 学生社

註2 『伊都』-古代の糸島- 1993年 前原市教育委員会

註3 前原市教育委員会が1985年に発掘調査。未報告。

(2) A-3地点

a. 概要

A-3地点は標高69mの丘陵頂部一帯で区画整理事業地内の最高所にあたる。地籍上は分水嶺を境として大字荻浦字立石、宮ノ後、大字多久字下多久にまたがっている。分布調査時には鬱蒼とした竹林と雑木に行く手を阻まれ地形の十分な観察ができなかったが、西端の円丘については低墳丘墓の可能性があるととして注視していた。

雑木伐開後ただちに現況測量を行なったところ西円丘から東にむかって長さ6mほどの低平な突出部が認められた(第15図)。低墳丘の前方後円墳である可能性がでてきたため取りあえず想定される主軸方位と円丘中央からそれに直交する方向に、さらに円丘から北西に伸びる尾根筋にそれぞれ土層観察ベルトを設定した。次に西円丘部については頂上部から四方にむけて幅50cmのトレンチを設定した。また派生する尾根筋は表土を除去して遺構の有無を確認することにし、調査区の中央鞍部から東部にかけて小型バックホーによって表土を除去し、遺構の検出を行った。

円丘部では東トレンチ表土下30cmで銅鏡が出土し(図版7-c)、すぐに主体部の確認作業に切り替えた。現場では円丘から派生する極めて低い突出部を前方部として確認するにいたらなかったため取りあえず円丘部を独立した円墳と推定し1号墳とし、その南東で検出した「[」形にめぐる溝の南部を2号墳とした。また中央部に尾根を縦断した浅い溝を確認し、周辺で古式土師器片の散乱を確認したため、墳墓の周溝の可能性があるととして3号墳とし、1992年の速報で報告した。

しかし1号墳を円墳とするには墳丘の東裾を規定しうる丘尾切断溝等が認められず、墳形の決定に躊躇していたところ、吉富秀敏、柳田康雄氏らによって周溝状の溝を前方後円墳基底部としてとらえうるとの教示を受け、また古墳周辺から出土した土器の出土状況、整理結果等を踏まえて再考した結果、本報告では墳形を前方後円墳と修正して報告することとした。また、これにともない隣接するD-1地点で発見された立石4号墳を立石2号墳と改める。

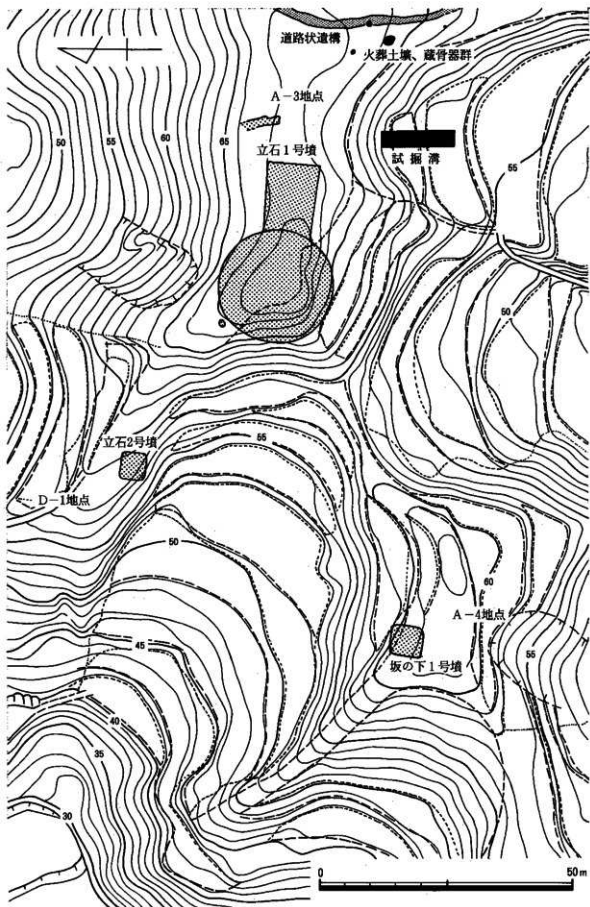
b. 立石1号墳

立地と墳丘(第14~17図、図版5, 6)

立石1号墳は東西長60m、南北幅15mほどの平坦面を有する狭長な丘陵頂部の西端最高所、標高69m地点を頂として築造された前方後円墳である。丘陵の南、西斜面は近世以降畑作にともなう段々畑の造成が繰り返され(第14図)、近年では蜜柑園として利用されていた。また北東の沢斜面は地盤がゆるく長雨時には度々の地滑りにみまわれ、側面がかなり抉られてしまい、古墳の周囲は築造当初と比べると地形の改変が徐々に進行し、墳丘も大きく姿を変えていた。このため古墳の墳形、規模の復元が難しいものとなった。

古墳は主軸をN-85°-Wにむけた前方後円墳である。図上復元による主軸方位の誤差を考慮すると東西方向を強く意識して築造された古墳といえる。

前方部の墳部および後円東南半部の墳丘流失、破壊が著しいため墳形、規模を明らかにするのは困難であるがえて復元を試みた。まず後円部墳裾は東南裾について標高64.75mの等高線上の傾



第14図 A-3、4、D-1地点周辺地形と遺構の配置図 (1/750)

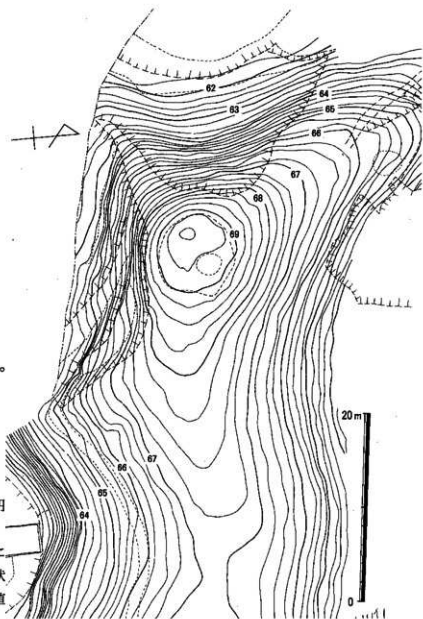
斜変換線、北東では土器棺南東の標高66m等高線下の傾斜変換線を基点として墳裾の円弧を復元すると、後円径19m弱となる。

前方部は南クビレ部付近にわずかに残る周溝状の地山整形の底線を東に延長し、丘陵を南北に縦断する溝状遺構を前方端部として推定主軸線を対象軸に北に折り返した。その結果クビレ部下からの前方部長は11m強、前方端については溝の方位を尊重すれば南東に出張ったややいびつな形態となる。クビレ幅は8m強、前方端部幅は8.3mとなり、前方部端はわずかに広がる程度に復元される。以上から占墳の全長は30m前後と推定した。

墳丘高については現状では後円部で2.2m、前方部はクビレ部で1mを測るが、後円部は予想以上に削平、破壊が進んでいた。遺存状況が悪いため、いずれも参考数値程度にとどまる。

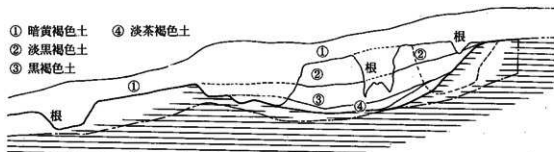
墳丘の築造は基本的には丘陵西

端円丘部付近の地形を利用した地山整形によるものとみられる。墳丘の土層観察によれば後円部では表土下でいきなり茶褐色の真砂土層が検出され、盛土層は認められなかった。また北裾では表土下に真砂土の二次堆積層が認められ、さらにその下に黒色粘質土層が堆積し、その下層から真砂土地山が表れた。後円端部付近では赤色ローム層が表層に遺存していた。真砂土は萩浦の丘陵上では通常表土下にある厚さ80cmほどの赤色ローム層のさらに下層から検出されている。後円部では表層

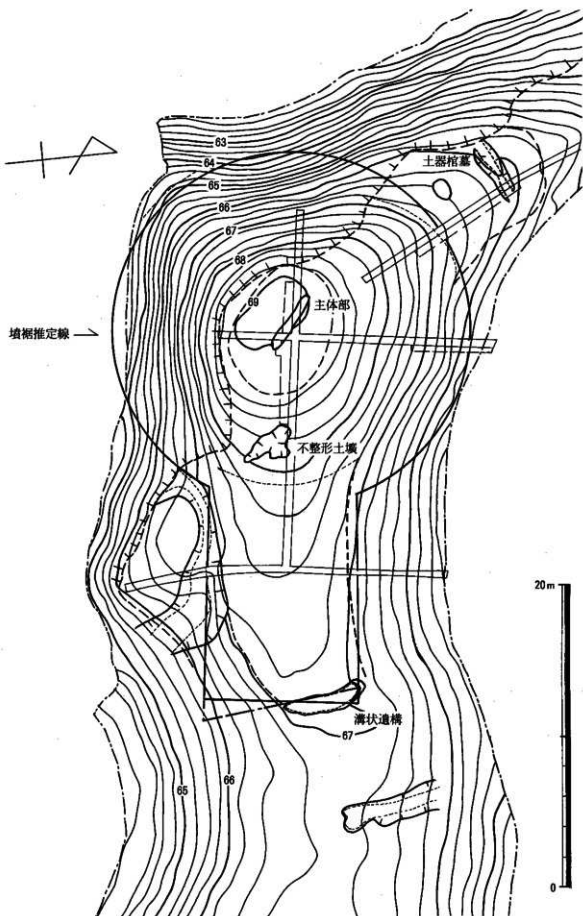


第15図 立石1号墳調査前地形図 (1/400)

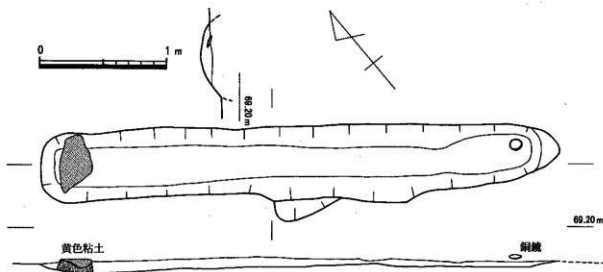
- ① 暗黄褐色土
- ② 淡黒褐色土
- ③ 黒褐色土
- ④ 淡茶褐色土



第16図 立石1号墳前方部南墳裾周溝土層図 (1/40)



第17図 立石1号墳丘遺存状況図 (1/250)



第18図 立石1号墳主体部実測図 (1/30)

にこの赤色ローム層および旧表土層が全く検出されなかったことから後円部墳丘全体が削り出しによる整形を主として築造されたものとみられる。また前方部南裾付近では溝状の地山整形が確認されており、北墳裾付近では溝状遺構からクビレ部まで直線的に地山整形されている状況が認められることから前方部も地山整形によって築造された可能性が高い。

盛土の有無について、後円部は主体部の検出面の深さが地表から30cmほどと浅かった。通常の割竹形木棺直葬では浅くとも深さ1m前後の堅墳を掘って納棺している場合が多いことから墳頂部ではいくらかの盛土が行われていた可能性がある。

前方部中央では検出したa土器群を接合したところ、大形の二重口縁壺は底部を除いてはある程度まで復元することができたこと、土器が集中して出土し、築造当時の土器埋設（埋納）地点から大きく移動していない可能性が高いとみられることから、墳丘の自然流失、人為的削平を考慮しても、築造当初から前方部はさほど高い墳丘を有していたものではなく低平な現状に近い形態ではなかったかと考える。

内部主体（第18図、図版7-c～f）

主体部は墳頂中央からやや北東に寄って主軸をN-50°-Wに向けた細長い土壇として検出した。深さは現地表から30cmで、全長4.12m、幅42～63cmを測り、南東に向かって広がる。土壇の深さは4～12cmを測る。土壇は南東端から1.5m地点で一度若干浅くなり、そこから北西部にむかって深くなる。前述のとおり埋葬施設上面の詳細は明らかにし難いが、土壇が狭長な形態を呈しており、その断面はU字形を呈していることから割竹形木棺の直葬にともなう棺床としての2次墓壇であるとみられる。土壇西端では棺固定のために築き固められたとみられる黄色粘土を検出した。しかし他に棺の目貼り粘土等は検出されていないため棺の詳細も明らかではない。また土壇埋土中からベンガラ粒を検出しているが、微量かつ散逸的に分布していたため、塗布された類のものではなく土壇あるいは棺内に散布された程度のものであろう。

土壇の南東端から1面の銅鏡が、底面直上で鏡面を上に向け、やや内傾した状態で出土した。概要の項で述べたとおり古墳の所在を確認するための試掘時に図らずも出土したものである。周辺に

擾乱等によって荒らされた痕跡は認められなかったことから、副葬当初の位置に近いものと考えられる。土壌底面近くで発見され、鏡の下層に異種土壌の混入も認められなかったことから、棺内に鏡面を上にして副葬されていた可能性が高い。

出土遺物

銅鏡（第19図、巻頭図版、図版8-a）

主体部土壌南東端から出土した。面径9.06~9.115cmを測る小型のいわゆる「方格T字鏡」である。鏡の厚さは図上左半部が厚手で、平縁のもっとも厚い部位で3.7cm 同右半部のもっとも薄い内区では1mmに満たない箇所もある。鈕厚は9.10mmを計る。

鏡背の文様は外区から素文帯、波長の長い復波文帯、扁平な外行鋸歯文帯、擲歯文帯を外縁とする内区は、大きな方格の外側では各辺の中央にT字文、その両脇に二乳を配し、計八乳を設ける。その間隙は不定の小弧文線で填めている。方格内部では12個の小円座乳を並べ、その内側にさらに方格を設け、その中央に円鈕を置いている。鈕孔は方格の辺にはば平行する。

文様は全般に不鮮明で、特に図上の右上部位は文様



第19図 立石1号墳出土鏡拓影および実測図(1/1)

細部の判別が難しい。また方格内の12個の乳のうち4分の3にあたる8個の乳が鑄出しが不十分であるなど、鑄上がりの悪さが目立つ。

土器棺墓（第20図、図版9）

後円部の北北西墳裾、尾根筋から少し西谷寄りで見出した呑み口式の土器棺である。遺構検出時に上棺の一部が姿を表した（図版9-a）。埋納土壌プランは長さ110cm、幅97cmの不正楕円形で上棺が下棺よりも一回り大きいため棺を水平に埋置する意図が働いたのか若干上棺側が横穴状に掘り添えられていた。棺は土壌のやや南側に寄ってN-79°-Eに主軸をとり埋置されていた。埋置角度は水平面からの傾斜角で2°を測る。

上棺からは頭骨が顔面を南に向け、下顎骨は頭骨の左下に遊離した状態で、下棺からは肢骨とみられる小骨片が出土している。副葬、供献遺物は認められなかった。

出土土器（第21図、図版10-a、b）

2は上棺、3は下棺に使用されたいずれも二重口縁壺である。

2は胴部最大径が胴部のはぼ中央にあり上半は球状、下半は直線的にすぼまり、底部は尖り気味の丸底である。頸部は締まりがなく短く立ち上がり、受け部から口縁部がほぼ直立する。口唇部は断面コの字形を呈するが稜は鈍い。胴外面はタテハケ、内面下位は縦方向へう削り、中位から上位にかけては横方向へう削りを行っているが、全体的に器壁が厚手に仕上がっている。口頸部はヨコナデで仕上げられる。3に比べると焼成があまり。

3は倒卵形の胴部を有し最大径は胴上端から3分の1にある。頸部は内傾して立ち上がり受け部にむかって鋭く外反する。口縁部は受け部から若干内湾ぎみに外傾し端部は外方にむけて緩く摘み出し、丸くおさめる。胴外面はタテハケののち最大径部に幅6~8cm前後のヨコハケ帯を施す。また肩部上方にへう描きの有軸羽状文が一周し、その上下を一条の沈線が挟んでいるが上の沈線は中途で止まる。内面は下位ではへう削り、中位から上位にかけてはへう削りののちヨコハケを行い、胴部と頸部の境に一部ヨコナデ仕上げを行う。口頸部はヨコナデで仕上げているが、頸部内面に一部ヨコハケが行われている。2に比べ胴部の削りが丁寧に行われており、胴中央部では厚さが2mmに満たない部位もある。また焼成も良好で硬質を保つ。内面のみ口縁から胴中位のハケ調整部まで黒い漆状の顔料を塗布している。

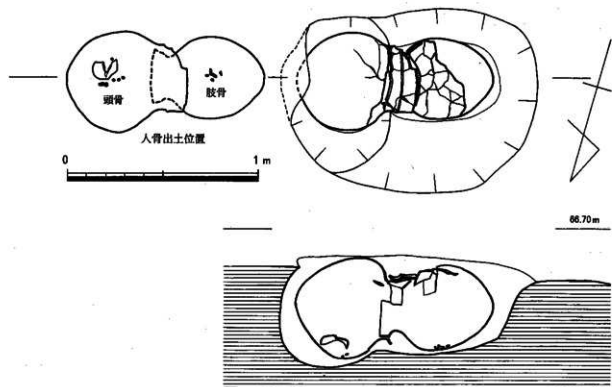
不整形土壌（第22図、図版7-b）

後円部から前方部へ続く東南斜面表土下から大形二重口縁壺の破片が散乱状態で発見された。土器片を1点ずつドットマーキングして取り上げながら掘り下げたところ土器群から少し後円部に寄った地点で不整形な土壌を検出した。土壌内からさらに破碎した土器片が出土した。

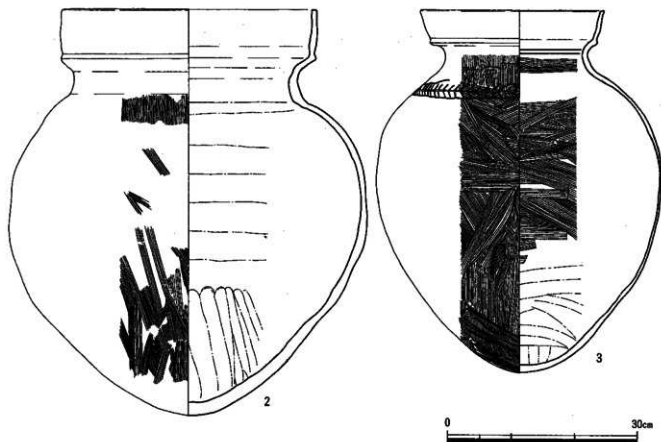
土壌は主軸をN-31°-Wにとり、北から3段に深くなる。1段目と2段目の境には土壌の立ち上がりともみられる隆起部も認められ、少なくとも、3基の土壌が切りあっていることも考えられたが、土層観察では明瞭な切り合い関係を確認できなかった。便宜上北から1区~3区とする。埋土は若干黒ずんだ真砂土であり人為的に埋め戻されたとみられる。

土器は3区からのみ出土しているが、いずれも底から10cm以上浮いた状態で出土した。表土で検出した土器片は3区上層の土器が表出したのであろう。2区と3区の境には柱穴状の掘りこみもみられたが往痕跡等は確認できなかった。

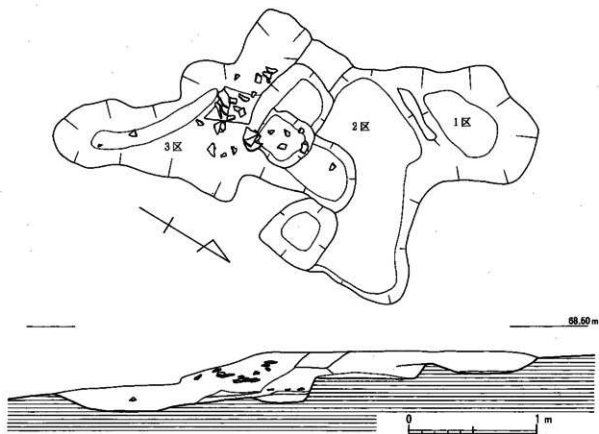
土壌内土器は破碎しているものの後世の攪乱を示すものではなく、また甕、直口壺片等を伴出し



第20圖 立石1号墳北西襖土器棺墓実測図 (1/20)



第21圖 立石1号墳北西襖土器棺使用土器実測図 (1/6)



第22図 立石1号墳不整形土墳実測図 (1/30)

ている。古墳築造あるいは埋葬時の祭祀にともなる廃棄土墳とみられる。

出土土器 (第24, 25図、図版10-c)

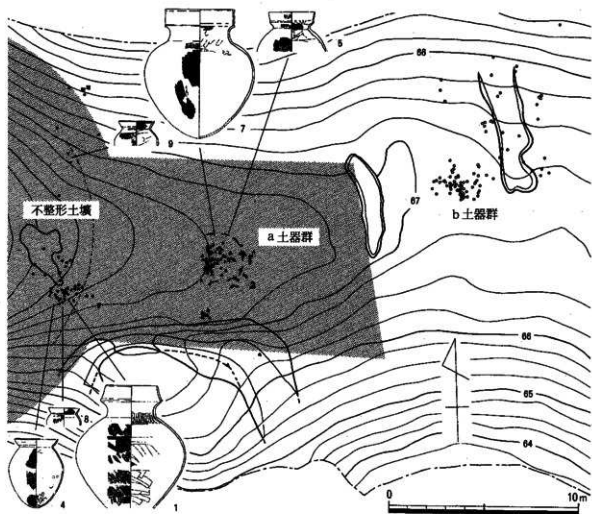
1は大型の二重口縁壺で、底部付近のみが未発見であるため底部打ち欠きを行っていた可能性がある。胴部最大径が中央より若干上位にあり、そこから底部に向けては直線的に、頸部に向けては弧状緩やかにカーブを描く。頸部は短く内傾ぎみに立ち上がり、受部から口縁に向けて内傾し口縁端部にいたる。口唇部は断面コの字形に仕上げるが、角は丸みを帯びる。胴部外面は細かいタテハケによって仕上げ、肩部に幅2.5cm程のヨコハケが一周する。内面は胴中位より下は左斜め上方ケズリ、上位は左ヨコケズリによって仕上げ、口頸部はヨコナデで仕上げる。内面胴部と頸部の接合部には接合時の接着、押圧痕が明瞭に残る。

4は甕で胴部は倒卵形、口頸部は内湾しながら上外方へ開き口縁にいたる。口縁は断面コの字形に整形し、内側を若干縮みあげる。胴外面はタテハケの後に肩部のみヨコハケ。内面はケズリで仕上げ口頸部はヨコナデを行う。6は甕肩部片で外面に赤色顔料を塗布している。

8、9、11は直口壺で北東斜面から出土した。8は胴外面が細かいタテハケ、内面は口頸部屈曲部までケズリ。口頸部は外面ヨコナデ。内面ヨコハケである。9は胴肩部に粗い1条のヨコハケがめぐり、11は口頸部のみ出土である。外面はヨコナデで仕上げているが粗いナメハケの痕跡を残す。

土器群 (第23図)

前方部のほぼ中央、および前方部東端から東に6mの丘陵中央の2箇所で見出し、前者をa土器



第23図 立石1号墳丘周辺土器出土地点点描図 (1/200)

群、後者をb土器群とした。双方の土器群とも近くで検出した溝状遺構と関連付け、各々低墳丘古墳とそれらに対する供献土器群と想定した。しかし、a土器群が地山に貼り付いたように出土し、かつ集中して出土しており、遺構の損壊に伴って散乱したと考えるよりも地表に据えられた、あるいは廃棄されたと考えるほうが妥当であること、墓域を想定した空間内に主体部等の施設の痕跡が認められず、墳墓遺構と断定できなかったこと、など低墳丘古墳の存在を想定するには困難であったため再検討することとなった。

a土器群は大、中2個体分の二重口縁壺片が確認された。土器の分布が半径1.5mの円内に集中しているが一部南斜面に転落しているのが確認されている。大型二重口縁壺は縦割りした全体の2分の1、中形壺は口縁部付近が回収された。

b土器群はa群に比べると土器の出土状態は散逸的で、北斜面への転落、拡散が著しい。こちらでも2個体分の二重口縁壺片の散乱を確認した。残念ながら土器片は遺存状態がすこぶる悪く器表が劣化剥落しているうえ、出土総量が少なかったため、復元図化までには至らなかったが口頸部片の特徴および胎土は土器群2に類似している。

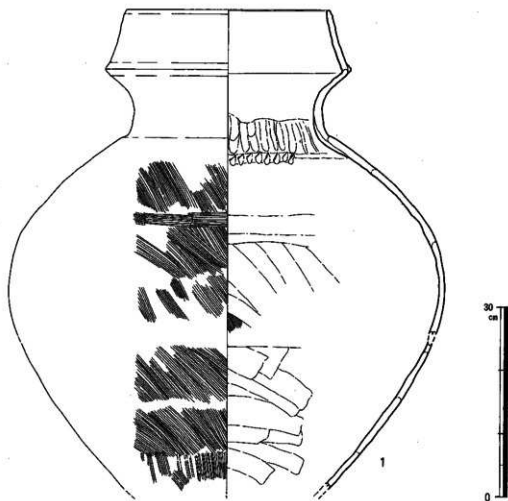
双方の土器群とも出土地点が限定され、集中化傾向が認められることから、どちらも原位置から大きく移動することなく出土したと考えられる。土器棺として埋納されていたものか、地表に据え

られたものが破損した可能性が高いとみられ、いずれにしても立石1号墳の築造、葬送にともない使用されたものであろう。

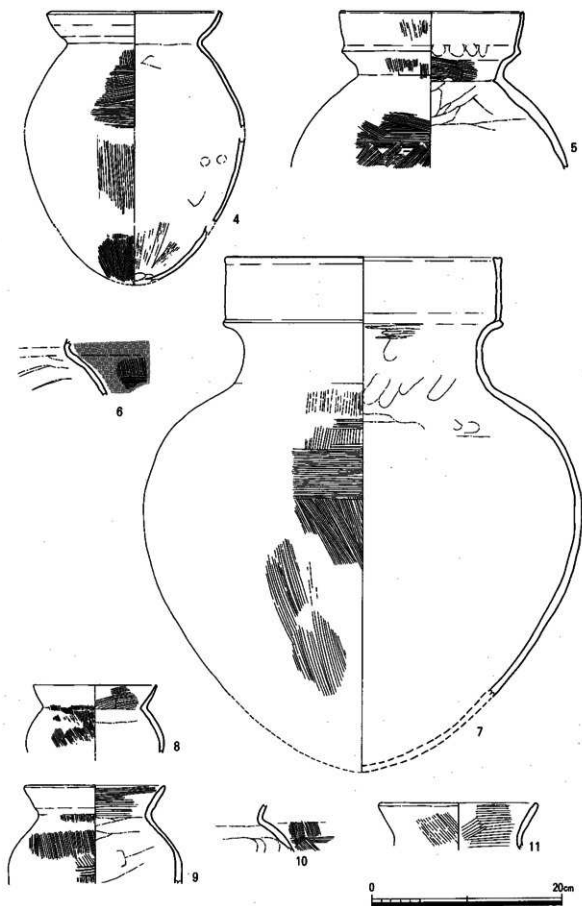
出土土器（第25図、図版10-d）

a 土器群から出土した2点を図示した。5、7はいずれも二重口縁壺である。5は中型で胴上半部のみ復元できた。ナデ肩の胴部から明瞭な口頸部が鋭く直立、外反し、受部からは口縁にむけて少し開きぎみに立ち上がる。口唇部は丸みをもって収束する。胴外面はハケの後に口頸部下では丁寧なヨコナデ、内面はヘラケズリを行うが、器壁はやや厚手に仕上がる。口頸部ではヨコナデ仕上げを行うが部分的にハケ痕跡が残る。

7は大形二重口縁壺で、底部付近のみ該当する破片がなかった。寸詰まりの倒卵形胴部を有し、肩から急速に内傾する。頸部はあまりしまらず一度外反したあと、受け部から口縁が直立する。口唇部は肥厚し上面はナデによって浅く凹む。胴外面はタテハケを基調とし、肩部にヨコハケを施す。内面は横方向のケズリを行う。口頸部はヨコナデで仕上げる。内面には研磨痕跡も認められる。



第24図 立石1号墳不整形土墳出土大形壺実測図 (1/6)



第25图 立石1号墳掘出土土器実測図(1/4)

c. 小結

立石1号墳は墳丘形態、規模等に不明確さを残すが、全長30m、後円部径19m、前方部長11m、クビレ部幅8m、前方部幅8.3mほどに復元できる前方後円墳である。現状では後円部に比べ前方部が低平で先端はほとんど開かず、近隣では二丈町徳正寺山古墳と立地、墳形ともに類似する。

墳丘は原地形を最大限に利用した地山整形を主として築造されたとみられ、墳丘盛土の明瞭な痕跡は認められなかった。前方部では南クビレ部付近を除けば人為的地形改変の痕跡すら不明瞭であった。本来薄い盛土によって簡易に整形されていた墳丘が、盛土填圧の不十分さ等に起因して流失したのであろうか。それにつけても前方部の造作は簡易という他ない。また、葺石は認められない。

中心主体部は後円墳頂部で検出した全長4.12mの断面U字形の土壌の状況と、土壌北西端部で検出した棺固定のためとみられる粘土塊の存在などから、割竹形木棺の直葬と考えるが、棺の規格等については不明である。土壌は南東側に広く掘られており、頭位は南東にあった可能性が高い。

土壌南東端から面径9.2cm 弱を測る小形の「方格T字鏡」が出土した。土壌断面に平行で、底面から若干浮いた状況で出土したことから棺内に副葬されていたものであろう。鏡面が上向きに置かれていたものとみられる。

方格T字鏡（方格T字鳥文鏡）は近年、高木^{註1}、松浦^{註2}有一郎らによって形式分類、系譜の検証などの研究が精力的に進められている。形式分類を進めている松浦は、「方格内に12個の円座乳を配列するが、十二支名はなく、かわりに両側を半弧文で囲み、さらに小さな方格で円鈕を囲んでいるもの。鈕孔はすべて方格の対角線上に位置している」ことを特徴として抽出した鏡群に位置付け国産仿製鏡ととらえた。一方、高木は文様の変遷系譜に着目し、中国鏡の可能性に含みを残す。

ちなみに市内の東真方C-1号墳からはほぼ同径の「方格T字鏡」が出土した。文様構成はほぼ同じであるが、文様の位置に微妙な違いがあり、同型鏡ではない。

この他、墳丘出土遺物として『荻浦の文化財』I（1992）で墳頂から鉄製穂柄鎌片が出土したと報告していたが、整理の結果、近世以後の農具留金具であることが判明したので訂正しておく。

後円部の北東裾では土器棺を検出し、棺内から男性小児（推定年令5～6才）の骨が出土した。棺に使用された土器は上下とも二重口緑壺である。近年、糸島地方では二重口緑壺を用いた土器棺出土例が増加し、三雲端山古墳、上町向原遺跡、荻浦坂の下4号墳墳丘下から発見されているが、いずれも器高が80cmを超える大形棺で、土器棺として成熟した規模、形態を示す。当該棺下棺は器表には黒色塗料を塗り、棺として製作されたことについては疑いないが、形態的には原形である山陰系二重口緑壺の特徴をよく残しており器高は56.4cm、土器棺としては他例に比べ小さい。柳田康雄が想定する「外来系二重口緑壺が甕棺として普及」する前段の過渡的状態を示しているといえる。類例として太宰府市宮の本12号墳ST010がある。

二重口緑壺の土器棺は糸島地方で多く出土する弥生後期からの甕棺の形態変遷の系譜には直結しないことは明らかである。棺の埋葬角度の変化等、葬法上の変化等についても再検討を行いながら二重口緑壺の土器棺の成立の背景について、山陰系二重口緑壺の故地である出雲地方の事例との比較も含め検討する必要がある。

墳丘a、b土器群はともに散乱状態で出土しているものの、双方2個体の二重口緑壺が出土し、a土器群の土器7は縦割りにされたかのように個体の約2分の1が出土した。あたかも横倒しに据え

られた土器棺の上半部が破壊され下半部が遺存していたかのような状況であり、いずれの土器群も土器棺であった可能性が指摘できる。

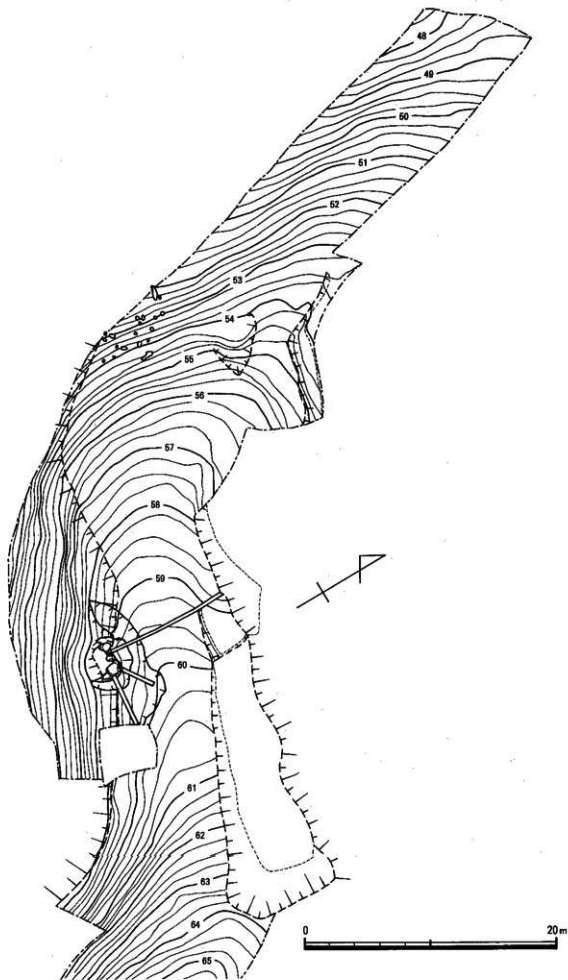
古墳の築造時期については南東土墳出土土器に注目したい。甕4は胴長の胴部の肩が張り、口縁は内湾気味に立ち上がるものの、口唇部は上に軽くつまみあげている。柳田康雄の編年案に照らし合わせると土師器Ⅱb期に位置付けられるものと考ええる。墳裾から出土した甕棺の時期とも大きな齟齬はないものと考えられ、古墳築造時期は当該期に位置付けたい。柳田の設定するⅡb型式の時期は4世紀前半に比定されている。

松浦有一郎は同系の方格字鏡の製作時期を4世紀後半～5世紀前半代の時期と推定しているが、立石1号墳の時期はこれを遡るものであり、製作開始時期について再検討が必要であろう。

- 注1 高木恭二「博局(方格規矩)鳥文鏡の系譜」『季刊考古学』第43号 1993年 雄山閣出版
 注2 松浦有一郎「日本出土の方格T字鏡」『東京国立博物館紀要』第29号 1994年
 注3 柳田康雄「3、4世紀の土器と鏡」『古文化論集』下巻 1982年 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
 注4 東森市良「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究』第14巻第2号 1967年
 松本岩雄「墳丘出土の大形土器」『山陰考古学の諸問題』1986年 山本清先生喜寿記念論文集刊行会

遺物番号	図版番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
1	10-c	壺(大形)	不整形土墳				良質粘土	桃褐色	堅緻	
2	10-a	上甕	北東裾土器棺	63.6	20.0			明赤褐色		黒斑あり
3	10-b	下甕	北東裾土器棺	57.0	29.0		砂粒	明茶褐色	良好	
4		甕	不整形土墳				石英粒・輝万片	黄白色・薄黄褐色	堅質	
5		甕	a土器群				長石粒・精良	茶褐色	やや軟質	
6		甕	不整形土墳				長石粒	橙褐色	やや軟質	丹塗り
7	10-d	甕	a土器群		29.0 復元		長石粒	黄褐色	良好	
8		甕	不整形土墳				長石粒	黄褐色	良好	黒斑あり
9		甕	北東裾				長石・石英粒	赤褐色	やや軟質	
10		甕	谷試屈溝				長石・石英粒	橙褐色	良好	
11		甕	不整形土墳				精良	茶褐色	良好	

第3表 立石1号墳出土土器観察表



第26図 D-1地点の地形と立石 2号墳の位置 (1/300)

(3) D-1 地点

a. 概要

D-1 地点はA-3 地点から北西に伸びる尾根である。尾根筋から東側斜面にかけては蜜柑園として開墾されており今区画整理事業では事業地外となるため西側斜面のみの調査となった。

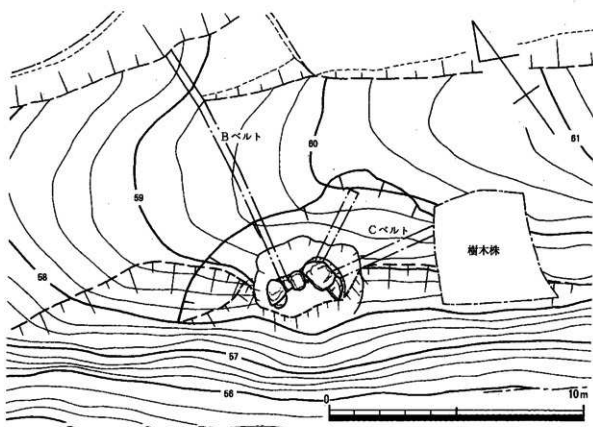
この西斜面で花崗岩石材が露出しているのが確認された。古墳である可能性が生じたため、A-3 地点の調査終了後、西向かいのA-4 地点の調査にかかるとともに、石材周辺を人力によって表土を除去し古墳（立石2号墳）を確認した。このため重機で周辺表土を除去し調査を行った。

古墳は墳丘が遺存しておらず、石室も半壊状態であった。D-1 地点と西向かいのA-4 地点との間にある沢は開墾されて段々の畑地が造成されていた。この時に古墳周辺斜面の土砂が削りとられ、畑地造成に用いられたとともに古墳の破壊が進んだものと考えられる。

b. 立石2号墳

立地と墳丘（第26, 27図、図版11）

古墳は尾根筋線から南の沢に少し下った斜面の中途に築かれていた。古墳の西半分は削平によって既に消失しており側壁石材が法面に露出していた。墳丘盛土はほとんど失われており正確な墳丘形態、規模はわからないが、東斜面に周溝の痕跡とみられる浅い凹みが石室を中心に馬蹄形にめぐっており、周溝の一部と考えられる。溝は石室を中心に弧状にめぐることから墳形は円墳であった

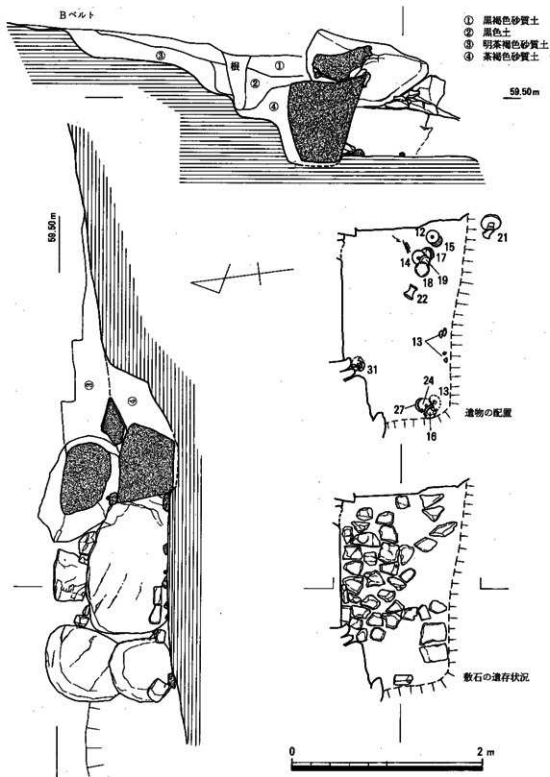


第27図 立石2号墳墳丘遺存状況 (1/150)

とみられ、それから推定される墳径は8～9mほどである。

主体部（第28図、図版11-c）

地山下で半地下式に構築された横穴式石室であるが、現状では羨道部から玄室前部および左側壁が破壊され、奥壁と右隅角部の壁石の一部が残るだけであった。このため石室構造の詳細は明らかではないが、推定奥壁幅は204cmほどである。使用石材は厚みのある花崗岩の切石を横たえて腰石



第28図 立石2号墳石室実測図 (1/40)

とし、石室内側は粗く面取りが行われていた。壁面には面取り加工痕が筋状に残っていた。壁面は天井に向かって直線のかつ急勾配に持ち送られていた。

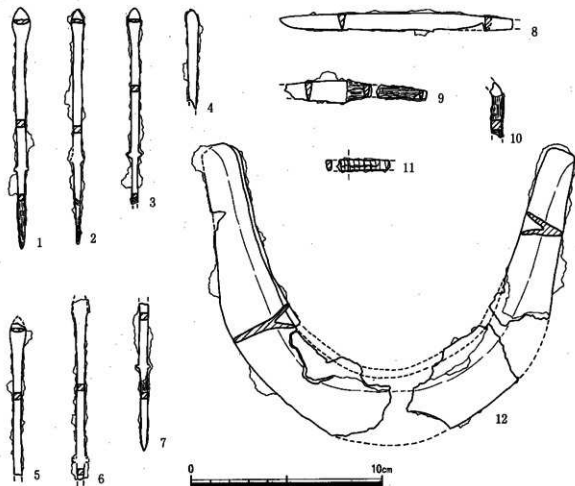
床面には拳大を超える大振りの塊石を用いた敷石が奥壁側に、集中して幅140cm、長さ55cmの範囲内に遺存していた。石は天場が平滑になるように並べ置かれていることからこの敷石が屍床として組まれたものである可能性が高い。敷石の前面右側壁下には副葬遺物がまとめて出土した。

石室掘り方の埋土は砂質土が充填されていた。土層観察ではいわゆる版築状の強固な築き固めを行っておらず、調査時に掘り方を掘り下げた際にも移植鏡で容易に埋土を掘りあげることができたほどである。顕著な控え積みの石材も認められず、おそらく石室構築に際しては石材を据えた後、軽く埋め戻した程度の簡便な作業であったとみられる。腰石2段目の積石間にわずかな土色の差が認められたが、石積み時の工程差を反映したものとみられる。

石室内遺物出土状況（第28図、図版12-a, b）

玄室内から須恵器、土師器、鉄鏡、鉄鋤先、刀子等が出土している。

出土箇所は大きく奥壁下（A群）、右側壁下（B群）、左側壁下（C群）の3地点に分かれる。A群からは鉄鏡、C群からは鉄鋤先が出土した。左側壁が完全に破壊され、土器に多少の破損が認められるものの、杯類が閉蓋状態を維持していたこと、鉄鏡も束状状態で出土していること等から比較的良好的に旧状を保っていたとみられる。ちなみに鉄鋤先はC群上に根を張っていた樹木の根に巻



第29図 立石2号墳出土鉄器実測図（1/2）

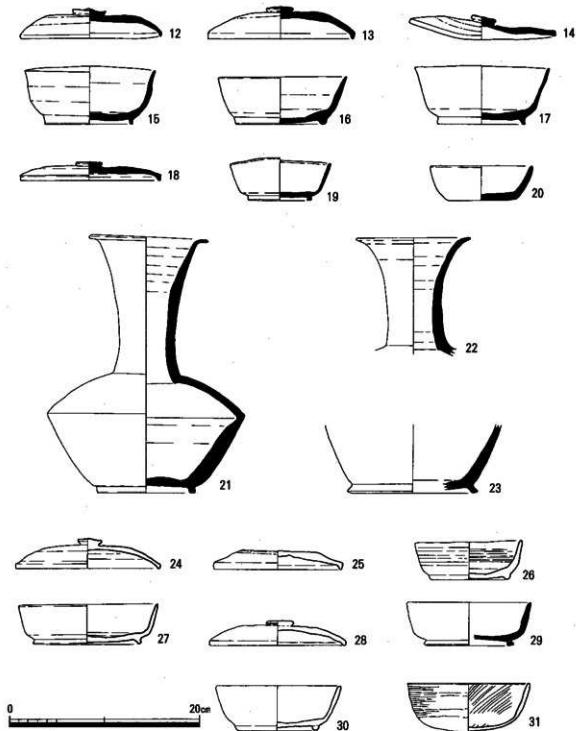
き込まれていたため、取り上げ時に折損したものである。

出土遺物 鉄器 (第29図、図版13)

鉄鏝 (1~7) 6~7本出土している。いずれも長頭柳葉鏝で篋被を有す。

刀子 (8、9) 8は残存長12.2cm。茎は先端が破損している。9は茎に柄の木質が遺存する。

鋤先 (12) 刃先部分が破損している。推定刃幅19.6cm、長さ16.1cmほど。刃縁は下半部は緩いU



第30図 立石2号墳石室出土土器実測図 (1/4)

字形で薄手だが、耳部はわずかに外反し刃厚は厚い。鋤身装着溝は深いV字断面を呈す。

不明製品 (10、11) 10は断面正方形を呈す製品で、図上上端が湾曲する。表面に縦にはしる木繊維痕が付着する。釘であろうか。11は断面楕円形で表面に樹皮の巻き付け痕が残る。

土器 (第30図、図版13)

12~23、29は須恵器、24~28、30、31は土師器で、31はA群、12、14、15、17、18、19、21、22はB群、13、16、24、27はC群からの出土である。その他は鋤先と一緒に木の根に絡って出土したもので、概ねC群付近からの出土である。

須恵器では、杯蓋は口縁径が14.4~15.2cmで端部は短く下垂しやや尖り気味に丸くおさめる。天井部に扁平な宝珠つまみを有する。杯身は口径が10.4cm前後の小形の19、20の類、口径が13.5cmほどの15~17がある。高台はいずれも底端部をめぐる。長頸壺22は胴部の上から3分の1で肩が張り、口頸部では基部は若干内湾ぎみに立ち上がるものの上半部では「ハ」字状に開き、上端部は横広がり、口唇部は丸くおさめる。

c. 小結

墳丘や石室の遺存状況が悪いため詳細はわからないが、立地が尾根斜面中途にあり石室が半地下式に構築された特徴は坂の下2~5号墳と類似する。しかし石室掘り方の埋め戻し工程が簡易に行われていること、石室の石積みも雑であることなどが、様相を異にし、坂の下古墳群よりも後出する古墳とみられる。

立石2号墳石室内から出土した須恵器の下限は田辺編年のTK21型式に相当するもので、時期としては8世紀初頭まで追葬が行われたことがうかがわれる。荻浦地区で最も遅くまで葬送が行われた古墳である。

遺物番号	図版番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
12	12-12	杯蓋	2号墳石室	3.2	14.7		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
13	-13	杯蓋	2号墳石室崩壊土	3.4	15.2		白色砂粒	淡黄灰色・青灰色	軟質	
14	-14	杯蓋	2号墳石室	2.6	15.4		白色砂粒	青灰色~黒灰色	堅緻	
15	-15	杯身	2号墳石室	5.6	13.8		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
16	-16	杯身	2号墳石室	5.1	13.5	8.7	白色小砂粒	淡黄灰色	やや軟質	
17	-17	杯身	2号墳石室	6.3	14.1	9.2	砂粒・金雲母	黄灰色	良好	
18	-18	杯蓋	2号墳石室	2.0	14.4		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
19	-19	杯身	2号墳石室	4.5	10.5	5.8	白色砂粒	淡黄暗灰色	堅緻	
20	-20	杯身	2号墳石室崩壊土	3.7	10.8	7.4	白色砂粒	灰褐色	やや軟質	
21	-21	長頸壺	2号墳石室	27.4	12.2	9.1	白色砂粒	暗紫茶褐色	良好	
22	-22	長頸壺	2号墳石室	(12.4)	11.9		白色砂粒	暗青灰色	良好	
23	13-23	長頸壺	2号墳石室崩壊土	(7.2)		12.1	白色小砂粒	淡黄灰褐色	良好	
24	-24	杯蓋	2号墳石室	3.2	14.9		砂粒・金雲母	茶褐色	良好	
25	-25	杯蓋	2号墳石室崩壊土	2.0	13.3		砂粒	明茶褐色	良好	
26	-26	杯身	2号墳石室崩壊土	4.1	11.0	7.6	白色小砂粒	明黄茶褐色	良好	
27	-27	杯身	2号墳石室	4.3	14.5	10.6	砂粒・金雲母	明茶~明黄褐色	良好	
28	-28	杯蓋	2号墳石室崩壊土	2.6	14.0		白色小砂粒	茶褐色	良好	
29	-29	杯身	2号墳石室崩壊土	4.5			白色砂粒	灰褐色	良好	
30	-30	杯身	2号墳石室崩壊土	4.7	13.0	8.0	砂粒	明橙褐色	やや軟質	
31	-31	碗	2号墳石室	5.0	12.8		砂粒	茶褐色	良好	

第3表 立石2号墳出土土器観察表

(5) A-4 地点

a. 概要

A-3 地点から西南に派生し、B-20 地点へと連なる尾根筋の中途に位置する（第14図）。この一帯は、南向き斜面では蜜柑園造成時によって階段状に切り開かれ、また、北西斜面でも所々に同様の造成の跡が認められた。もともと痩せ尾根地形だったうえにブルドーザー等の重機を入れて造成の手が加えられたため、尾根頂部は大きく削平を受け、表土をめくると風化バイラン土層がすぐに姿をあらわすといった状況であった。

尾根中最高所の標高62m地点から北西23mの地点に大きな花崗岩塊が露出していた。周辺では所々に花崗閃緑岩塊が露出している。時代は定かではないがこの石を石垣石材として切り出したらしく、鑿の打ち込み痕跡生々しい岩塊と削り屑石が各所で確認されている。この岩塊の周囲を手掘りて掘り下げたところその北西で花崗岩塊の集積が認められた。折り重なった岩を除去すると、下面から横穴式石室が姿をあらわした。古墳所在地の小字名をとって坂の下1号墳とした。

b. 坂の下1号墳

立地と墳丘（第31, 32図、図版14）

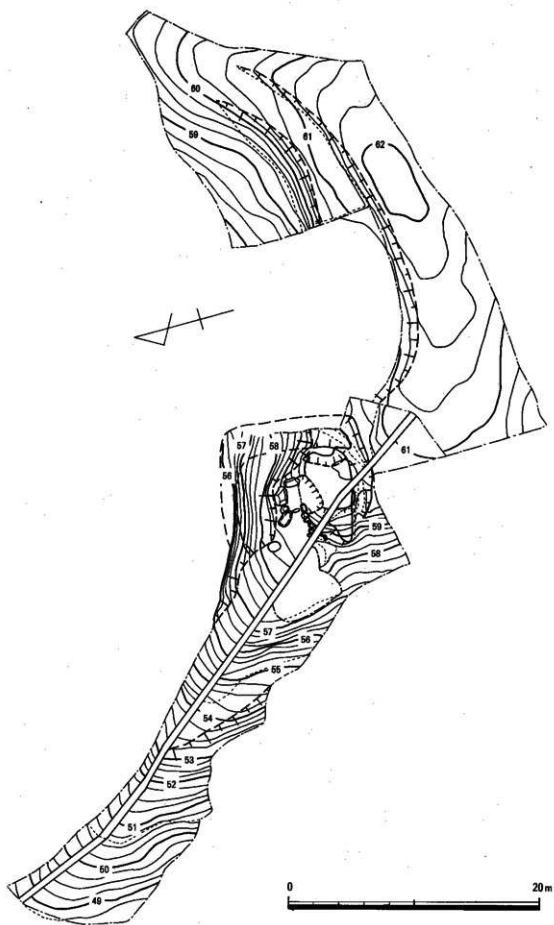
墳丘は尾根筋からやや沢斜面にかかった位置にある。斜面尾根側には周溝がめぐっていた。墳丘盛土は全く遺存しておらず、地山面も石材抜き取りによって凸凹に掘り返されていた。また墳丘北半部は土探りによって削り取られているため、遺存状態は悪い。しかし、辛うじて残る南半部墳裾の周溝は石室主軸に対し直線的にめぐっており、南西部でL字状に屈曲することから墳形は方墳と考える。墳丘規模は東西14.5m、南北12mで石室主軸に対し幅広の長方形と推定される。墳形を整えるに際し、石室の開口する西斜面で一部地山の削り出し整形が行われており、標高58mの等高線ライン上にテラス面を削りだしている。

石室前庭部から墳裾にそって南西方向に向かって長さ4mにわたり地山を掘りこんだ素掘りの基道を設けていた。基道墳丘側壁面には貼石が施されていたとみられ、その一部とみられる腰石が遺存していた。この腰石列下から供献されたと思われる小形の刀子が1点出土している。

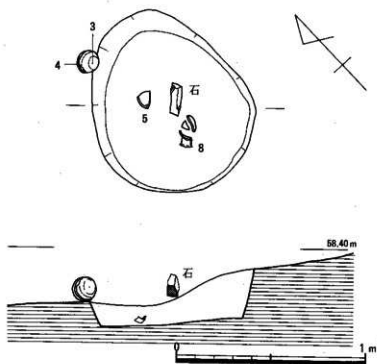
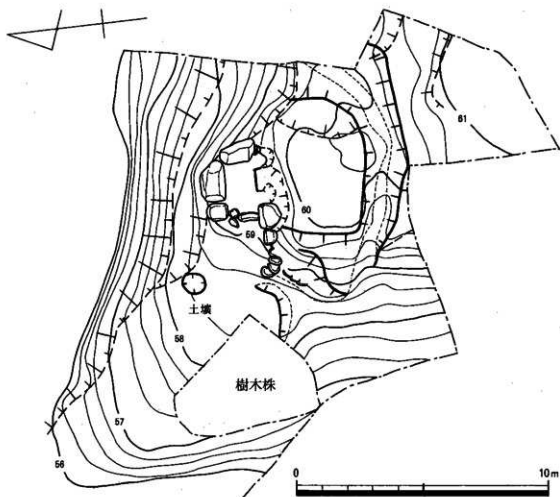
石室（第33図、図版15-a~d）

石室は風化花崗岩の地山を深さ70cmほど掘り下げ腰石を据えて構築していた。壁石材は大半が取り外され、羨道壁、玄室腰石の一部と閉塞石が遺存しているのみであった。そのうえ開発業者との打ち合せの不備から、東、南側壁、羨道壁が調査終盤に取り外されたため、実測図が不十分なものとなってしまったことは遺憾である。

玄室は主軸をN-84°-Wにとる左片袖式単室横穴式石室である。玄室長は左壁で212cm、幅は奥壁で121cm、玄門で124cmほどで、玄門には樞石を置く。腰石にはいずれも直方体に近い大きさの花崗閃緑岩を据えている。側壁の腰石に対し、奥壁の腰石は1段深く掘り込んで据えられている。床面は盗掘によって羨道部をふくめ地山下まで激しく掘り起こされており、敷石、副葬物等において原位置を保つものは皆無である。



第31図 A-4地点の地形と坂の下1号墳の位置 (1/300)



第32図 板の下1号墳墳丘遺存状況および墳掘土壌実測図 (1/150、1/20)

玄室袖と羨道は南壁では花崗岩を横たえて2～3段積み上げて構築していた。この構築方法は前田古墳、砂魚塚1号墳、石川1号墳と同様である。

閉塞石は長さ80cm、幅72cm、最大厚36cmの扁平な花崗閃緑岩の1枚岩を使用しているが、羨道床面が深さ25cmほど掘り返され、その下に落とし込まれていた。閉塞石の背に乗り掛った状態で検出した礫群は閉塞石と羨道壁間の隙間を充填していたものであろう。

墳丘北東掘土壌（第32図、図版15-d）

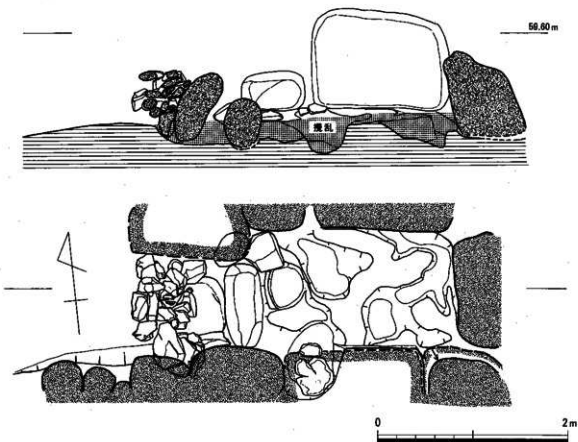
石室玄門から北西3mで検出した。おそらく本来の墳丘裾に位置していたであろう。平面プランは北に尖りぎみの不正円形を呈する。長径98cm 短径84cm、深さ26cmを計り、真砂土によって人為的に埋め戻されていた。埋土中から須恵器壺片少量と花崗岩角礫が出土し、土壌の掘り方にかかった状態で須恵器杯が閉蓋したまま出土している。土壌に埋納されたものと考えられる。

出土遺物（第34図、図版15-e）

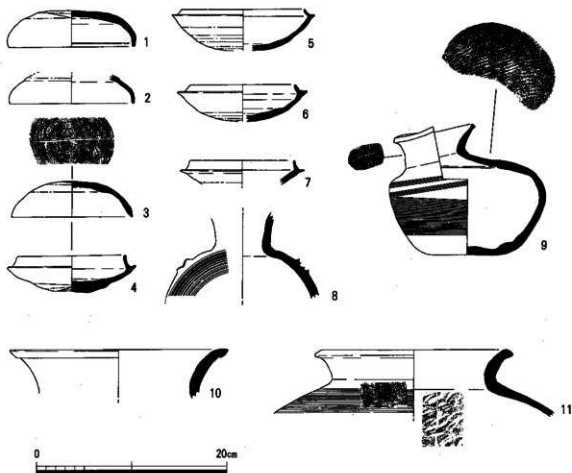
盗掘、攪乱によって、玄室内からは副葬品はほとんど発見されず、図示した遺物のうち9が玄室埋土内から出土した以外は3、4、11が前庭部土壌、他は前庭部表土からの採取品である。

3、4、9は完形、他は破砕片である。土器以外では供献されていた刀子片1点がある。

1～3は杯蓋である。1は口唇部がわずかに内湾、2は直立、3は外反する。いずれも天井部と体部の境の稜は認められず、外面天井部の回転ヘラケズリは天井部の3分の2程度で終わる。3の



第33図 板の下1号墳石室実測図 (1/40)



第34図 坂の下1号墳出土土器実測図 (1/4)

外面天井中心部には「一」字状のヘラ記号が認められる。

4～7は杯身である。4は口縁立ち上がりが長く、直立ぎみである。底部から体部にかけて3分の2に回転ヘラケズリが施される。5はやや口縁径が大きく、いわゆる赤焼土器である。

8は提瓶である。把手部を欠失するが鉤り手状であったとみられる。片面にカキ目をめぐらす。

9は横瓶で玄室攪乱墳内から完形で出土した。体部は肩が張りぎみで、頸部は直線的に外反し口縁にいたる。端部は外向きに平坦面をつくる。天井部には擬格子タタキが施され、頸部に「十」字形のヘラ記号を刻む。

10、11は覆口縁片である。

c. 小結

坂の下1号墳は南北長12m、東西幅14.5mほどに復元される方墳である。

主体部は小型の横穴式石室で、袖部の構築法、閉塞方法などに砂魚塚、前田、石川古墳等との類似点が認められ、玄室平面プランは前田古墳と近似する。

出土須恵器はTK43型式に相当する。前出の3古墳よりもやや時期が下がる。



第35図 B-20-b地点遺構配置図 (1/750)

(5) B-20-b地点

a. 概要 (第35, 36図、図版16)

坂の下1号墳から西に向かって100mほど続く尾根稜線の突端には花崗岩の露頭があった。この露頭を中心とする周辺で土器、馬具、銅鏡が出土している。この露頭周辺で祭祀が行われたことが想定される。B-20-a地点として次刊において報告する。

この露頭から西は、標高30m地点付近まで急な斜面でそこからは緩斜面となる。この緩斜面先端は馬蹄形に二又に分岐し、北尾根をB-20-b地点、南尾根をB-20-c地点とした。

既に分布調査時点で、b地点では3号墳の石室が南斜面向きに開口していたためその存在が知られたが、他の古墳は確認することができなかった。しかし周辺にさらに古墳が遺存することが予想されたため、この一帯で広く発掘調査を実施することとし、表土を重機で除去して遺構の確認検出作業を行った。

その結果、b地点ではあわせて4基の古墳と土器棺墓を1基、掘立柱建物1棟を発見し、c地点では柱穴、土壇、溝等を発見した。しかし、この地一帯も近世以降の開墾等によって遺跡の破壊が進み、旧状を良好に保つものは皆無といってよい。

b地点で確認した4基の古墳は東から順番に番号をつけた。

2、3、5号墳は尾根南斜面で沢に開口する横穴式石室の古墳であるが、石室羨道前面は蜜柑園造成時に削平されたため、石室石材が斜面に露呈することとなった。このため古墳前面の羨道から墓道にかけての詳細は明らかになることができなかった。4号墳は群中唯一尾根稜線上に築かれていた。

b. 坂の下2号墳

立地と墳丘 (第38図、図版17-a, b)

本墳は支群中で最も高所に位置する。調査前は玄室の真上に広葉樹の大木が石室を抱え込むように生えていたため古墳の発見は周囲の表土を除去するのを待たなければならなかった。

墳丘は西、南、東側をいずれも畑地、蜜柑園造成によって削平され、天井石も玄室の一枚を残して全て搬出されていた。

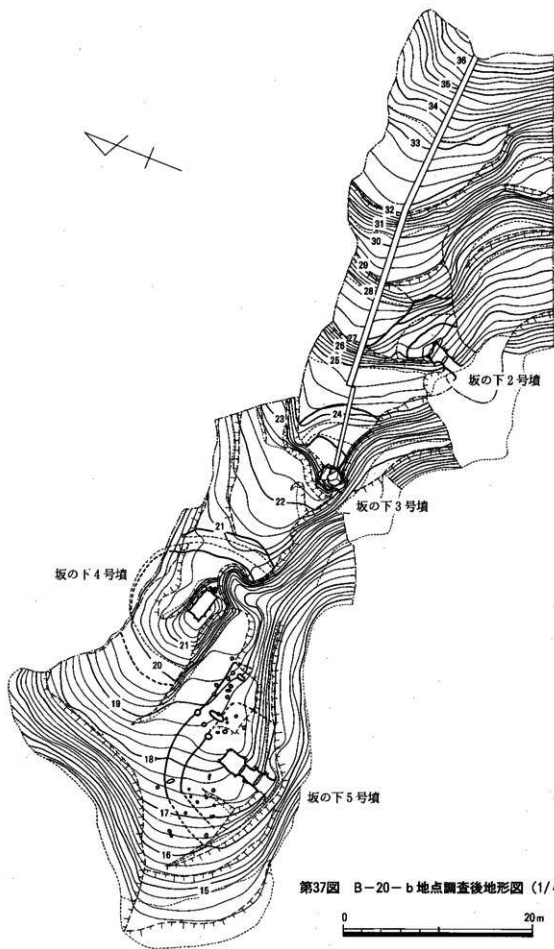
古墳は尾根の南斜面を馬蹄形に周溝をめぐらせて地山整形することによって墳形を定めている。掘削された周溝は奥壁裏では石室主軸に直交方向に直線的に伸びその両端で石室側に急カーブしており、隅角を形成していることから、墳丘の平面プランは方形であることがわかる。墳丘規模は幅6.2m程度、墳丘長は現状で6.4mあり、削平された前面墓道を考慮すれば主軸方向に長い長方形を呈していたことが想定される。墳丘盛土はほとんど残っていないため墳丘の上部構造についてはよくわからない。しかし、残された天井石の天場の高さは石室掘り方の天場の高さを20cm上回る程度で、石室は大半が地下に構築されたことになり、墳高もさほど高くなかったものと推測する。

石室 (第39, 40図、図版17-c)

石室は地山から150cmほどの深さを基底部として構築された単室左片袖式の横穴式石室である。

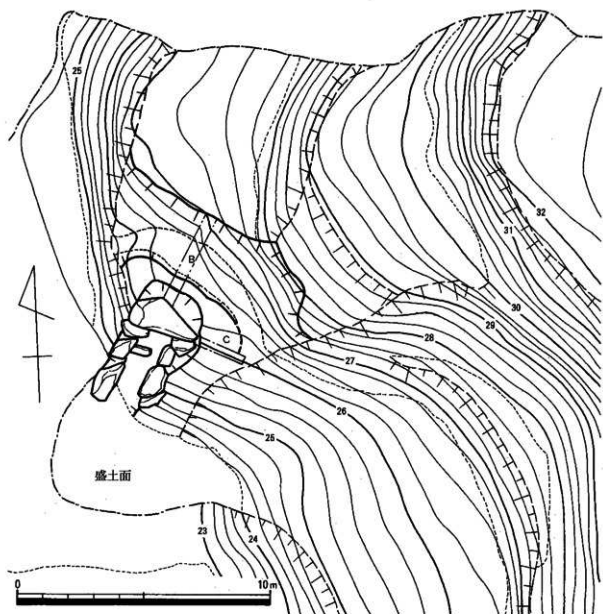


第36图 B-20-b地点调查前地形图 (1/400)



第37図 B-20-b地点調査後地形図 (1/400)



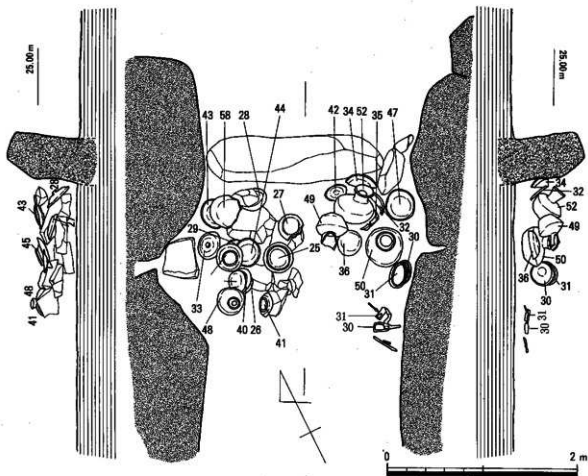


第38図 板の下2号墳填丘依存状況図 (1/150)

玄室は左側壁長105cm、玄門部幅180cm、奥壁部幅180cm、高さ135cmを測り、玄室主軸に対して幅が広く、奥壁が右奥に深く入り込んだ台形状の平面プランを有す。壁は大きめの腰石の上に扁平な塊石を重ね、天井石を置く。壁面は石材本体を内傾させた上、2段目は持ち送りをを行い天井にいたる。天井石は1枚であったとみられる。床面には大きめのベグマタイト質の白色花崗岩の角礫を敷き詰めているが、奥壁寄りに大きめの礫が集中していた。

羨道は長さ250cm以上、幅100~107cmほど、花崗岩板石をならべて壁を築く。この上に直接天井を架構していたものとみられ、羨道の部の高さは1m前後と推定される。框石は玄門から40cmほど入り口寄りに埋設されており、左壁に寄せて設けられていたため、右壁との間に30cmあいた隙間には礫を積み補填している。

石室の閉塞は花崗岩礫を積み上げて石室を閉塞していた(図版17-c)が、崩落し、現存高は60



第41図 坂の下2号墳羨道遺物出土状況図 (1/20)

cm程度である。基底部では大きめの平石を横積みして壁を築いていた。上方では徐々に小石を積んでいた。

遺物出土状況 (第41図、図版17-d)

遺物の大半は羨道部床面から出土した。框石の手前に重なってまとめ置かれていたが、中央に若干の隙間がみられ左右2群に分けて寄せられた状況が見受けられる。床面より5cmほど浮いていた。追葬時の清掃によるとみられる。左群では下に花崗岩礫を据えてその上に置かれていた。右群手前では馬具(鍔金具)が出土した。

玄室からは金環4個が出土しているが、出土箇所は明らかではない。また、鉄鍔は玄室、羨道に散乱していたが、完形品はない。

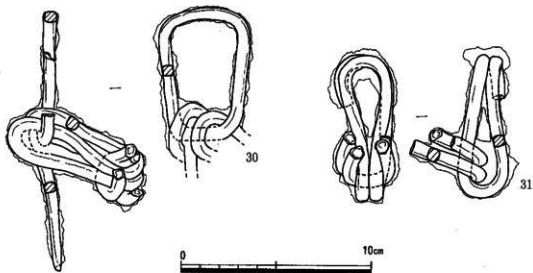
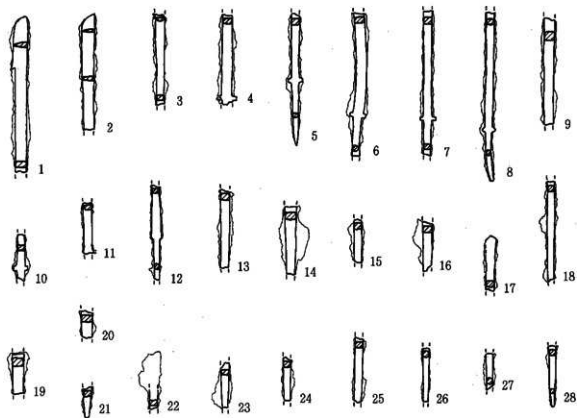
以下個々の遺物について概説する。

鉄器・装身具 (第42図、図版18)

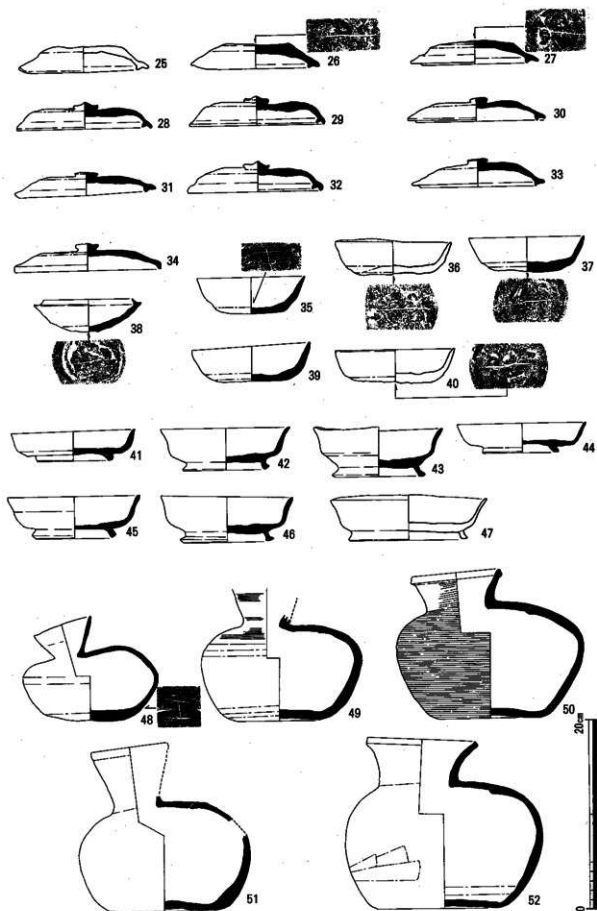
鉄鍔 (1~28) いずれも長頭鍔の類とみられ、1、2は片刃の刃部を有す。4~8、10~12では筥被部が遺存する。

刀子 (29) 刃部片1点のみで、切先も欠失する。残存長3.8cm。

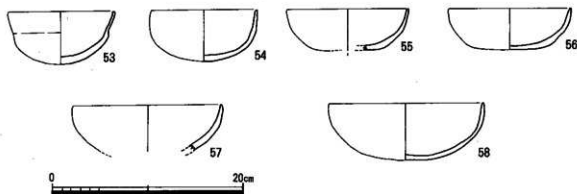
馬具 (30~32) 30、31は結合する一連の資料で、鍔金具である。長さ7cm、幅4.8cmの隅丸長方形の輪金具の一端に刺し金を直接まきつけ、それを兵庫鎖で挟み込む。兵庫鎖は1個の長さが



第42図 板の下2号墳出土鉄器、装身具実測図 (1/2、2/3)



第43図 坂の下2号墳出土土器実測図① (1/4)



第44図 坂の下2号墳出土土器実測図②(1/4)

7.5cmほどで、3連であるが、中央の鎖金具は朽ちて接合復元できなかった。

金環(32~35) いずれも銅地金銅貼りで、環径から大形の32と33、やや小形の34と35に分けられ、前者は後者に比べ遺存状況が悪い。それぞれ対で使用された可能性が高い。

土器(第43~44図、図版18~19)

須恵器(26~35、37~39、41~46、48~52) 26~34は杯蓋である。26、27以外は、扁平な摘みを有し、34以外は口縁部にかえりを設けるが、口縁が横に開きかえりが下に張り出す類(28、27等)と口縁が下方に踏張り、かえりは口縁内側に隠れぎみの類(28、29等)に別れる。37~46は杯身である。体部が腕状で口縁部に受部を持つ類(38)、体部が盤状で高台を持たない類(37~39)高台をもつ類(41~46)に大別される。48~52は平瓶である。

土師器(25、36、40、45、47、53~58) 杯蓋、身、碗類が出土している。36、40は高台をもたない杯身で口縁径は12.4cm前後、47は口縁径16.2cmを測り、大形で高台を有す。

c. 坂の下3号墳

立地と墳丘(第45、46図、図版20-a, b)

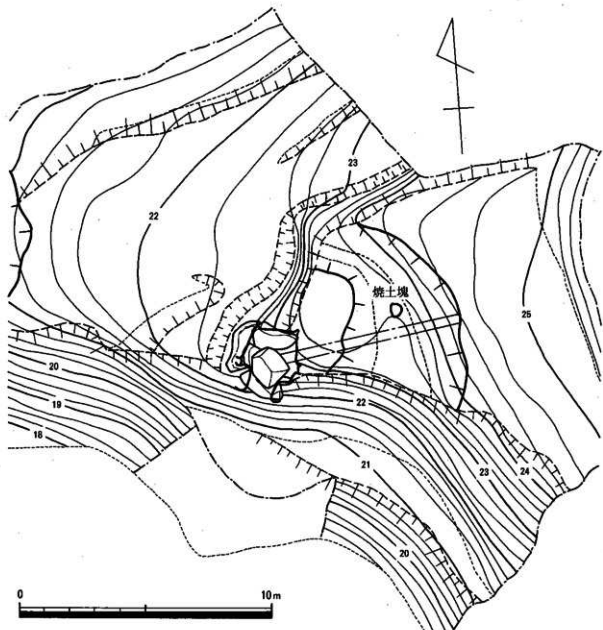
坂の下2号墳と5号墳間の南斜面に位置する。玄室天井石が遺存し石室が南南西に向かって開口していたため、分布調査時にいち早くその存在が確認されていた。

羨道を含めた墳丘の南半部は蜜柑園造成時に、玄室西および北の墳丘は尾根上の畑造成にともなう土採りによって削平されており、表土を除去すると石室天井石がほぼ露出状態となった。これにより墳丘の4分の3は基底部まで根こそぎ破壊されているため、墳形、規模についての詳細は明らかではないが、玄室の北東部にわずかに残された墳丘基底部と周溝の掘削状況から以下のとおり推定した。

墳形については古墳の東裾が南南西から北北東にむかって直線的にめぐり、北東隅角でL字状に屈曲していた。そこからさらに直線的にのびる兆しがみられたことや、東、北墳裾の方がそれぞれ玄室の主軸方位にほぼ平行、直交することなどから、墳形は方墳であると考えられる。

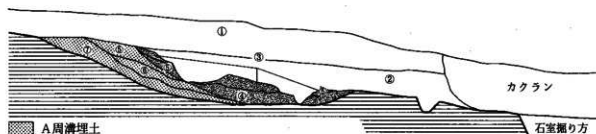
墳丘規模について玄室が古墳の中央に築かれたと仮定すれば、幅8.2m前後になるとみられ、石室主軸方向の長さについて羨道と墓道の存在を考慮すれば主軸長は少なくとも10mはあったと考えられ、石室主軸方向に長めの長方形プランを有していたと考えられる。

墳丘盛土は削平によって消失しているため、その詳細は定かではない。東周溝では土層観察によ



第45図 坂の下3号墳丘遺存状況図 (1/150)

25.0m



A 周溝埋土

B 周溝埋土

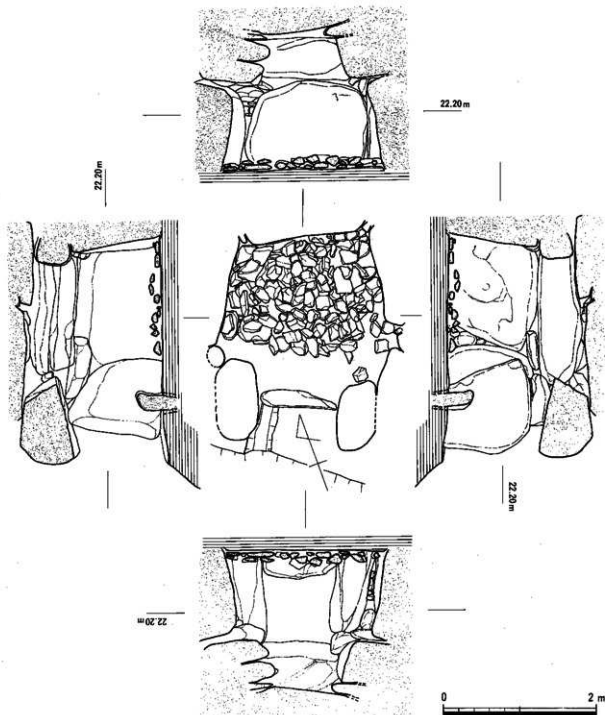
- | | |
|---------------|----------|
| ① 茶褐色土 (畑耕作土) | ⑤ 暗褐色粘質土 |
| ② 暗赤褐色土 (耕作土) | ⑥ 黒褐色粘質土 |
| ③ 暗灰褐色土 | ⑦ 暗赤褐色土 |
| ④ 黒褐色粘質土 | |

第46図 坂の下3号墳周溝土層断面図 (1/40)

って築造当初に掘られ幅3.4mの溝が埋没した（第46図A溝）後に、再掘削されていた（第46図B溝）ことがわかった。再掘削された溝の掘り方は当初の溝に比べ1.5m内側に寄っており、幅が2.3mと一回り狭くなっている。A溝では底面で焼土塊とともに破砕された土師器碗が出土した。

石室（第47図、図版20-c, d）

墓道、羨道部は完全に破壊されており玄室のみが遺存していた。地山から1.2cm掘り下げた掘り



第47図 坂の下3号墳石室実測図 (1/50)

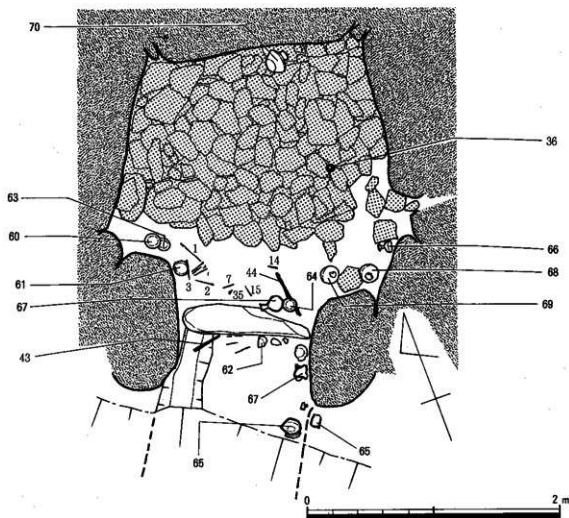
方内に構築された両袖式横穴式石室である。

玄室は西壁長1.54m、東壁長2m、玄門側幅2m、奥壁幅1.72mを測り、主軸長に対し幅が広く奥壁に向かって若干狭くなる台形状のプランを呈す。高さは玄室中央で182cmである。

石材は全て花崗岩である。左、右、奥の3壁では腰石として床面からの高さ115cm～120cmに横長の板石を立て、その上に左壁では3枚、右、奥壁では各2枚の板石を横積みして壁の高さを調整し、その上に2枚の板石を並べて天井石としていた。床面から天井までの高さは概ね175cmを測る。壁面の持ち送りは腰石では石を内傾させて据え、上段では横積みの石を平行持ち送りしていた。前壁では幅100cm前後、厚50cmほどの立石を両袖石とし、その上に厚65cmの塊石を載せた楣石を介して天井石にいたる。天井石は2枚である。

床面には大柄な角礫を無造作に敷いて敷石としていたが、奥壁側150cmまでしか敷かれておらず、玄門近くでは認められない。屍床を兼ねて敷設されたものとみられる。石は断面観察によって2層に敷かれていたことがうかがわれ、追葬時に敷き重ねられたものとみられる。敷石の南東隅の乱れは盗掘によるものであろう。

羨道部には框石が埋設されており、床面からの高さは34cmを測る。框石から墓道にむかって左側壁沿いに幅21～35cm、深さ5cmほどの断面U字形の小溝を検出した。排水溝と考えられる。



第48図 坂の下3号墳石室内遺物出土状況図 (1/30)

遺物出土状況（第48図、図版20-e, f）

遺物は玄室の左右袖石裾周辺、および羨道の樞石付近から集中して出土し、敷石敷設範囲内ではわずかに奥壁下から横瓶が1点、中央右側壁寄りから鍔金具1点が出土しただけである。遺物は散乱状態で出土し、刀、鎌の類は折損したものが多くことから盗掘によって攪乱を受けたものとみられる。

鉄器（第49図、図版21）

鉄鎌（1～31） 長頭鎌が多く、身部は柳葉（1、2、4、5、6）、方頭（7、8、13）両類が認められる。篋被部は一旦広がり、急にすばまる類が大半を占めるが、1、15は鍔状に肥厚し、7は棘状に突出する。27は茎部に沓巻が遺存する。

小刀（43、44） 43はほぼ完形、44は切先が欠損している。43は全長25.7cm、刃幅は2.4cm、背厚0.55cmを測る。刃部と茎部の境には小さい抉りが入る。刃、茎両端とも若干湾曲している。44は現存長40cm、刃部長38cm、刃幅2.5cm、背厚0.8cmを測る。刃部は波状に激しく刃こぼれしているが研ぎ直しにより刃が再生されている。

刀子（32～35） 4片出土しているが、32以外は残片で、33と34は同一個体であるとみられる。32は全長11.7cm、刃部長8.5cm、刃幅1.3cm、背厚3mmを測る。

鍔金具（36） 図上下端がやや尖り気味の卵形を呈し、外縁では長径6.3cm、短径4.6cm、厚さ0.35cmを測り中心に向かって若干薄くなる。中央の孔は長径2.6cm、短径1.45cmを測る。

釘（42） 埴丘土表から出土しているため、本古墳との関係は明らかではない。断面正方形で打ち込みによって頭部は潰れ、先端部は折れ曲がる。

不明鉄器（37～41） 板状の鉄薄片で、用途は不明。

須臾器（第50図、図版21）

59、60、61は杯蓋である。59は天井部がヘラ切り未調整、体部と天井部との境は明瞭ではなく、口縁端部は丸く納める。60、61は天井部に乳頭状の擠みを有し、口縁内面に短い反りをつける。外面にはカキメを施す。

62、63、64は杯身である。62は底部にヘラケズリを施しているためレンズ状に膨らみを有す。63はヘラ切り未調整で、63は若干上げ底。64にはやや高めの高台が底部縁につく。

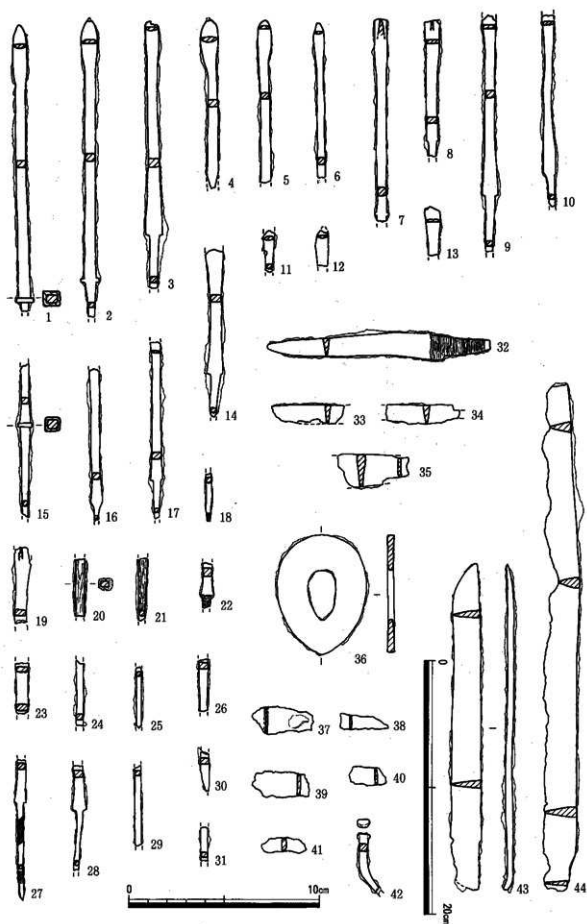
65、66は高杯である。65の杯部は口縁が外反し杯底面にはカキメ調整が施される。脚裾部は肥厚する。66は杯部が内湾気味に立ち上がる。両個体とも脚柱部内面にヘラ記号を施す。

67は台付長頸壺である。胴部は扁平球形を呈し、頸は細く締まった付根から大きくラップ状に開いて口縁部にいたる。脚台は高さ3.2cm。壺底部から「ハ」の字状に裾に向かって広がり、裾部では鈍く下方に向かって外反しながら踏張る。胴肩部には二条の鈍い凹線文がめぐり、底部と胴上半部および頸部に部分的にカキメ調整が施されている。胴下部に「↓」印のヘラ記号が描かれる。

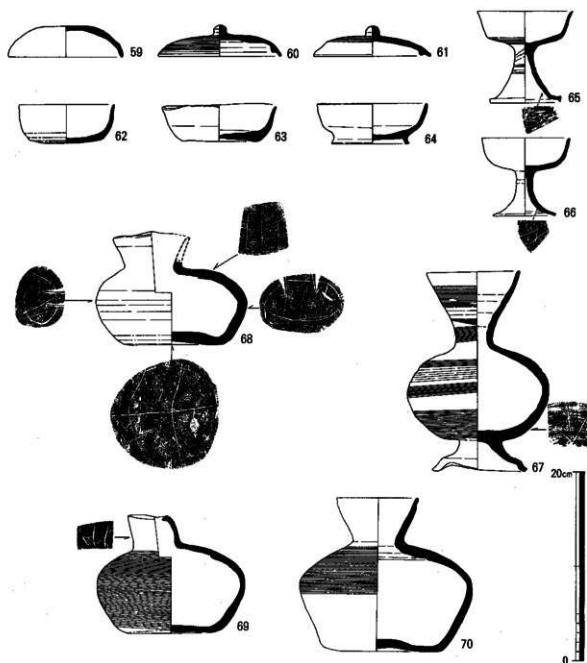
68、69、70は横瓶である。68では底面、胴部3の計4箇所いずれも柄の異なったヘラ記号が刻まれている。70は口縁が中心寄りにつく。69、70は胴部にカキメ調整が施される。

d. 坂の下4号墳

立地と墳丘（第51、52図、図版22-a～c）



第49図 坂の下3号墳出土鉄器実測図 (1/2、1/3)



第50図 坂の下3号墳出土土器実測図 (1/4)

群中、唯一尾根筋に築造された古墳で、5号墳の北東に位置する。墳丘は北西部でわずかに旧状を窺ふことができるものの、大半は土採りによって破壊され、とりわけ南西部では墳裾下1mまで大きく抉りとられていた。位置関係からみて南西墳裾部は5号墳周溝と一部切り合っていた可能性が高い。

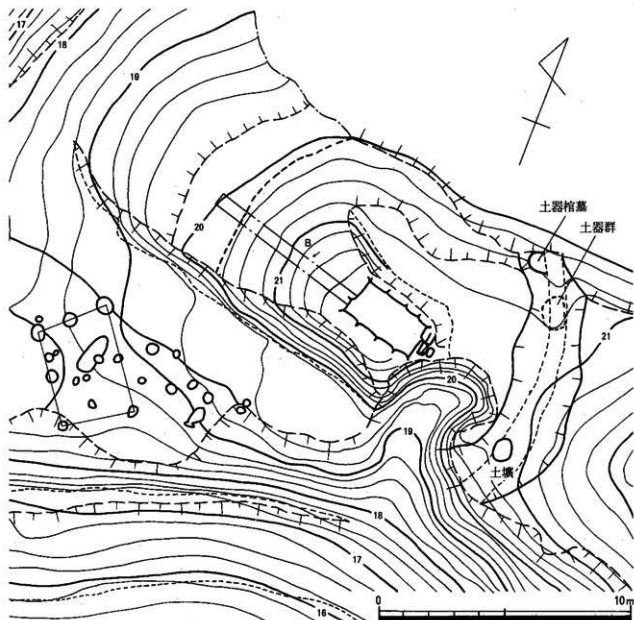
墳丘は遺存状態が悪いものの、墳丘の東側尾根筋に直交して掘られた周溝と西墳裾が石室を中心に円弧状にめぐることから東西の直径が13.5mほどの円墳であったことがわかる。

墳丘は2段築成が行われており、西墳裾から高さ1mまで地山を削りだして墳丘1段目を成形し(第52図)、幅約1mのテラス面を介して盛土による2段目の墳丘を成形している。1段目の

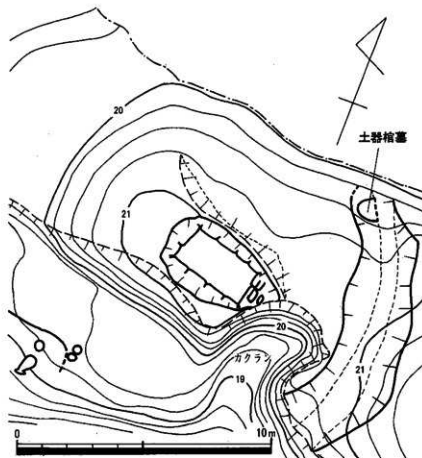
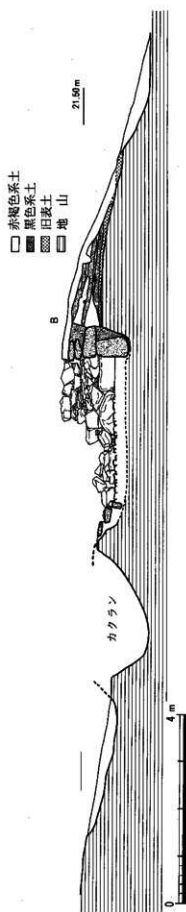
地山削り出しによって古墳の西裾では幅2.5～3mの平坦面が形成された。

墳丘2段目の盛土は遺存する西墳丘土層の観察によれば、石室の構築に先行して行われていたことがわかる。つまり墳丘を盛り上げた後に墳頂から堅穴を掘り、石室を構築しながら埋め戻していったと考えられる。盛土はまず旧表土の上に外周に環状に黒色土を盛って、その内側に断面凸レンズ状に赤土を盛り上げる。それを覆うように薄く黒色土を被せ、その上から赤土を載せ、さらにその上に黒土を積み仕上っている。基本的には黒色土と赤土を交互に積み上げているが土層が古墳の中心から墳裾に向かって下り勾配となるように積み上げられている。盛土は堅く叩き締められていた。その後石室の石材を据えながら黒色土を裏込めして石室を構築している。裏込め土はさほど叩き締められた状況は認められず、むしろ掘り方内を軽く埋め戻した程度であった。

墳丘東裾にめぐる周溝は幅2.1～2.9m、深さ40cmほどで外周肩から溝底にむかって緩やかに傾斜し、墳裾から墳丘にむかって急に立ち上がる。東周溝底は西墳裾よりも70cmほど高い。



第51図 板の下4号墳墳丘遺存状況図 (1/150)



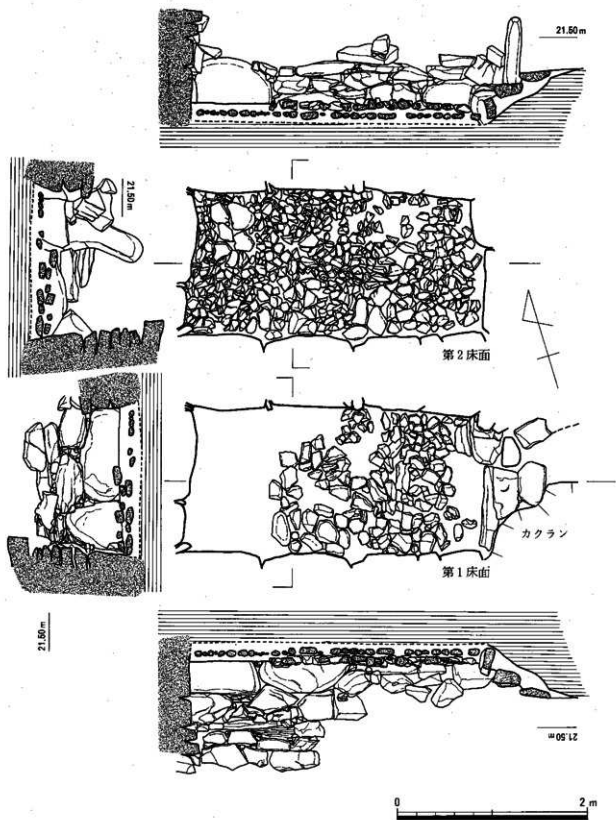
第52図 坂の下4号墳墳丘土層断面(左)および墳丘地山整形状況図 (1/150, 1/80)

石室 (第53図、図版23)

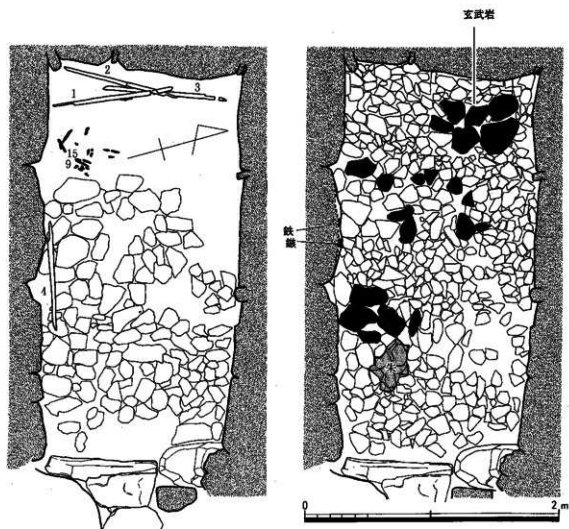
主体部はN-73°-Wに主軸をとり東南東に開口する横穴式石室である。石室は尾根筋線に沿い山上に向かって開口している。

前述のように石室は盛土による墳丘の整形がほぼ終了した後に、改めて墳頂から竪穴を掘って構築されたとみられる。石室の掘り方底面は地山56cmの深さに達する。

石室壁面は大破していた。天井石はなく、前、右壁では腰石直上まで倒壊していた。また奥、左壁は床面から高さ120cmまで辛うじて遺存していたが、石室内土砂を除去したところ左壁の羨道寄り箇所が徐々に内傾してきて倒壊の危険が生じたため、止むを得ず図化をあきらめて石材を除去することとなった。壁面は4面とも基底部に花崗岩の腰石を据え、その上に大振りな板石を小口積みしていた。石材は奥壁材が最も大きく、側壁は奥から前壁に向かって徐々に小さくなる傾向が認められた。石室構築時にまず奥壁に大きめの石を据え、前壁にむかって石上面の高さを調整しながら積み上げていったことをうかがわせる。また右側壁では袖石幅が30cmと狭いため壁と袖石との隙間を埋めるように2個の板石を挟間に詰め込むように並べられた



第53図 坂の下4号墳石室実測図 (1/40)



第54図 坂の下4号墳石室遺物出土状況図(左が第1床面、右が第2床面 1/30)

ため、隅角がやや潰れ内側に入りこむ。

前壁は袖石の手前に2個の板石を使った框石が埋設されている。右袖石下の框石は幅広で隅角で側壁面に入りこんでいるため、壁石は框石の上から積み上げられている。右袖石は海食を受けた玄武岩の柱状石を立てており床面からの高さは1mほどで、中程から内側にむけて「く」の字状に軽く屈曲する。現存しないが、袖石は階段状の敷石を挟んで左側にも据えられていたのであろう。横口部は幅55cmと推定され、ここから外部へは斜めに登り上がる墓道によって繋がっている。墓道の床面には平石を階段状に敷設して踏み石とし上り下りに利便を図ったものとみられ、調査時には2段の石段を検出した。

4壁に使われた石材について、唐木田芳文氏(西南学院大学)の観察によれば、多くは黒色花崗岩やアブライト系花崗岩あるいはペグマタイト系花崗岩などの当丘陵地でも産出する花崗岩を使用しているが、一部に海食を受けた玄武岩を使用していることが特徴的であるとされる。石材の採取地は最も近くであれば古墳の北5kmの芥屋海岸から搬入された可能性があるが、いずれにせよ地場産以外の石材をあえて持ち込み利用していることになる。同様に玄武岩石材使用は床面にも認められる。初期横穴式石室での構築技法の名残を残すものであろう。

床面は右壁長288cm、左壁長312cm、前壁幅140cm、奥壁幅152cmを測り、奥壁側に向かって若

干幅が広がるものの平面はほぼ長方形プランと言ってよい。敷石は上下2面に別れ、追葬時に床面の敷き直しが行われたものとみられる。

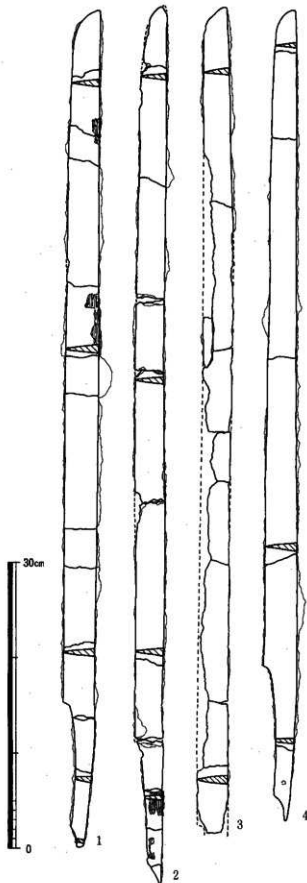
上面（第1床面）は大振りな平石を敷いているが、横口部下には敷かれていない。また奥壁から幅90cmにわたる範囲にも敷石が貼られておらず、底に黄色粘土が貼られ、その直上面から3振りの大刀、刀子、鉄鏃等が出土した。屍床の領域と考えられるが奥壁幅は152cmで奥壁と平行して遺体を伸展位で納めるにはやや窮屈な感じを受ける。

下面（第2床面）では床全体に小礫を主体とした敷石が丁寧に敷かれていた。

敷石面は使用石材の規格や敷設の密度等によっていくつかの区画が認められた。上面では横口から88cmを境に手前に小さめ、奥に大きめの石を用いた2区、下面では横口から100cm、230cmを境に大小中の石を用いた3区に別れた。この区画差が作業工程を示すもの、作業グループの違いを示すもの、あるいは玄室の区画割りを示すものであろうか。ちなみに230cm地点を中心に玄武岩の平石が集中的に使用されていた。

遺物出土状況（第54図、図版22-d）

第1床面からは左側壁中程のやや奥壁寄りから2本の鉄鏃、横口から70cm奥に入った左寄り敷石上から朱が出土した他は、目立った副葬品は発見されなかった。第2床面からは奥壁に平行して3振りの大刀が、最も下の大刀の中央付近1点に交差するように重ねられて副葬され（A群）、やや横口に戻って左壁寄りから鉄鏃、刀子、弓付属金具、針状金具が出土し（B群）、これらは全て敷石が敷かれていない箇所から出土した。他に左側壁中ほどに壁に沿って大刀が1振り副葬されていた（C群）。

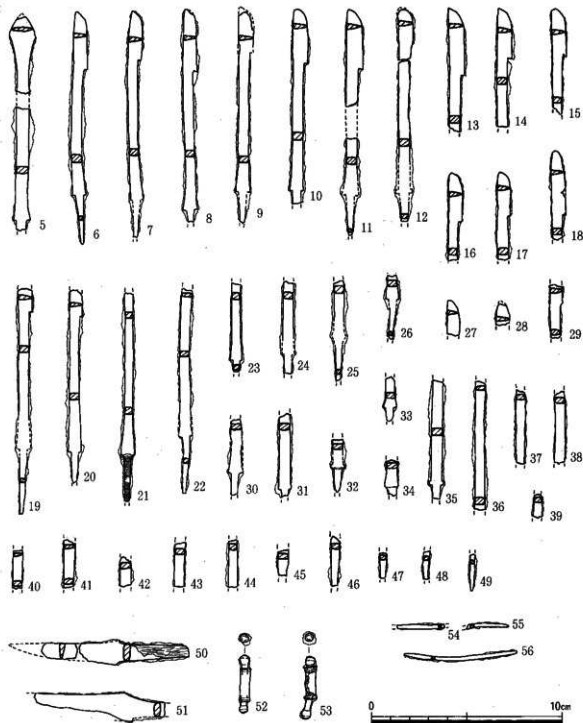


第55図 坂の下4号墳石室内出土大刀実測図（1/4）

鉄器 (第55, 56図、図版24)

大刀 (1~4) 1~3はA群、4はC群出土である。

1は最も上に重ね置かれていたもので、全長88.3cm、身の長さ72.8cm、幅は切先近くで2.9cm、中央で3.5cm、区部で3.3cm、背厚は0.9cm、茎の長さは15.5cm、幅1.8~2.8cm、厚さは0.7cmを測る。身の所々に鞘の木質が錆着している。



第56図 坂の下4号墳石室内出土鉄器実測図 (1/2)

2は中に挟み込まれていたもので、全長92.8cm、身の長さ77.8cm、幅は切先近くで2.7cm、中央で3.0cm、区部で2.9cm、背厚は0.8cm、茎の長さは15cm、幅1.6cm～2.4cm、厚さ0.6cmを測る。茎に柄の木質が錆着している。

3は最も下に敷かれていたもので、刃部、茎部は取り上げの際に剥片化してしまい、茎は欠失していた。残存長86.2cm、身の長さ86cm、幅は切先近くで2.7cm、中央で3.1cm、区部で3.4cm、背厚は0.8cmを測る。床に接していたためか錆による劣化が著しく、4は全長85.6cm、身の長さ69cm、幅は切先近くで2.2cm、中央で3.1cm、区部で1.8cm、背厚は1.0cm、茎の長さは16.6cm、幅2.1cm、厚さは0.7cmを測る。目釘孔を確認した。

鉄鎌（5～49） 9、15は第1床面からの出土で、他は全て第2床面B群からの出土である。刃部の形態は5が圭頭類である以外は長頭鎌に属す。関の形態は鋭角で逆刺を有する類（10、15）、関が直角あるいは鈍角をなす類（6、7、8他）、関が不明瞭な類（12）等が認められる。

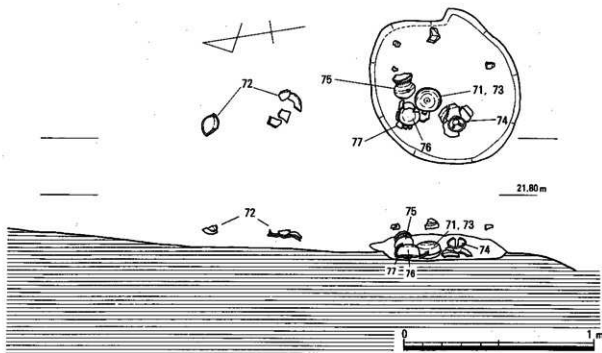
刀子（50、51） B群中からの出土であるが詳細な出土状態はわからない。いずれも欠損品である。50は茎に柄の木質が遺存する。

弓付属金具（52、53） いずれもB群中からの出土である。53のほうが芯金が長く全長は52が3.05cm、53が3.3cm、皮金の長さはいずれも1.75cmを測る。53では皮金に木質が付着遺存する。

針状金具（54～56） 54と55は同一個体の可能性があり、2～3本分の出土ということになる。B群中から出土した。56は全長5.9cmで、両端が細くなる。

周溝内土壌（第57図、図版25-a、b）

横口部正面やや左寄り東周溝底から北東-南西にやや長い楕円形の土壌が検出された。長径88cm、短径76cm、深さ5cmを測る。底面から口縁を打ち欠いた須恵器甕、逆さに伏せた須恵器高



第57図 坂の下4号境周溝内土壌土器出土状況図（1/20）

杯、土師器碗2個、閉蓋状態の杯1組、鉄滓1個などが出土し、土壌北50cmにも須恵器杯身1個が、さらに北5mからも土師器碗が割れて散乱した状態で出土した。

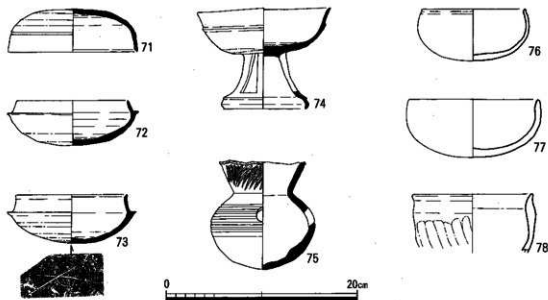
これら出土した土器は葬送儀礼後に廃棄されたものとみられる。土壌と周溝掘削の先後関係を確認する土層観察を行っていないが、土壌の深さが5cmと浅いうえ土器の一部が周溝底から高いレベルにあったこと、それにもかかわらず土壌内土器に2次破損が認められないこと、また土壌外から出土した土器が溝底から5~8cm浮いた状態で出土していることなどから、周溝掘削後一定時間経過後に廃棄されたものと考えたい。

土器 (第58図 図版24)

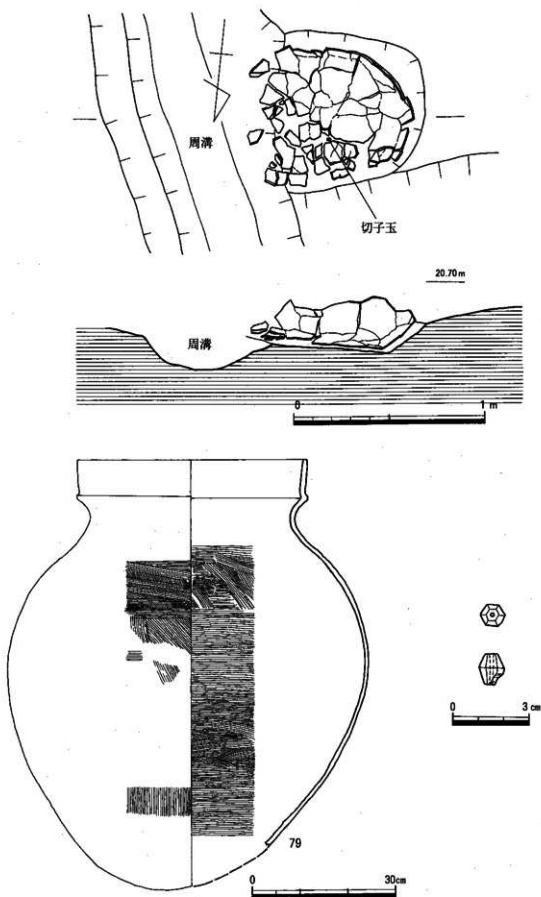
71~75は須恵器、76~78は土師器である。78は土壌から北5mから出土した土師器碗片のひとつである。71は杯蓋で体部と天井部との境にはへら描き沈線がめぐる。72、73は杯蓋で72の外底部には×印のへら記号が刻まれる。以上3点は口径が13.5cmを測る。74は無蓋高杯で脚部の3方に長方形透かし孔を切り出す。脚は長脚化の兆しが見え、若干長めである。75は趣で頸部は短いが付根の締まりはさほどない。頸外面に波長が短く振幅の大きな櫛描波状文がめぐり、胴最大径部にカキメがめぐる。

土器棺墓 (第59図、図版25-c, d)

坂の下4号墳の北東裾、周溝の掘り方との境付近で検出した。口縁は古墳周溝掘削時に破壊されており坂の下4号墳に先行して埋設された墳墓であることがわかる。大形の二重口縁甕を使用しており、棺埋置主軸をN-86°-Eにとる。埋葬角度は水平に近いが若干口が上方に向いた状態である。口縁付近と底部が墳丘地山整形および周溝掘削時に一部破壊されており、棺の北側面も後世の削平で露出することとなったため遺存状況はすこぶる悪い。しかし棺は埋葬完了後、4号墳築造前には既に棺天井は崩落していたものとみられ、土器は上から押し潰された状態を呈していた。このため破損土器片の多くを現場で回収し土器の旧形をほぼ復元することができた。



第58図 坂の下4号墳周溝内土壌出土土器実測図 (1/4)



第59図 坂の下4号墳壇丘下土器棺墓 (1/20)、出土土器棺 (1/8)、副葬切子玉 (2/3) 実測図

出土した土器は破片を含め大甕1個体分のみである。単棺で使用されたものとみられるが、閉蓋形態は不明である。副葬品として棺底から水晶切子玉が1個出土した。

出土遺物(第59図、図版25-e, f)

79は棺に使用された大形二重口縁甕である。やや不整形でための倒卵形の胴部を有し、肩は張らずに緩やかにカーブを描きながら窄まって口頸部にいたる。頸部は径40.8cmを測り小さく外反し受部から口縁がほぼ直立する。受部では断面「コ」字状に突出する。口唇部は角のとれた「コ」字状を呈する。胴部外面はタテハケで仕上げ、肩部に数状のヨコハケをめぐらす。内面はヨコハケで仕上げている。口頸部は内外面ともヨコナデ仕上げ。

水晶切子玉は截頭六角錐を二つ合わせた形状である。図右下部に一部欠損が認められる。

e. 坂の下5号墳

立地と墳丘(第60, 61図、図版26-a~c)

5号墳は群中で最も西、尾根の裾近く標高16mに立地する。尾根端部の地山が南南西に若干突き出た箇所を利用して築かれている。2、3号墳と同様に尾根南斜面に立地している。

盛土はほとんど削平され、石室も天井部石材は除去されたうえ埋め戻され、上面は平坦に均されていたため、地表には古墳の痕跡はまったくとどめていなかった。バックホーによる表土剥ぎ作業時に古墳の周溝を、次いで横穴式石室の一部を検出して発見にいたった次第である。

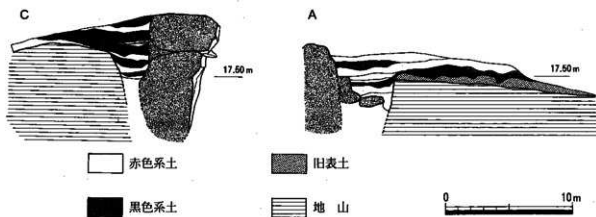
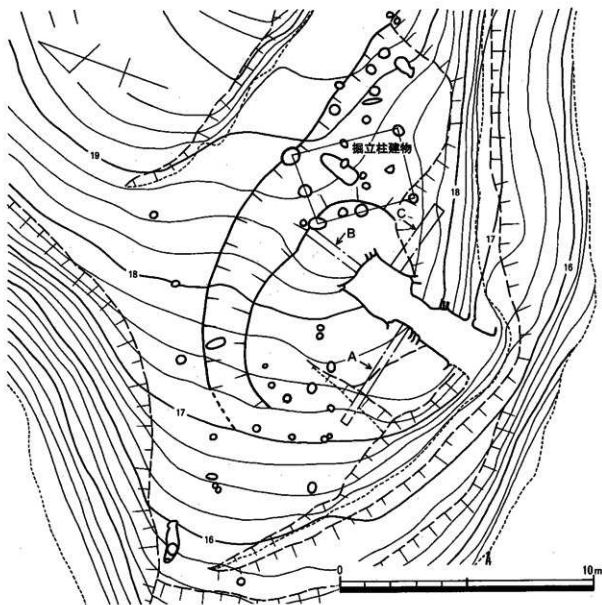
墳形は、石室背後から「コ」字形にめぐる周溝が北西-南東方向に石室主軸と直交して直線的にのび、東西両隅角でL字形に屈曲していることから方墳と考えられる。南北主軸長、東西幅ともに約10mを測る。南斜面に開口する3基の古墳のなかでは墳丘、石室ともに最も規模が大きい。墳丘築造に際しては石室掘り方掘削以外には際立った地山整形が行われた痕跡は認められなかった。古墳の北東に墳丘裾を切って築かれた鎌倉期のものとみられる掘立柱建物1棟が検出されている。周溝は土採りによって大きく削平されており、溝の底が浅い凹みとしてやっと確認できる程度である。奥壁裏で現況幅2.5mを測るものの、北東部では土採りの影響を受けて溝の掘り方が不鮮明となり、傾斜変換線がやや東に流れてしまう。

墳丘盛土はほとんど残っていないが、石室奥壁背後では地山面からの厚さ30cmほどの遺存が確認できた。盛土は石室腰石を据えた後に奥壁上面まで一気に築き上げられている。2段目は壁石を据えてから裏に若干の花崗岩礫を控え積みした痕跡がみられ、黒色土と赤色土が交互に薄く築きあげられていた。

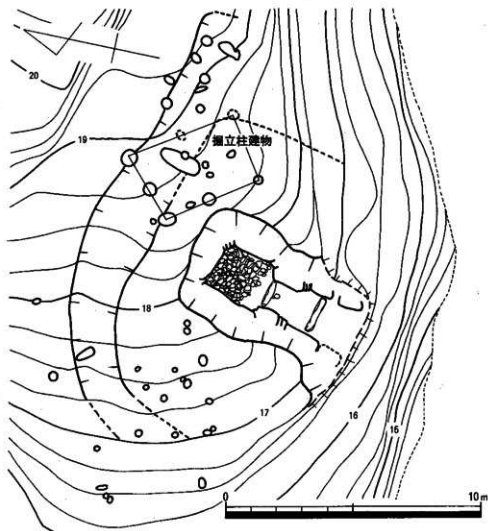
石室(第62図、図版26-g)

石室は主軸をN-17°-Wにとり南に開口する単室両袖式の横穴式石室である。墳丘の中心からやや東に偏った位置に築かれている。前述のように石室は天井部石材の大半が失われているため、その構造は不明であるが、壁石は左羨道前面の1石が抜かれていた以外はほぼ旧状を保っていた。

玄室は奥、左右壁いずれも花崗岩巨岩の1枚石を据えて腰石としている。2、3号墳と同様に壁石材をほぼ地山下に沈め込んでしまう共通の工法がとられる。ちなみに可動クレーン釣り上げ時の石材計量では奥壁材の重量は約4.5t、左側壁は5.0t、右側壁は4.3tを計測した。なお、袖石、羨道の腰石は概ね1~1.8tの石が使われている。玄室床平面プランは右壁長1.70m、左壁長2.2m、



第60図 坂の下5号墳墳丘遺存状況図および墳丘土層断面図 (1/150、1/60)



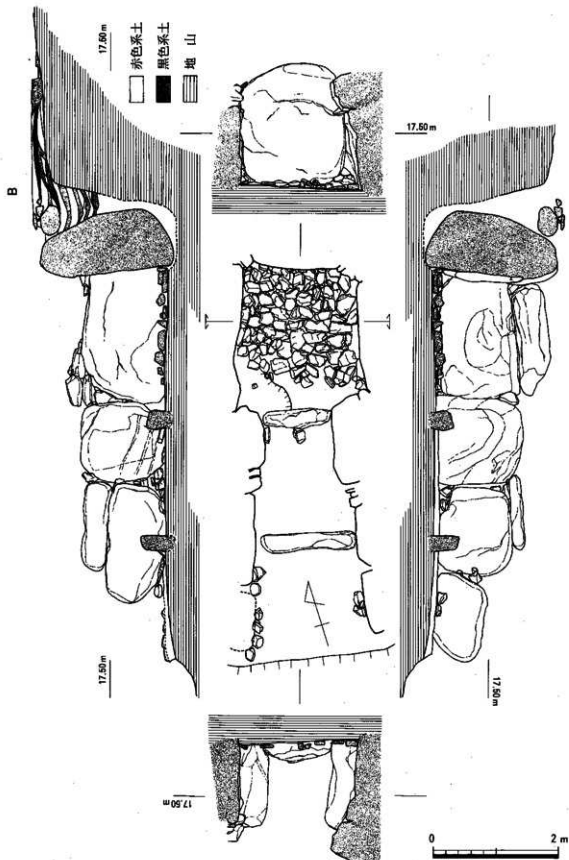
第61図 坂の下5号墳壇丘地山整形図 (1/150)

奥壁幅1.84m、前壁幅2.1m、奥にむかってやや窄まり気味の長方形プランであるが、左側壁が右に比べて若干短い。床には人頭大の白色花崗岩が敷き詰められているが、前壁から30cmには石を敷かず、土器が散乱していた。

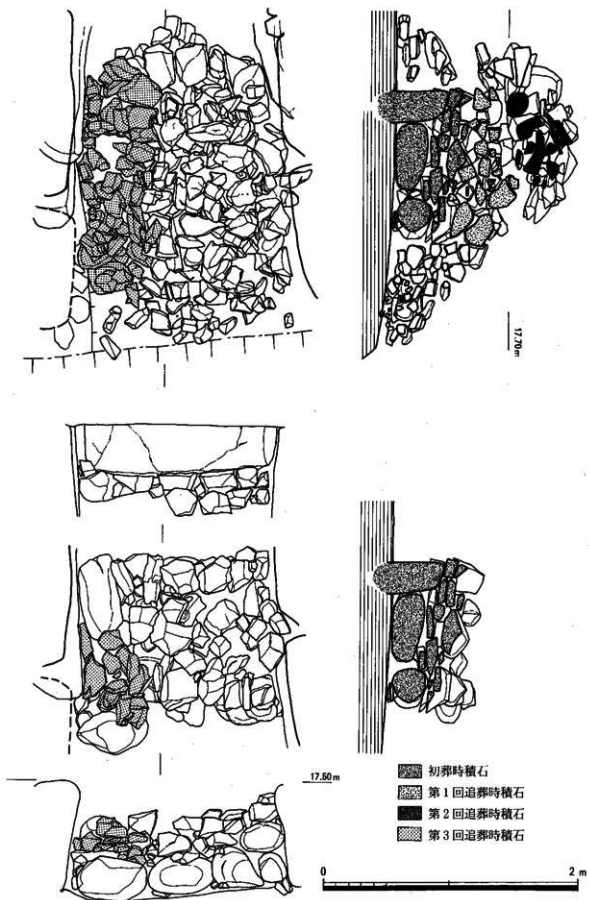
西南隅角には不正形の土塊が掘られ、土器を中心とした遺物が境内に廃棄されていた。追葬時の清掃埋納とみられる。玄門部は厚手の花崗岩板石で石室主軸と平行して両袖に立てる。

羨道は左壁長3.9m前後、右壁長3.6m。玄門から前面にむかって若干「ハ」字形に広がる平面プランを有する。第2 框石部で幅110cm、中央第1 框石部で160cm、羨道入口部で190cmを測る。第1、第2 框石間には166cmを測る。框石と壁体は左右両壁とも3枚の花崗岩板石を立てて腰石としているが、壁の高さは袖の高さによって規定されているものとみられ、左右とも中央の壁体では隣り合う袖の高さに合わせるように2段目の板石が積まれている。このことから羨道の天井の高さは125cm～140cmほどとみられる。

第1 框石およびその前面基底部に配された人頭大かそれより大きめの4個の転石を根石として閉塞石が積み上げられていた。閉塞石は高さ150cmまで遺存しており、遺存状態は良い。土石の積み上げ状態、使用石材観察をもとに追葬回数について検討したところ、閉塞後に少なくとも3回の追



第62図 板の下5号墳石室実測図 (1/60)



第63図 坂の下5号墳石室閉塞状況図 (1/30)

葬が行われたものと考えた(第63図)。

まず初葬時の閉塞石は高さ70cmまでの基底部が遺存していた。根石上には大きめの角礫を積み、その内側には割り石とともに粘土を詰めて裏込めしながら丁寧に閉塞していった様子が窺える。最初の追葬は閉塞石の上方を崩して行われたとみられる。初葬時に比べて石積みが粗い様子が窺える。2回目の追葬時は積み石の上面を積みかえて行っている。前回の追葬時の積石との間に粘土層をはさみ、粘土と石を混ぜ、むしろ粘土を多く詰めている。3回目の追葬は左側壁から幅60~70cmにわたって細かい礫を積み上げている。検出状況時の平面図では左端に小礫が集中していることが認められ、築造当初の石積み面を入口正面からみると左端のみ石積みが乱れ小礫を詰めている状況が、玄門側からの観察でもやはり左壁から70cmで石積みが途切れた部分を確認された。

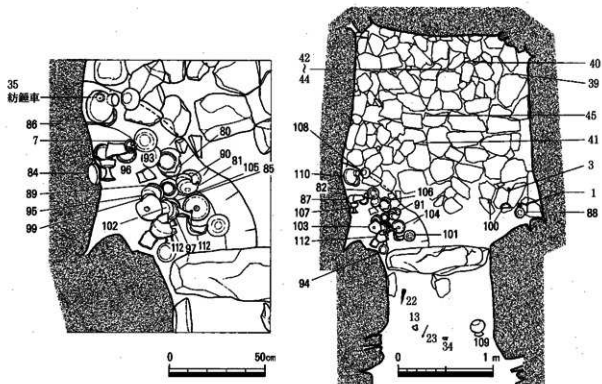
遺物出土状況(第64図、図版27-a~d)

石室内から馬具、武器、工具、装身具、須恵器、土師器等が出土している。

馬具類の多くは玄室内右袖石下付近の敷石間にすべり落ちた状態で出土した。装身具は玄室の中央から奥壁にかけて敷石の上や間に散乱状態で出土した。土器の多くは左袖石下左隅角床下に深さ10cmの三角形の土壇を掘り埋納したものである。新旧の土器が重ねられて一緒に埋納されており、他に石室内から出土した土器が少ないことから最後の追葬時にまとめて埋められた可能性が高い。

圭頭大刀の柄頭は羨道第1框石と第2框石のほぼ中間の床直上で出土した。紐通金具は第66図に図示したとおり着装時の位置関係を保って出土している。

須恵器84は左側壁中央で壁石の下に敷かれた状態で出土した。石室構築時に供献されたものとみられる。



第64図 坂の下5号墳石室遺物出土状況図(1/40、1/80)

鉄器 (第65, 66図、図版29, 30)

馬具 (1~21)

1~3は辻金具である。板状で十字形の形態をとり、交差部に扁平半球形の突出部を有し、その中央から1、3は4花卉、2では5花卉の飾金具を挟んで鋲留めしている。鋲頭と飾金具は銀貼りである。

4は足金具である。長さ2.4cm、幅2.1cmを測る。図の下縁はU字形をなす。2個の鋲を縦列に打ち込む。

7、8、9は素環鍍板付き轡で7、8は鍍板、10は引手金具である。7は環の長径6.8cm、短径5.6cm、板状立間幅2.2cmを測る。8は環の長径6.0cm、短径5.5cm、板状立間の幅2.1cmを測る。双方とも立間は基部を残して欠失している。7の環には銜環の一部が錯着している。9は残存長15.6cmを測り、環は両端とも破損する。

10は環状雲珠の欠損品とみられる。使用時に変形したのであろうか現況では正円をなさず所々にいびつな屈曲がみられる。

11~13は鉸具である。11は皮革に接続し、13は鋲留めである。鞍金具として使用されたものとみられる。12は形状の詳細は不明。

14は鍍金具とみられる。U字金具の両端に鋲が打ち込まれる。釣金具が錯着する。

15は釣金具である。5、6、16~18は鋲留鉄板である。21は不明。

武具

鉄鍔 (22~27) 22は圭頭鍔。23には篋被が遺存する。

銀製圭頭大刀金具 (34) 柄頭金具のみの出土である。銀板をU字形に曲げ、柄頭に巻いていたものとみられる。両側縁は折り曲げているが、所々に皺が寄っており、木製の柄に銀板をあてて敲き曲げたものとみられる。銀板の両端は外向きにまるめ紐通し孔状をなす。銀製円環が図のような位置関係を保って出土しており、柄頭に穿たれた紐通し孔の飾り金具とみられる。

小刀 (28) 刃部と基部の一部が欠失しており、全長は不明。刃最大幅は22mm、茎最大幅16mm、厚は3mmを測る。基部には樹皮を巻き付けた痕跡が残る。

刀子 (29~33) 5本出土している。

不明品 (36~38) 薄板材片が3片出土している。

紡錘車 (第66図35、図版29)

遺物埋納土壌底からの出土である。滑石製で径4.6cm、厚さ1.2cmを測る。中央に径7mmほどの軸孔を設ける。

装身具 (第66図、図版30)

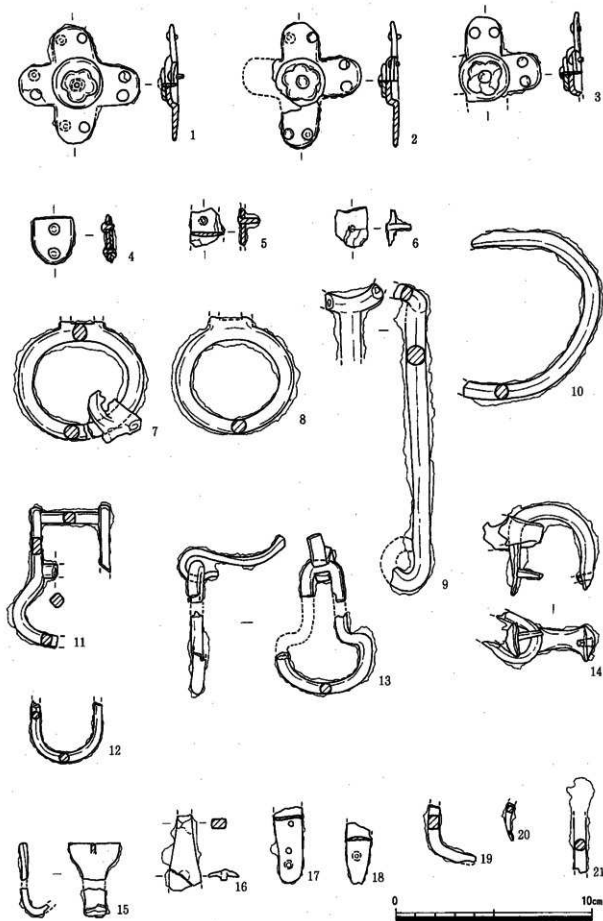
金環 (39) 1個出土した。銅地の腐食が進行し金箔が剥離しかけている。環径は1.8cmで、細身のつくりである。

水晶勾玉 (40) 1個出土している。全長2.8cmで、頭部は小さくやや角張る。紐通し孔は頭部の下位に穿たれている。背のカーブは緩やかである。

メノウ丸玉 (41) 1個出土している。

ガラス玉 (42~47) 6個出土している。いずれも小玉で色はダークブルーである。

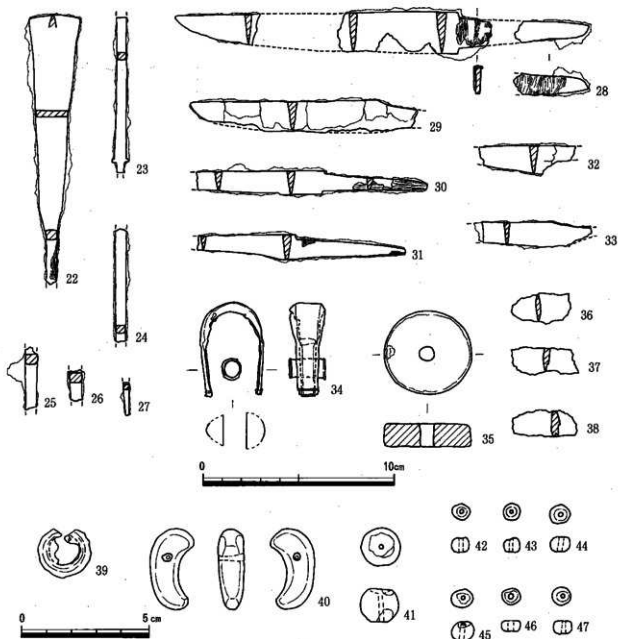
土器 (第67, 68図、図版27~29)



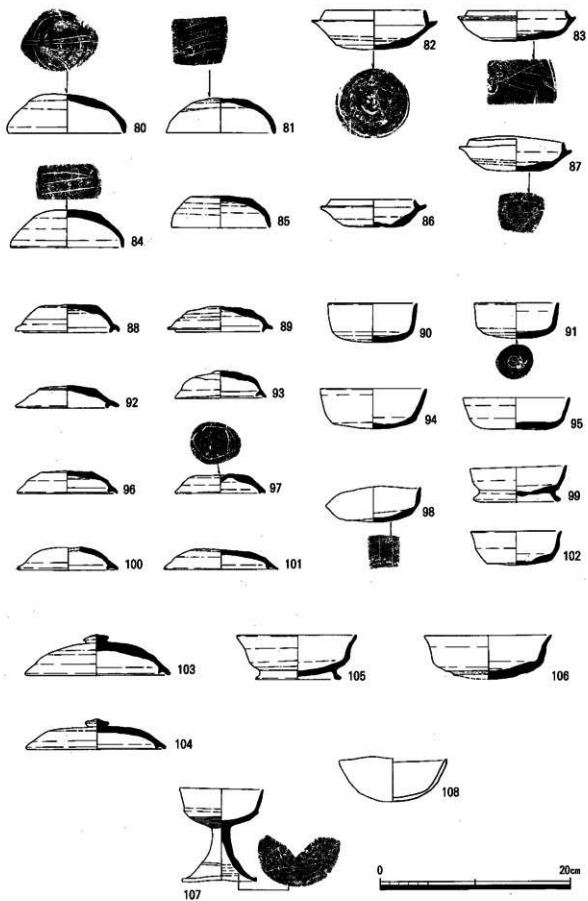
第65図 板の下5号墳出土馬具実測図(1/2)

92、98、109が羨道からの出土である以外はすべて玄室からの出土で、そのほとんどは前壁左隅角の不定形土塊からの出土である。そのうち108は土師器碗で、他は須恵器である。

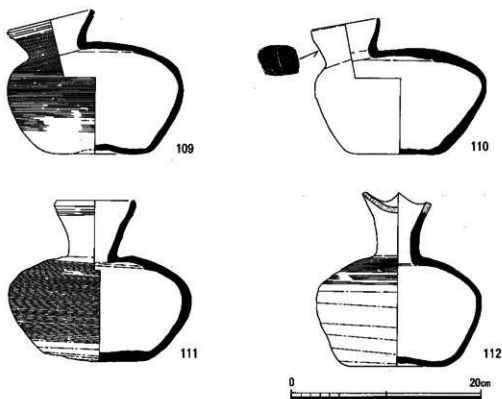
須恵器（82～107、109～112） 杯蓋14点、杯身13点、高杯1点、提瓶4点が出土した。杯蓋と身はほぼ同数である。杯蓋は形態的にかえりの有無と口縁径によって5類に分かれる。かえりをつけず口縁径が11.5cmほどの類（80、81、84）、同じく口縁径が11cm弱と小形の類（85）、かえりを有す類のうちつまみをつけず大きいかえりを有す類（88、89、92、93）、同じく小さいかえりを有す類（96、97、100、101）、つまみを有し口縁径が12.5cmをこえる類（103、104）である。また、杯身も立ち上がり有する類（82、83、86、87）、立ち上がりを持たないものうち小形の類（90、91、98）、やや口径の大きい類（94、95）、高台を有す類のうち小形の類（99）、口径の大きい類（105、106）の5類に分けられる。



第66図 坂の下5号墳出土鉄器、装身具実測図 (1/2、2/3)



第67図 坂の下5号墳出土土器実測図① (1/4)



第68図 坂の下5号墳出土土器実測図② (1/4)

f. 小結

本地点では計5基の墳墓が確認された。墳墓の築造時期は、まず4号墳下の大形土器棺墓、次に4号墳が築造される。最後に、2、3、5号墳が築造され、大きく3期に分かれる。

土器棺墓の時期については、柳田編年でⅡ-B期に位置付けられた三雲八反田出土棺例^{註1}に比べ口頸部の稜が甘くなっていること、肩の張りも不明瞭となりプロポーションに崩れがみられること、棺としてより大型化している点を考慮して八反田例よりも後出とし、Ⅱ-C～Ⅲ-a期に位置付けられるものとする。出土した水晶切子玉は棺底から出土したことから副葬品と考えたい。切子玉の副葬例としては古い時期にあたる。

4号墳は横口部に玄武岩柱石をたて袖部を形成し、開口部全面に石積の壁面を有す古式の横穴式石室である。玄室は長さ308cm、前壁幅^{註2}140cm、奥壁幅152cmでやや奥に幅広い長方形プランを呈し、柳沢一男の分類によるA型石室のなかでは小形である。周壁は基底部に^{註3}は腰岩が認められ特に奥壁付近では顕著である。その上に花崗岩転石を中心に石積みをおこなっているものの個々の石材は分厚く積み方も粗い。そのなかで周壁の一部に玄武岩板石を使用していることに注目したい。古式横穴式石室周壁の構築技法変遷のなかで玄武岩の小口石積みから花崗岩積みへの過渡的様相をみせているのである。同様の石室形態を有し、築造時期が判明している前原市西堂四反田1号墳^{註4}、福岡市梅林古墳と比較してみると、腰石が顕著に据えられた点で西堂四反田1号墳よりも後出的である。梅林古墳とは腰石の配置、玄門部の造作に共通要素が多いが、梅林古墳では周壁石材にすべて花崗岩転石が使用されている点で4号墳より後出的要素も認められる。

築造時期について、周溝土壇から出土した須恵器がMT15型式であるが、埋没過程での上層からの掘りこみであるため築造時期はこれを遡ることは明らかである。前述した梅林古墳の築造時期はTK23型式期と推定されており、4号墳は梅林古墳に並行するか若干遡る5世紀後半期の築造で押さえておきたい。

2、3、5号墳は尾根南斜面に横並びに築造されていた。いずれも馬蹄形に周溝をめぐらし中央に半地下式の横穴式石室を構築した方墳である。開口方位が一様に南向きであること、石室壁には花崗岩板石を立て、羨道に第2框石を配すなど石室の構築方法、パターンに共通点が多いことなどを考慮すると、3基とも相互に時を置かずして構築された古墳と考える。3基の古墳を南から眺めると5号墳から2号墳に向かってほぼ直線的に並ぶことから、丘陵の裾からこの3基の古墳を結ぶ墓道があったことも想像に難くない。

3基の古墳相互の関係について、石室、墳丘規模ともに尾根先端に近い5号墳から2号墳へと奥に向かって小形化している。この規格差が各古墳築造集団間の格差を示していることは明らかである。各古墳から出土した土器、装身具以外の遺物としては、5号墳からは圭頭小刀、金銅鍍金具、鍍金具など高質の副葬品がみられるのに対し、3号墳では大刀、2号墳では鍍金具のみの出土と、後世の盗掘による資料の遺存状況の差を考慮しても、質的に格差があることは首肯できる。古墳群における古墳の規格差と副葬遺物の内容差が立地関係と相互に合致した例として興味深い。

2、3、5号墳の築造時期について、玄室左壁下から出土した須恵器(84)がTK43型式に位置付けられることから6世紀第4四半期と考えられ、2、3号墳は立地からこれに続いて築かれたと考えられる。5号墳の閉塞石の開閉状況から少なくとも4回の追葬が行われたことが推定され、出土土器もTK46並行期まで出土しており約1世紀弱の間葬送が営まれていたことになる。

註1 柳田康雄「3、4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念論集古文化論集』1982年

註2 柳沢一男「壱穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念論集古文化論集』1982年

註3 岡部裕俊「井原地区周辺の古墳群」前原市文化財調査報告書第51集 1994年

註4 濱石哲也、菅波正人、林田憲三「梅林古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集 1991年

遺物番号	図版番号	器種	出土遺構	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
1	15-1	杯蓋	1号墳前庭部表土	3.9	13.2		白色砂粒	暗褐色	良好	
2		杯蓋	1号墳前庭部表土	(3.2)			白色砂粒	乳褐色	良好	
3	-3	杯蓋	1号墳前庭部土壇	3.8	12.6		白色砂粒	黒灰色	良好	ヘラ記号あり
4	-4	杯身	1号墳前庭部土壇	3.9	11.4		白色砂粒	暗灰色	良好	
5		杯身	1号墳前庭部表土	4.4	13.0		白色砂粒	茶色	良好	赤焼
6		杯身	1号墳前庭部表土	3.9	11.0		白色砂粒	乳灰色	良好	
7		杯身	1号墳前庭部表土	(2.6)			白色砂粒	淡青灰色	良好	
8		提瓶	1号墳前庭部表土	(9.1)			白色砂粒	灰色~黒色	堅緻	
9	-9	横瓶	1号墳玄室埋土	14.0	8.2	8.5	白色砂粒	黒灰色	良好	タタキ目録、ヘラ記号あり
10		壺	1号墳前庭部表土	(5.2)	22.8		白色砂粒	灰色	堅緻	
11		壺	1号墳前庭部土壇	(7.1)	19.4		白色微砂粒	淡黄灰色	良好	

第5表 坂の下古墳群出土土器観察表①

遺物 番号	区画 番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備 考
25	18-25	杯 蓋	2号墳羨道部	2.8	11.0		砂 粒	茶 褐 色	㊦㊧	赤焼
26	-26	杯 蓋	2号墳羨道部	2.7	11.2		砂 粒	淡 灰 色	㊦㊧	へラ記号あり
27	-27	杯 蓋	2号墳羨道部	2.5	11.0		白色砂粒	暗 灰 色	㊦㊧	へラ記号あり
28	-28	杯 蓋	2号墳羨道部	2.8	12.0		白色砂粒	黒 灰 色	良好	
29	-29	杯 蓋	2号墳羨道部	3.1	14.2		白色砂粒	黒 灰 色	良好	
30	-30	杯 蓋	2号墳羨道部	2.5	12.7		白色砂粒	灰色~黒色	良好	
31	-31	杯 蓋	2号墳羨道部	2.5	12.2		白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	
32	-32	杯 蓋	2号墳羨道部	3.2	14.0		白色砂粒	青 灰 色	良好	
33	-33	杯 蓋	2号墳羨道部	2.9	12.0		砂 粒	暗 灰 色	良好	
34	-34	杯 蓋	2号墳羨道部	2.9	14.2		白色砂粒	黒 灰 色	良好	
35	-35	杯 身	2号墳羨道部	3.8	11.2		白色砂粒	黒 灰 色	良好	内面にへラ記号あり
36	-36	杯 身	2号墳羨道部	3.8	12.2		白色砂粒	赤茶~黒灰色	良好	へラ記号あり 赤焼
37	-37	杯 身	2号墳羨道部	3.7	12.2		白色砂粒	淡 黄 灰 色	㊦㊧	へラ記号あり
38	-38	杯 身	2号墳羨道部	3.5	9.2		小砂粒少含	淡 黄 灰 色	良好	へラ記号あり
39	-39	杯 身	2号墳羨道部	4.0	12.4		砂 粒	明 灰 褐 色	㊦㊧	
40	19-40	杯 身	2号墳羨道部	3.5	12.5		白色砂粒	暗 茶 色	良好	へラ記号あり 赤焼
41	-41	杯 身	2号墳羨道部	3.2	13.0		砂 粒	淡 青 灰 色	良好	
42	-42	杯 身	2号墳羨道部	4.4	13.5		白色砂粒	灰 色	良好	
43	-43	杯 身	2号墳羨道部	9.7	13.4		白色少砂粒	黄 灰 色	良好	
44	-44	杯 身	2号墳羨道部	3.1	13.5		砂 粒	淡 灰 色	良好	
45	-45	杯 身	2号墳羨道部	4.4	13.8		白色砂粒	灰色~黒色	良好	
46	-46	杯 身	2号墳羨道部	5.0	13.7	8.3	白色砂粒	淡 黄 灰 色	良好	
47	-47	杯 身	2号墳羨道部	4.7	16.4	12.4	白色砂粒	赤 紫 褐 色	良好	赤焼
48	-48	横 瓶	2号墳羨道部	11.0	6.3		白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	へラ記号あり
49	-49	横 瓶	2号墳羨道部	(16.2)		8.8	白色砂粒	淡 黄 褐 色	㊦㊧	陶質
50	-50	横 瓶	2号墳羨道部	15.7	9.2	11.0	白色砂粒	黒黄灰褐色	良好	
51	-51	横 瓶	2号墳羨道部	(17.0)			白色砂粒	淡 黄 灰 色	㊦㊧	
52	-52	横 瓶	2号墳羨道部	18.1	12.3	12.8	白色砂粒	淡 黄 灰 色	良好	
53	-53	碗	2号墳羨道部	11.1	5.6		白色砂粒	淡 茶 色	㊦㊧	
54	-54	碗	2号墳羨道部	5.4	11.1		白色砂粒	明 茶 色	不良	
55		杯 身	2号墳羨道床面	(3.9)	12.7		白色砂粒	淡黄茶~黒灰色	良好	
56	-56	杯 身	2号墳羨道部	4.4	12.8		白色砂粒	明 黄 茶 色	不良	
57		碗	2号墳床面	(4.9)	12.7		白色砂粒	淡黄茶~黒灰色	良好	
58	-58	杯 身	2号墳羨道部	6.0	16.2		白色砂粒	明 黄 茶 色	㊦㊧	内側に朱
59	21-59	杯 蓋	3号墳羨道部	3.3	11.8		白色砂粒	乳 白 色	㊦㊧	
60	-60	杯 蓋	3号墳玄室	3.3	^{12.8} _(受部)		白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	
61	-61	杯 蓋	3号墳玄室	3.2	^{12.4} _(受部)		白色砂粒	暗 灰 色	良好	
62	-62	杯 身	3号墳羨道部	4.1	10.0		白色砂粒	淡 黄 灰 色	不良	
63	-63	杯 身	3号墳玄室	4.0	11.9	8.1	白色砂粒	暗 灰 色	良好	
64	-64	杯 身	3号墳玄室	4.3	11.5	8.2	白色砂粒	黒 灰 色	良好	
65	-65	高 杯	3号墳羨道部	9.7		7.4	白色砂粒	灰色~暗灰色	良好	へラ記号あり
66	-66	高 杯	3号墳玄室	8.3	9.2	6.5	白色砂粒	赤紫茶褐色	良好	へラ記号あり
67	-67	台付反壺	3号墳羨道部	21.2		9.4	白色砂粒	紫灰色~黒灰色	良好	へラ記号あり
68	-68	横 瓶	3号墳玄室	12.0		10.5	白色砂粒	淡 青 灰 色	良好	へラ記号あり
69	-69	横 瓶	3号墳玄室	12.5		9.0	白色砂粒	黒 灰 色	良好	へラ記号あり

第6表 坂の下古墳群出土土器観察表②

遺物 番号	図版 番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
70	21-70	提瓶	3号墳玄室	16.2	8.6	12.4	白色砂粒	灰褐色	良好	
71	24-71	杯蓋	4号墳周溝土器B	11.6	13.3		白色砂粒	淡青灰色	良好	
72	-72	杯身	4号墳周溝土器B	4.8	11.4		白色砂粒	淡青灰色	良好	
73	-73	杯身	4号墳周溝土器B	5.1	11.4		白色砂粒	淡灰色	良好	ヘラ記号あり
74	-74	高杯	4号墳周溝土器B	10.7	13.9	8.4	白色砂粒	灰色	良好	
75	-75	盃	4号墳周溝土器B	(11.5)			砂粒	灰色	良好	
76	-76	碗(土師)	4号墳周溝土器B	5.5	10.8		砂粒	茶褐色	良好	
77	-77	碗(土師)	4号墳周溝土器B	6.1	13.4		砂粒	淡褐色	???	
78		壺	4号墳東周溝土器B	(6.2)	12.6		白色砂粒	明黄茶色	良好	外面にスス付着
79	25-79	甕	4号墳墳丘下	(91.4)	楕円形		砂粒	赤褐色~黄褐色	良好	
80	27-80	杯蓋	5号墳玄室	4.1	12.0		白色砂粒	灰色~灰白色	不良	ヘラ記号あり
81	-81	杯蓋	5号墳玄室	3.6	11.2		白色砂粒	黄灰色	良好	ヘラ記号あり
82		杯身	5号墳玄室	4.2	10.4		白色少砂粒	暗灰色	良好	ヘラ記号あり
83		杯身	5号墳玄室	3.3	10.3		白色砂粒	灰色	良好	ヘラ記号あり
84	-84	杯蓋	5号墳玄室	2.9	11.8		白色砂粒	淡緑灰色	良好	ヘラ記号あり
85	-85	杯蓋	5号墳玄室	3.3	10.2		白色少砂粒	灰色	良好	
86		杯身	5号墳玄室	2.9	8.8		白色砂粒	灰色	良好	
87		杯身	5号墳玄室	3.3	9.9		白色砂粒	暗灰色	良好	ヘラ記号あり
88	-88	杯蓋	5号墳玄室	3.0	8.9		白色少砂粒	淡黄灰色	良好	
89	-89	杯蓋	5号墳玄室	2.2	9.0		砂粒	青灰色	良好	
90		杯身	5号墳玄室	5.1	9.5		白色砂粒	淡灰褐色	良好	
91		杯身	5号墳玄室	3.7	8.8		白色砂粒	淡茶褐色	良好	ヘラ記号あり
92	-92	杯蓋	5号墳羨道	2.4	8.4		白色砂粒	淡茶褐色	良好	
93	-93	杯蓋	5号墳玄室	2.9	7.7		長粒	灰色	良好	
94		杯身	5号墳玄室	4.3	11.2		白色砂粒	黒灰色	良好	ヘラ切り後握り手持ちのヘラ割り
95		杯身	5号墳玄室	3.4	11.1		砂粒	黒灰色~白灰色	良好	
96	-96	杯蓋	5号墳玄室	2.4	8.5		砂粒	緑灰色	良好	表面灰付着
97	-97	杯蓋	5号墳玄室	5.1			白色砂粒	淡黄褐色	不良	ヘラ記号あり
98		杯身	5号墳羨道閉塞石下	3.8	10.1		白色砂粒	灰色~暗灰色	良好	ヘラ記号あり
99		杯身	5号墳玄室	3.9	10.2		白色少砂粒	淡灰色	不良	底部に指頭圧痕あり
100	-100	杯蓋	5号墳玄室	(2.4)	8.4		白色少砂粒	乳灰色~淡黄灰色	???	
101	-101	杯蓋	5号墳玄室	2.3	9.8		白色少砂粒	淡黄灰色	不良	
102		杯身	5号墳玄室	3.5	9.6		砂粒	灰色	良好	
103		蓋	5号墳玄室	4.4	12.8		砂粒	灰色	普通	
104		蓋	5号墳玄室	2.2	9.0		砂粒	青灰色	良好	
105		杯身	5号墳玄室	4.7	12.5		白色砂粒	灰色~黒灰色	良好	
106		杯身	5号墳玄室	4.5	13.7		砂粒	灰色~灰白色	不良	
107		高杯	5号墳玄室	9.9	8.6	7.8	白色砂粒	黒灰色~淡黄灰色	良好	ヘラ記号あり
108		碗(土師)	5号墳玄室	4.8	11.3		白色砂粒	淡黄茶色	不良	
109		横瓶	5号墳羨道	15.2	8.9		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
110		横瓶	5号墳玄室	15.3	7.0		白色砂粒	灰褐色	良好	ヘラ記号あり
111		提瓶	5号墳石室埋土	16.9	8.0		白色砂粒	黒灰色~淡黄灰色	良好	
112		提瓶	5号墳玄室	(18.2)			白色砂粒	淡黄灰色~茶褐色	良好	

第7表 坂の下古墳群出土土器観察表③

(6) C-6地点

a. 概要

C-6地点は区画整理事業地の最北部に位置する。砂魚塚1号墳(前方後円墳・標高62m)を最高所として西方向に峰筋が100mほど続く(第69図)。この丘から北を臨むと正面には糸島富士と唄われる可也山を眼前に見据え、西は加布里湾から志摩半島の船越崎、東は津和崎あたりまで見通すことができる。

調査を開始するにあたり、旧加布里湾への眺望を生かした墓地、城郭遺構の存在を予想し、尾根筋の表土を除去して遺構検出に努めた。砂魚塚1号墳の西側に柱穴状の小ピット群を検出したが、この小ピット群は大半が腐朽した針葉樹の木根であることが判明した。また北側斜面でもバックホーによる試掘を行ったが、遺構は検出できなかった。

砂魚塚1号墳は分布調査時に古墳であることが判明していたが、既に墳丘中央部の天井が崩壊し側壁が露出している状況であったため遺存状況は悪いという印象を持った。周辺の雑木および下草の伐開直後に再度現地を踏査したところ円丘の北裾に低い突出部が認められたため、1992年3月に筑紫女学園高等学校社会科学部の協力を得て現況地形の測量を行い、前方後円墳であることを確認した(第70図)。

市教育委員会はこの結果を受けて区画整理組合と古墳の保存について協議を行った。しかし古墳が駅予定地に隣接しているうえ丘陵の最高所であることから、現状のまま保存した場合、造成後の周辺地区との標高差が顕著となり、防災上の問題が生じてくるため現状保存は困難という結論に達した。

しかし、貴重な前方後円墳という点では理解を得て、横穴式石室については区画整理地内の公園に坂の下5号墳石室とともに移築復元することとなった。

砂魚塚1号墳の調査にあたっては、事前の墳丘現況測量図をもとに仮の墳丘主軸を設定しそれに直交する土層観察壁を前方部と後円部にそれぞれ設定した。また石室羨道および墓道の堆積状況によって追葬、盗掘状況を観察するため、墓道の半截を行った。

砂魚塚2号墳は丘陵北斜面の表土剥ぎ時に新たに発見した古墳である。急斜面に築造され、墳丘の流失が激しかったためか墳丘は全く遺存しておらず石室も大破していたため、バックホーによる表土剥ぎの際に石室の一部にあたり壊してしまった。

砂魚塚1号墳の東南裾下の南面する斜面からは蔵骨器埋納土壌を検出、調査しているが、後刊で報告する。

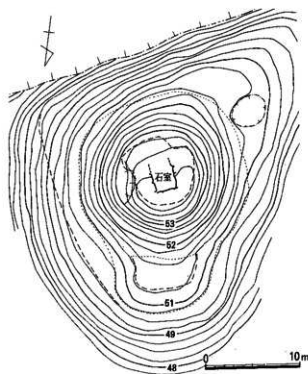
b. 砂魚塚1号墳

立地および墳丘(第71図、図版31)

砂魚塚1号墳は丘陵東端の最高所、標高60m地点に位置する前方後円墳である。北側の旧加布里湾から見上げると東西になだらかに伸びる丘陵中央が乳頭状に盛り上がり、C-6地点の丘陵上では最も日を引く位置にある(図版31-a)。古墳の南は急斜面であるが、北は南に比べて勾配はな



第69圖 C-6 地点遺構配置圖 (1/500)



第70図 砂魚塚1号墳調査前地形図 (1/400)

路を意識し、造出し状の低い突出部を形成したものとみられる。外表には葺石、埴輪等は認められない。

墳丘土層と地山整形 (第72図、図版33)

まず墳丘主軸とそれに直交方向に設定した土層観察壁を残して表土除去を行い、墳形を確認した後、トレンチを設定し墳丘の土層観察を行った (第72図)。

前方部はクビレ部付近では後円部から流れ落ちた暗茶褐色土層を検出したが、表土下20cm~25cmで地山の赤色ロームが姿を表し、顕著な盛土の痕跡は観察できなかった。前方部は凡そ地山の整形によって墳形を整えたとみられる。

後円部の墳形は標高50.50mのコンターラインを目安にして墳丘基底面を削りだした後、石室壁の構築と並行して赤色土と黒色土を交互に築き固めて墳丘を構築している。

盛土状況を各土層断面で観察してみると後円部B、C、D断面では一様に旧表土層 (暗茶褐色腐食土層) の上から盛土を行っていることが確認された。土層の堆積状況から盛土が概ね3段階に分けて行なわれていることが観察された。

第1段階盛土は旧表土から標高52.5~52.7mまでの層である。石室腰石を据えた後、右側壁1段目の天場まで埋め戻したものであるが、A、B断面では腰石の高さが腰高であったためか、第1盛土は石材の中途までで止まっていた。盛土単位が大きく、かなり粗い築き固めと感じられた。

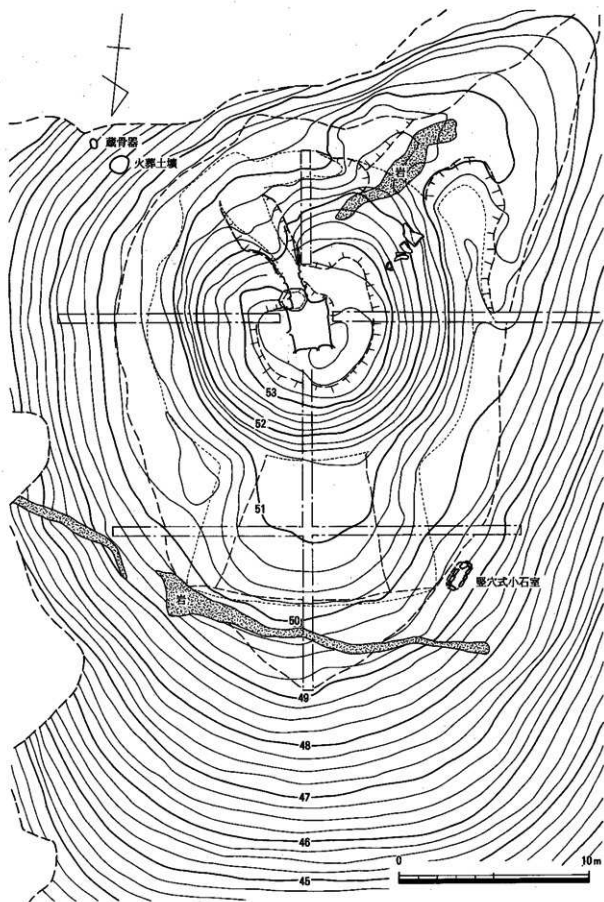
第2段階盛土は右側壁2段目天場まで行われており、標高52.8~53mを目安とする。奥ならびに左側壁腰石上面まで盛土されていた。盛土の平面観は後円部中央から半径9mほどの円丘状に盛土が行われていた。第1盛土同様粗い築き固めであった。

第3段階盛土は標高53.5m前後までの盛土である。墳頂部に近く、攪乱が著しいが、遺存状況が

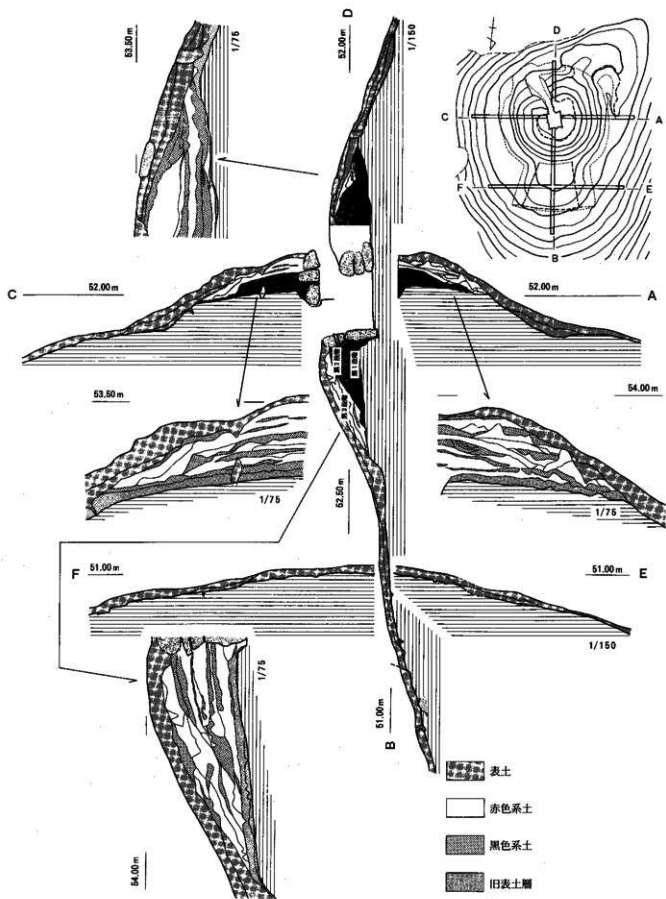
だからである (図版31-b)。

古墳の主軸方位はN-6°-Wで、ほぼ南北を向き、前方部は旧加布里湾方向に向かって北に造り出される。

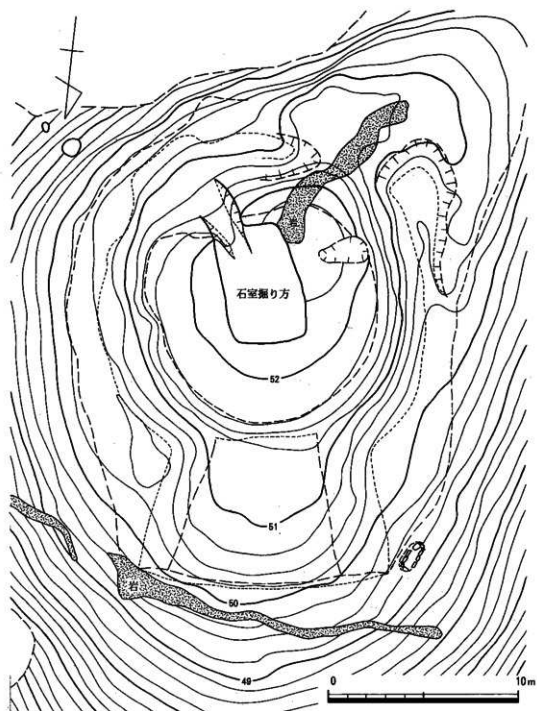
墳丘は前方部、後円部とも1段築成である。墳丘長24.0m、後円部径17.4m、高さ4m、前方部長7.5m、幅13m、クビレ部幅5.3m、高さ1mを測る。後円部東裾付近では若干墳丘が削られ変形しているようである。後円部に対し前方部長は5分の2強を測る。また、前方部と後円部の現況での比高差は3mを測る。前方部は後円部に対して著しく低く、墳頂は平坦面をなすが、クビレ部から前方部中央に向かって少し高くなっていることから、前方部中央にクビレ部より若干高い祭壇状の平坦部を有していたか、前方端部に向かって若干の登り勾配を有していたものとみられる。後円部東南部の石室墓道前面では埴輪が若干突き出ており、墓道へいたる通



第71图 砂魚塚1号墳填丘遺存状况图 (1/200)



第72图 砂鱼塚1号填丘土層断面图 (1/75, 1/150)



第73図 砂魚塚1号墳地山整形状況図 (1/200)

比較的良好なC断面では褐色土と黒色土を交互に突き固めた丁寧な盛土層が認められた。土砂の流失、漏水を防止するため丁寧な盛土が行われたとみられる。

各段階の上面には黒色土層が覆い各段階毎に表面を黒色土で被覆していた。

前方部では盛土層は全く遺存しておらず、墳裾の地山整形以外は墳形を整える程度のわずかな盛土であったことが予想される。

地山整形の状況は第73図に示した。前方部は地山整形によってほぼ現形近くまで墳形を整えている。後円部は前方部より約50cm高く平坦面が整形されているが、この整形面は水平ではなく北か

ら南に向かって若干高くなっている。平坦面表層には旧表土が残っていたことから、この整形面は旧地形のまま周辺部の掘削整形を行ったため、自然の勾配がそのまま残ったものとみられる。

墳丘基底部は地山整形によって墳形を整えているが、南西部では幅6m、長さ3mにわたり陸橋状に掘り残されていた。これは表土下の変成花崗岩脈部分だけ掘削を断念したために偶発的に削り出されたのであろう。

石室（第74図、図版36）

本墳の埋葬施設は後円部中央に構築された南南東に開口する単室両袖式の横穴式石室である。発見時点で既に石室部は破壊、崩落し側壁が墳丘に露出しており、石室内には土砂が流れ込み埋没した状態であった。石室内の土砂を除去したところ、多数の崩落した石材が姿を表し、そのなかには楔を打ち込んで割った痕跡を明瞭に残すものがあった。近在集落の石垣材として搬出されたものとみられる。石材は荻浦で産する花崗閃緑岩、アプライト系およびベグマタイト系花崗岩が用いられている。

玄室

玄室は主軸方位をN-22°-Wにとり墳丘主軸に対して若干東側にふれる。床面は左壁の長さ220cm、右壁235cm、奥壁幅198cm、前壁幅210cmを測り、平面形は主軸方向に若干長い方形に近いプランを呈し、左袖幅75cm、右袖幅45cmで羨道がやや右寄りに位置する。

玄室壁面は概ね床から2mの高さまで遺存していたが、壁面上方の石材は天井破壊の崩れを受けて外側に倒れかかるなどぐらつきが目立っていた。

石室は左壁では花崗閃緑岩製の一枚石を横に据えて腰石とし、2段目には大きな2枚の平石を平積みし、3段目ではいびつな塊石の破断面を壁面として横に並べて据える。右壁では腰石に2枚の板石を横並びに据え、2段目には2枚の平石を平積み、3段目には塊石の破断面を壁面として据える。壁石は盛土と並行して積み上げられていた。

奥壁は右半部には高さ75cmの板石を据え、左半部では塊石を3段に積み上げて石の高さを合わせる。この高さは概ね両側壁の2段目石積みの天場の高さに近い。

これら石室壁石の石積みの状況と墳丘土層の観察結果から、石室の構築にあたっては、概して以下の手順で行われたと考える。

まず整形を終えた地山面から南北長6.3m、東西幅4.2m、深さ30cmほどの長方形の掘り方を掘削する。次に壁の腰石を据え、その天場まで裏込めを兼ねて最初の墳丘盛土を行う。続いて2段目の石を積み2回目の盛土を行う。3段目以降も同様の石積み盛土が行われたものと推測する。そして天井架構築後、最後に墳丘表面の仕上げ盛土が行われたと考えられる。

床面には拳大の花崗岩割石を用いて敷石としていたが右壁の南隅角では石が剥がされていた。また敷石は玄室内だけに限られ、羨道部には認められなかった。

また奥壁下面には壁に沿って3枚の板石を敷設していた。扉床を意図したものと考えられる。

羨道

羨道は花崗岩の平石を左右壁ともに3段に横積みして構築する。平石の小口が前壁を兼ねているため、前壁の構築も兼ねている。玄門上に花崗閃緑岩の天井石が1個残っていた。羨道の長さは右壁で126cm、左壁で110cm、幅は82cm、高さ114cmである。

前庭部と閉塞石（図版35-c, d）

玄門の手前80cmに2個の角柱石を敷設して柩石としている。おそらくこの柩石上に板石が据えられて石室が閉塞されたものと考えられる。柩石と薬籠の墓道の間には長さ120cmほどにわたって人頭大ほどの角石を積み上げた壁面が続くが、この壁は腰石を据えて基底部から積み上げられたのではなく、壁面に埋め込まれた貼り石状を呈しており天井の架構には絶えられない構造であった。このためこの柩石境に手前を前庭、奥を羨道とし区別した。前庭に続いて向きをやや東にカーブしながら南東に開いた墓道が墳裾まで続いていた。墓道は地山を削って造り出しており床面は柩石から1mまでは平坦であるが、そこにわずかながらの段が付き、段下からさらに1mのテラスを経て再度小さな段が設けられ墳裾むかつて緩やかなスロープが続く。

墓道は土層観察の結果、初葬後1度埋め戻された後、少なくとも2度の掘り返しが行われていたことが観察された。いずれも羨道正面斜め上から掘削された後に埋め戻しを行っていた。そして2度めの埋め戻し層の上面には盗掘坑があった。盗掘坑の底にはこじ開けた後に放置されたと思われる閉塞石が横たえられていた。閉塞石の底と柩石の天場のレベルがほぼ等しいことから閉塞石は柩石の上に据えられていた可能性が高い。

玄室内遺物出土状況（第75、76図、図版37）

玄室内からは盗掘の被害を受けていたにもかかわらず装身具類をはじめ武具、馬具など多くの遺物が出土した。とりわけ装身具類の出土が目を引く。残念ながら調査中に遺物を移動させる悪戯にあって遺物の原位置を特定できなかったものがある。

装身具類はA～Eの5箇所から集中して出土した。

A群は最も奥壁寄りで出土した。碧玉製管玉8個とガラス小玉13個が確認された。このうち碧玉管玉6個とガラス小玉1個が並んで検出され、緩った状態を遺す。その西側でガラス玉が散乱していた（第76図A群）。

B群はメノウ勾玉1個、水晶切子玉6個、碧玉管玉10個、銀環2個、ガラス玉42個からなる。玉は集中的に出土し、管玉と切子玉は環状の位置関係を保ち出土したが、出土位置にややバラツキがみられ玉間相互の間隔も離れており、厳密に原位置を保って出土したものではなからう（第76図B群）。

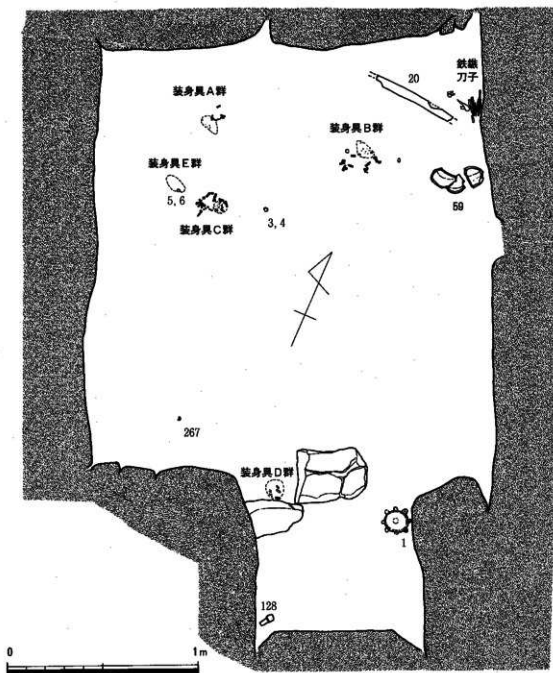
C群は11個の碧玉管玉、10個の水晶切子玉、メノウ製の勾玉と丸玉各1個に45個のガラス小玉が出土した。碧玉管玉と水晶切子玉を交互に並べ、メノウ勾玉と丸玉を中途に配す（第76図C群）。おそらく糸などで緩っていた状態を遺していたものであろう。当時の状況を再現すると図版42-dのような直径13cmほどの環状になる。ネックレスであろうか。

D群は玄門下に2個の石に囲われるように出土した。メノウ勾玉1個、碧玉管玉8個、ガラス小玉55個が出土した。玉群は折り重なって出土しており、集めたものを石囲いのなかに納めた感が強い。

E群はガラス小玉49個からなる。出土地点が隣接するC群と同一遺体を飾るものであったとみられる。

以上のような出土状況からA～C、E群は埋葬遺体が身に付けていた状態を遺すもの、D群は追葬に伴う清掃時に石室内で寄せ集められたもの、おそらくA、B両群から集められたものであろう。

この他奥壁右隅角付近から鉄刀、鉄鏃が、右玄門から雲珠金具が、また柩石下では小形鉄斧などが出土した。鉄刀、鉄鏃は欠損が著しく、攪乱を受けていたが出土位置は原位置に近いものと見ら



第75図 砂魚塚1号墳石室遺物出土状況図 (1/20)

れる。また雲珠金具もほぼ完形で出土し、床に据えられた状態で出土したことからこの位置に副葬されたものとみられる。この他埋土中から鞍金具、鋌金具等の馬具部材、須恵器、土師器なども出土した。

出土遺物

装身具 (第77~80図、図版42, 43)

合計427点にのぼる装身具が確認された。玄室内の地点ごとの出土数内訳は第11表に、遺物個々の計測値、観察結果は第14~20表にまとめた。

耳環 金環2点(1, 2)と銀環4点(3~7)が出土した。1, 2はB群からの出土。ともに銅地金箔貼りで環径は長径2.1cm、短径2.0cmを測るが形態は2がややいびつである。3~7は鉄地金箔貼りである。3はC群からの出土。環径は4と同じく長径2.3cm、短径2.1cmを測りセットで使用されたものとみられる。5はE群からの出土で環径は2.4cm。銀環の継目が1cmほど開いているのが6と同じである。C、E群が同一遺体を飾ったものとすれば、5, 6は遺体の耳に着け、3, 4は各々に連結し2個セットで使用されたことも考えられる。

メノウ勾玉(29, 87) 29はB群、87はC群から出土した。87は29に比べ頭部のつくりが小さめで、先端が先細り気味である。

ガラス勾玉(267) 埋土中から1点出土した。

水晶勾玉(154) D群から1点出土した。頭部、尾部ともに角張っている。

滑石勾玉(272) 埋土から1点出土した。勾玉中で唯一両側から穿孔される。

碧玉管玉(8~15, 35~44, 98~108, 155~159, 268~271) A、B、C、D群から出土した。

A、B、C群それぞれの長さおよび断面径の平均値を比較すると長さでは19.23:22.46:25.57、径では6.74:7.9:9.82(いずれも単位はmm)という数値を示し、いずれもA→B→Cの順に大きくなる傾向を示す。ちなみにD群の平均値は19.06mm、7.82mmを測り、A、B両群に近似する数値を示し、追葬時にA、B両群から集められたものという仮定を傍証する。

ガラス管玉(160~162) D群から3点が出土した。A、B群から出土したものであろう。

水晶切子玉(30~34, 88~96) B、C群から出土したが、A群からは確認されなかった。長さ10.8~20mmを測る。いずれも載頭六角錐形を合わせた形状を呈す。碧玉管玉と同じようにB群とC群各々の長さ及び中央部径の平均値を比較すると、長さでは13.54:15.2、径では11.34:12.01の数値となり、C群がB群より一回り大きく、碧玉管玉と同様な傾向を示している。

ガラス小玉(16~28, 45~86, 109~153, 163~266, 273~427) A~E各群、および埋土内から出土したが、個々の出土地点、状況についてはA、B、C、E群では集中的に出土した範囲を把握したにとどまる。現状では明らかに糸で繋いだ状況は認められなかった。玉の色調ではA群ではブルー系のみ出土、B群では4点のイエロー系が、C群ではグリーン系が8点認められるが、いずれも主体となるのはグリーン系である。

鉄器(第81~83図、図版40, 41)

馬具(1~11)

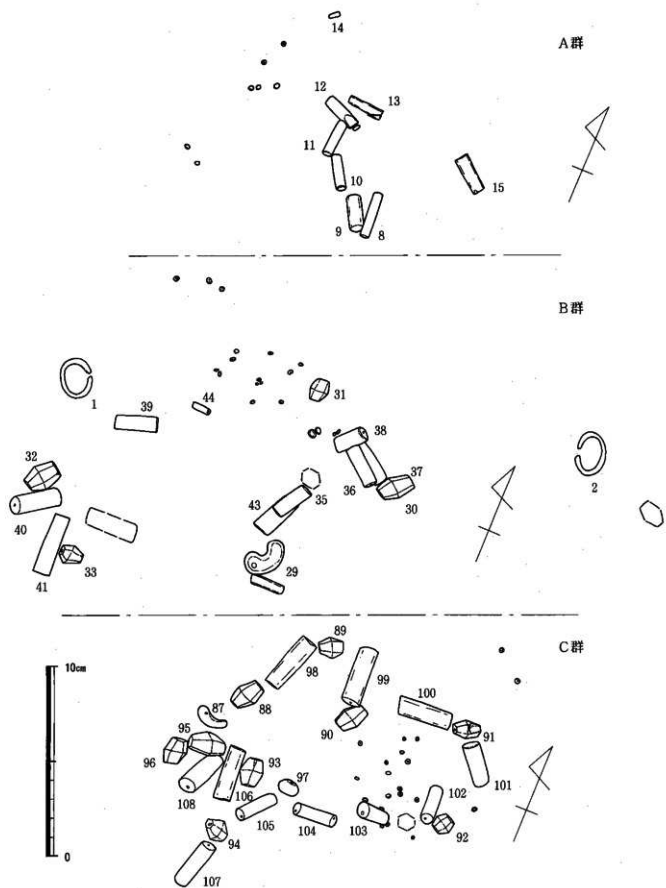
雲珠金具(1) 本来は鉄地金銅貼りであるが、金銅は粒状に点々と残る程度で、鉄地がむきだし状態であった。鉢部は天井部と裾部が別造りで組合せた状態では断面が半球形を呈す。天井部の上から裾部が被せられる。天井頂部から皮留め鉤が下面に伸びており、鉤基から1.2cmに厚さ1.4cmの木質痕が鑄着している。天井内面は木蓋でふさがれていたらしい。鉤の先端近くには皮が鑄着する。裾部の側面には2条の凹線がめぐり、下線には凹形の脚が8脚みられ、脚の中央には皮留め鉤が、基部には責金具が残る。

鞍金具(2) 四隅が突出し飾鉤を配する方形の飾金具がつく。

3, 4は兵庫鎖片が鑄着する。5~10は鉤頭である。11は引手金具である。

武具(12~125)

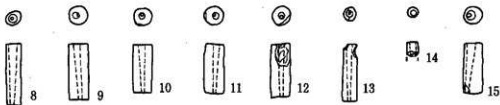
鉄刀(19, 20, 12~17) 20は石室右隅角で鉄鏃に近接して出土した。装身具A群被葬者の副葬



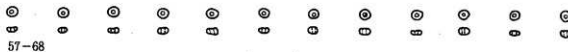
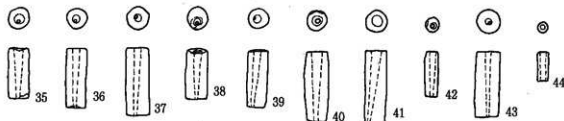
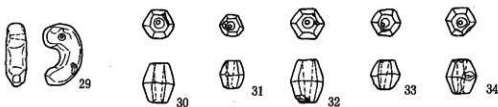
第76图 砂鱼塚1号墳石室出土装身具A、B、C群出土状況图(1/2)



A群

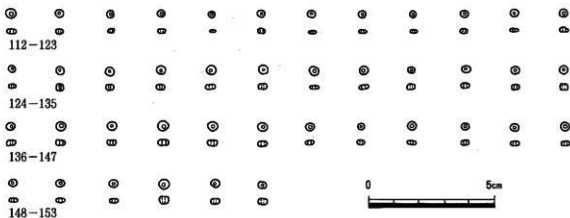
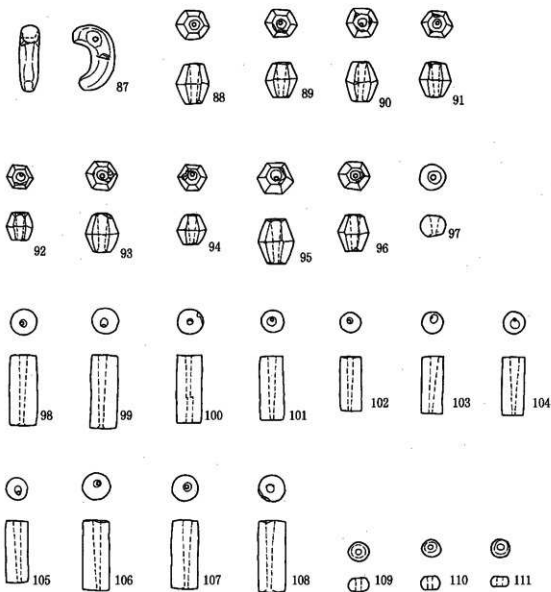


B群



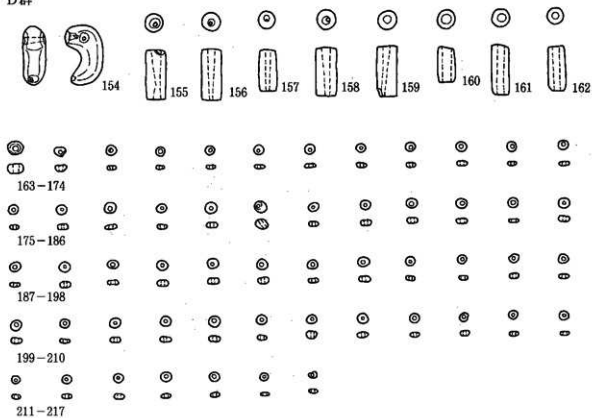
第77图 砂鱼塚1号墳石室出土装身具实测图① (2/3)

C群

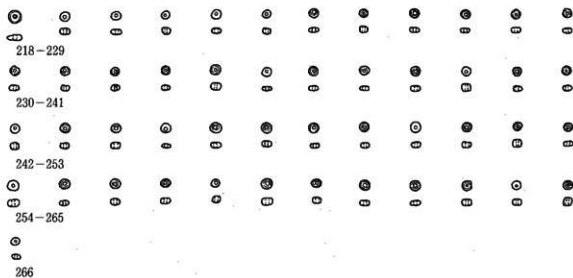


第78图 砂魚塚1号墳石室出土装身具実測图② (2/3)

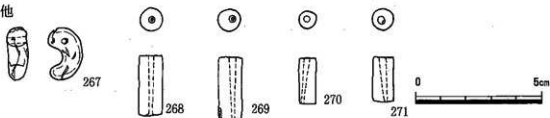
D群



E群



その他



第79図 砂魚塚1号墳石室出土土装身具実測図③ (2/3)

埋土



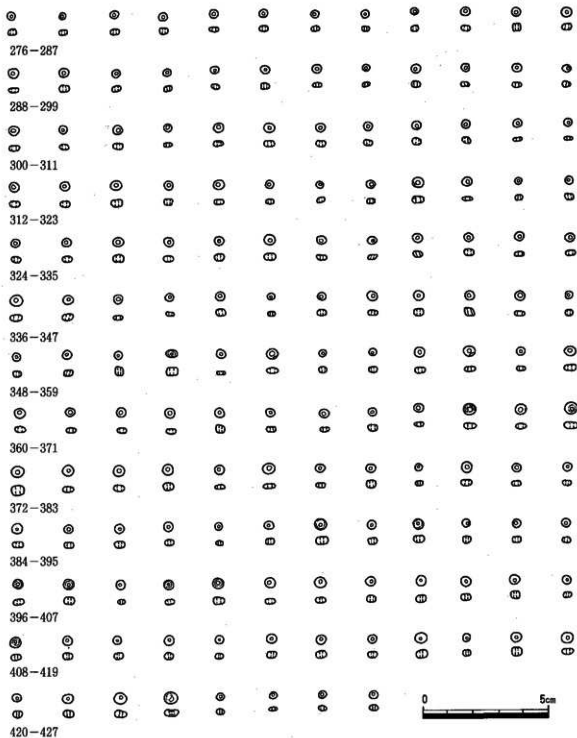
273



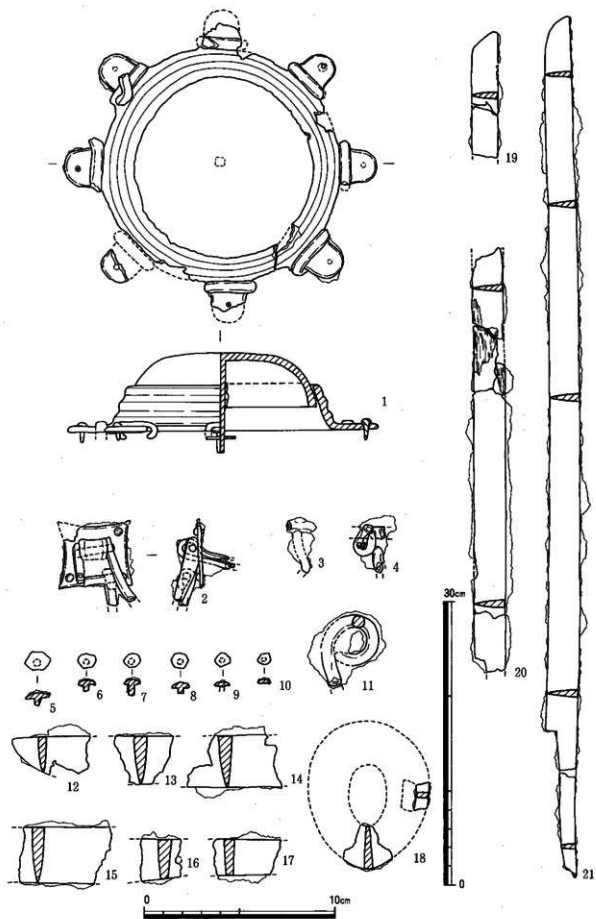
274



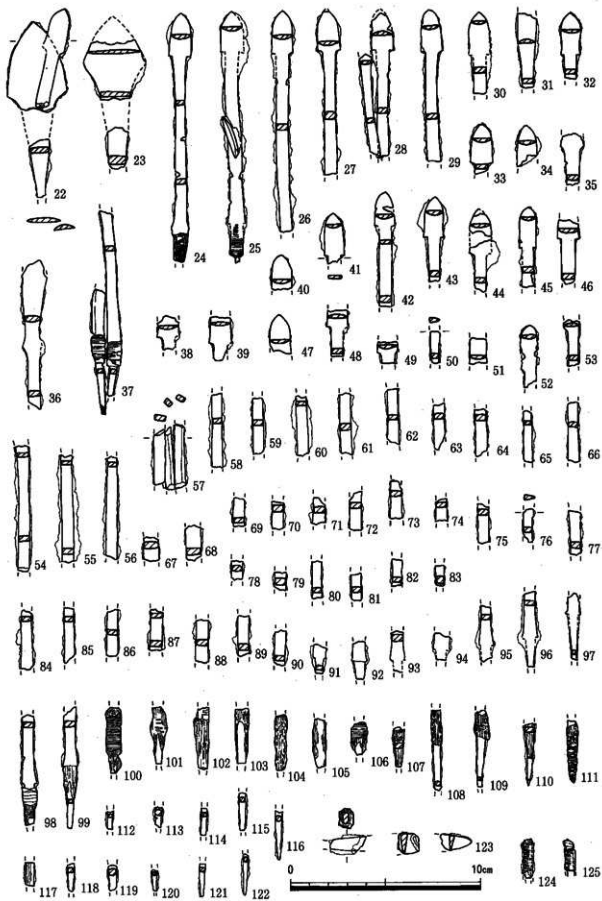
275



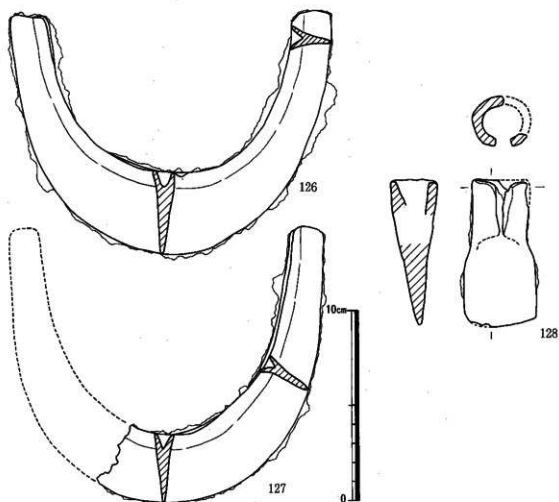
第80图 砂魚塚1号墳石室出土装身具实测图④ (2/3)



第81图 砂魚塚1号墳出土鉄器実測图①(1/2、1/4)



第82图 砂魚塚1号墳出土鉄器実測図② (1/2)



第83図 砂魚塚1号墳出土鉄器実測図③ (1/2)

の副葬遺物であろうか。現存長44.7cm、身幅3.3cm、身厚8mmを測り、切先、茎の大部分を欠失する。切先候補としては石室内から19と12が出土しているが、背の隅角がシャープな19が20に近い特徴を示しており、同一個体である可能性が高い。

銅金具 (18) 小片で、透かし孔がある。

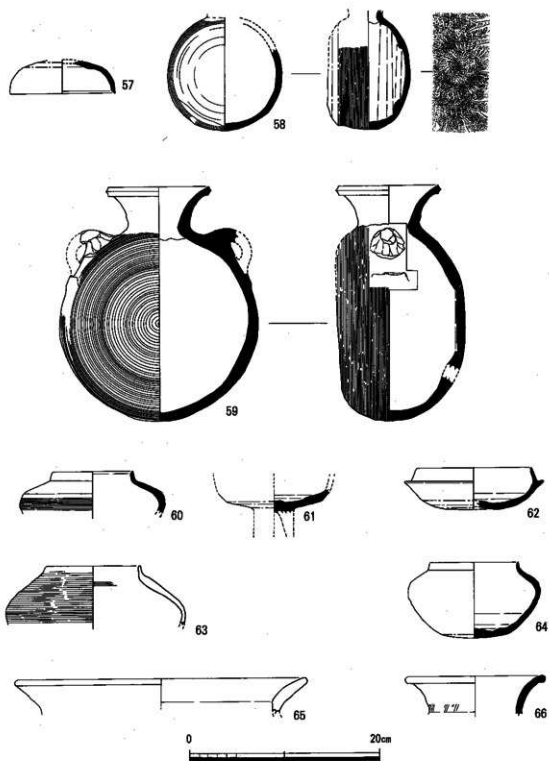
鉄鏃 (22~125) 全て玄室右隅角から出土した。遺存状態が悪く実数は明確でないが鏃身数から総数20本前後とみられる。鏃身部は1、2が圭頭鏃である以外は全て長頭鏃である。関が直角かあるいは鈍角気味であるものが大勢を占める。篋被は裾広がりや急にすばまるものも多く見受けられる。

農工具

鉄斧 (128) 全長7.7cm、歯部幅3.8cm、袋部幅は3.0cm、厚2.6cmを測る。

土器 (第84図、図版48)

提瓶 (59) は床面から出土した。完形には復原できなかったが石室内に副葬されていた可能性が高い。他の土器はいずれも石室埋土からの出土で、後世の混入品の可能性がある。



第84図 砂魚塚1号墳石室内出土土器実測図(1/4)

57は杯蓋で復元口径10.8cm。天井部は破損している。体部と天井部の境は明瞭でない。

58、59は提瓶である。58は口頸部および体部一部を欠失する。体部前面から側面にかけてはカキメ調整が行われ、背面は回転ヘラケズリ調整で仕上げる。前面では中心から同心円状に構描き列点

文が四重に施される。59は器高24.6cm、口縁径10.4cm。体部前面はヨコナデ、側面から背面にかけてカキメ調整を施す。両側面の把手は環状をなし、両基部とも体部に接合されるが、いずれも破損している。

石室外での遺物出土状況（第85図、図版38）

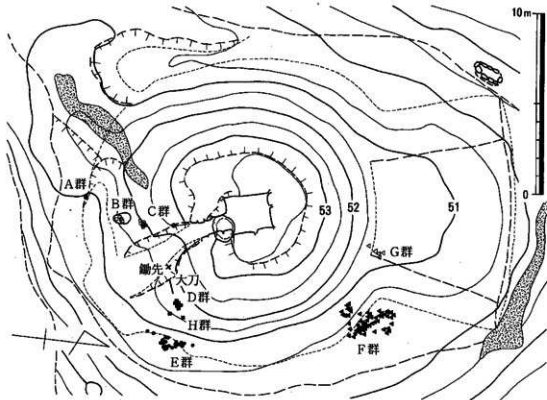
砂魚塚古墳では後円東半部を中心に計8箇所です器を中心とした遺物の供献、埋納を確認した。土器は須恵器49点、土師器10点の計59点が確認された。表土から出土した2点を加えると61点となる。土器の出土量、器種構成は各地点間で異なるが、いずれも杯を主体とすることは共通しており、杯は身が21個、蓋が19個とほぼ同数で、出土状況も蓋を被せたままあるいは蓋を身の下に敷いた状態で出土したものが19組を数え、全般に供献状態を良好に保ったまま出土したものとみられる。器内からの出土遺物はない。

土器はA、G群では単体で出土しているが便宜上「群」と位置付けて報告する。

A群 後円部南端裾下で地山直上から須恵器杯蓋が1点出土した。墳丘斜面から滑落した可能性があり、原位置を保っていたものとは考えにくい。

B群 後円部南の墳丘基底部付近に墳丘と主軸方位を等しく掘られた長さ93cm、幅30cmの楕円形土壇から出土した。土壇の中央やや南寄りに身を下にして重ねた杯セットを3組並べ、その南に蓋を被せたもの1組を据え、さらにその上に蓋、身を積み重ねた1組を加え計5組の杯セットを埋納していた（第87図B群）。

C群 B群の南、墳丘の斜面中途に幅50cm、奥行30cmほどのテラス面を検出した。テラスの南端がやや高くなっているのも、本来はB群土壇に類する遺構であった可能性もある。土器は施蓋状態の杯セット2組が底面に置かれ、底面から10～15cmほど浮いて横転状態で高杯2個、風1個が



第85図 砂魚塚1号墳墳丘土器群出土地点位置図 (1/200)

出土した(第87図C群)。16~19はC群の上方に据えられていたものが滑落した可能性もありC群と切り離して別群としてとらえるべきかもしれない。

D群 墓道の東側の墳丘斜面中途に位置し、C群と墓道を挟んで対峙する位置にある。地山斜面に2段の棚状のテラス面を設け、前列に3セット後列に3セット、計6セットの杯を配していた。このテラス面の東部では土器群とほぼ同レベルでほぼ完形の大刀1振りと鉄鋤先2枚が出土した。残念ながら墳丘表土を除去する際に大刀周辺の盛土の一部を削ってしまったため、土器群のテラス面と大刀、鋤先との関係は明らかにすることはできなかったが、大刀がほぼ水平位置を保って出土し土器群の後段と出土レベルが合致することから、これらは後述するH群同様にテラス面に並べられていた可能性がある。

また、このテラス面下の斜面には大甕の破片も散乱しており、テラス面から滑落したものとみられる。(第87図D群)。

E群 後円部南東の石室墓道右脇地点で長さ2.5mにわたって浅く土壌状に凹み、その底面北隅から閉蓋状態の杯セット1組、杯蓋1個、口縁打ち欠きの甕1個が出土した。甕の口縁は打ち欠かれていた。この周辺から計2個の角礫状の碧玉玉半製品も出土している。この他、凹みの中央から杯蓋と土師器高杯1個が伏せた状態で、また周辺から破砕した須恵器小甕(32)、土師器高杯杯部(33)が出土しており、同群に含めて考えてよからう(第87図E群)。

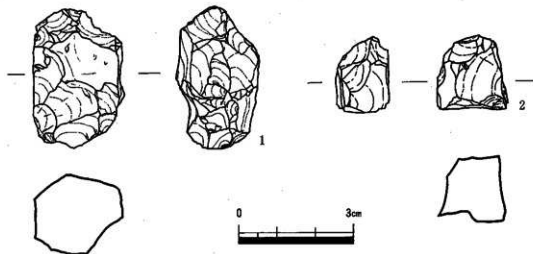
F群 東クビレ部基底部から施蓋状態の杯セット4組がまとまって出土した。墳裾に割れた須恵器甕片が散乱していた。また、墳丘斜面中途には据えられていた2個の須恵器大甕が出土した。大甕はいずれも破砕し破片が斜面から裾にむけて滑落していた(第88図F群)。

G群 前方部の南東部で長胴の土師器甕が出土した。甕は墳丘斜面に据えられていたものとみられるが破砕し、下方にむかって散乱していた(第88図G群)。

H群 D群の西で検出した須恵器杯1組と土師器腕1個からなる。表土除去時に出土したため詳細はわからないが、出土地点がD群に近接し、出土レベルも近いことからD群同様にテラス面に置かれていた可能性もある。

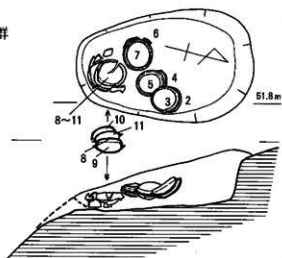
出土遺物

大刀(第81図-21、図版41) 全長90.8cm、身の長さ75.4cm、幅は切先近くで2.8cm、中央で

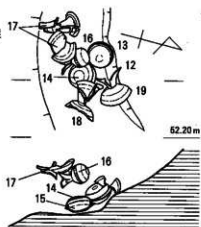


第86図 砂魚塚1号墳出土碧玉半製品実測図(1/1)

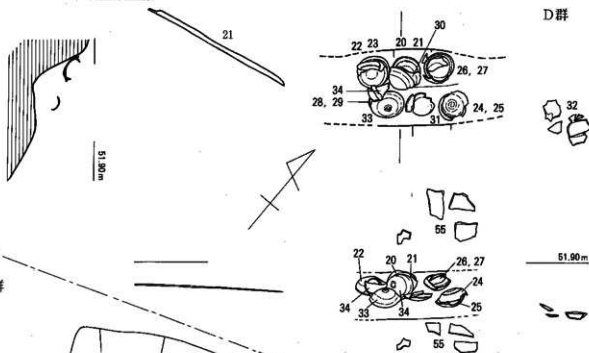
B群



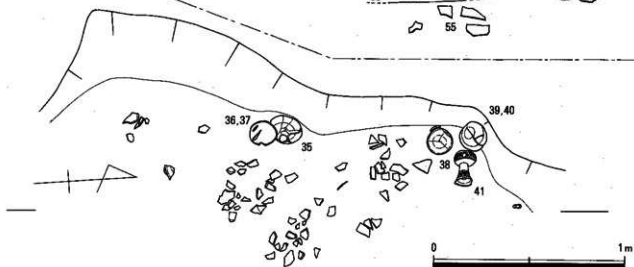
C群



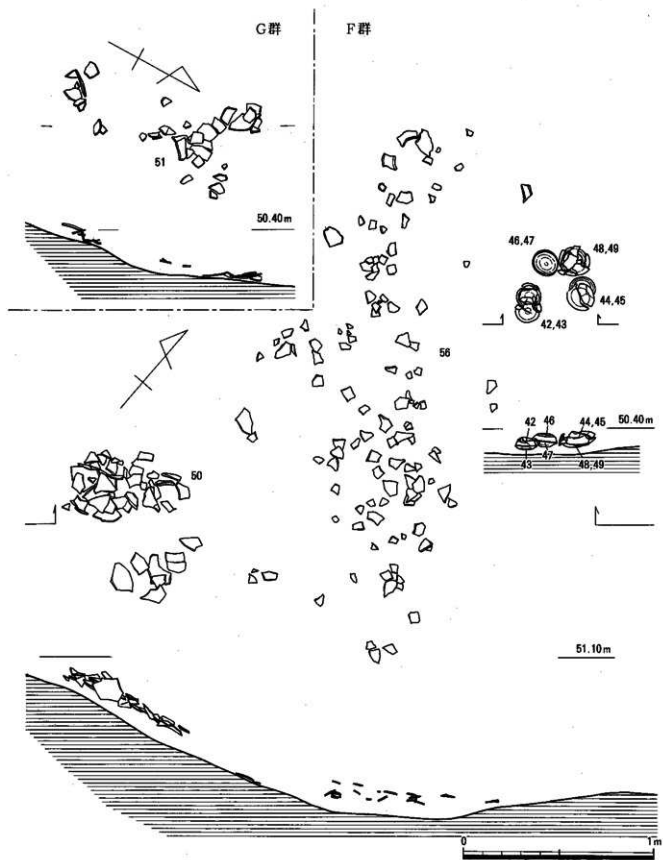
D群



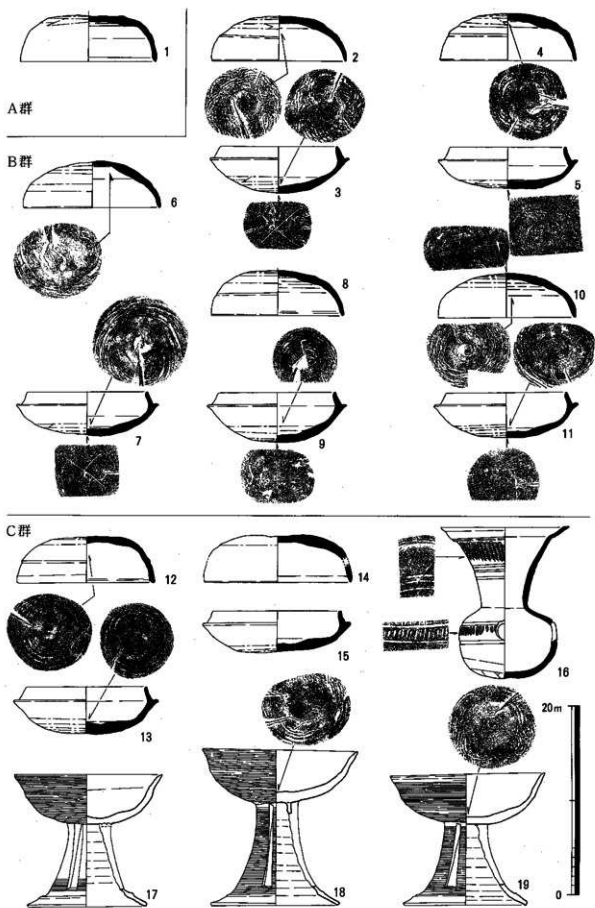
E群



第87图 砂鱼塚1号墳填丘土器群B.C.D.E出土状况图(1/20)

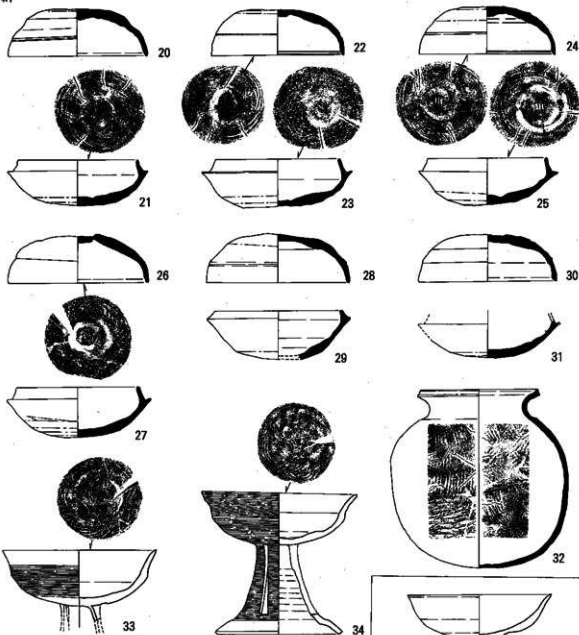


第88图 砂魚塚1号墳填丘土器群F.G出土状況图(1/20)

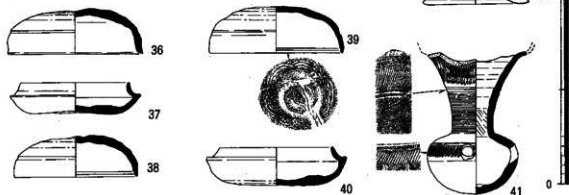


第89图 砂鱼塚1号墳填丘土器群出土土器実測図① (1/4)

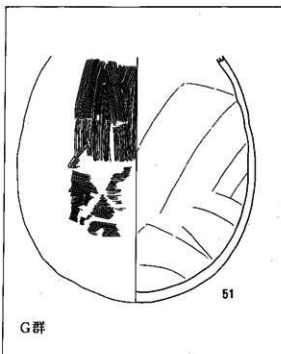
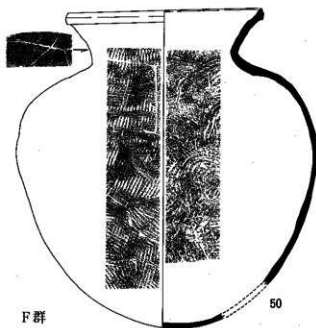
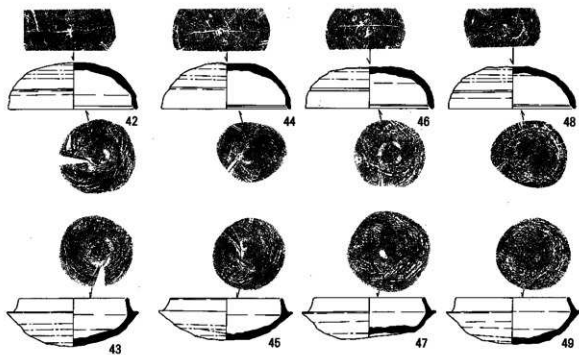
D群



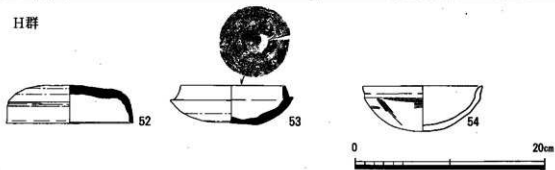
E群



第90图 砂魚塚1号墳填丘土器群出土土器実測图② (1/4)

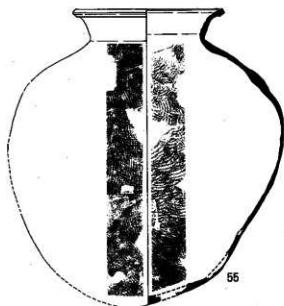


H群

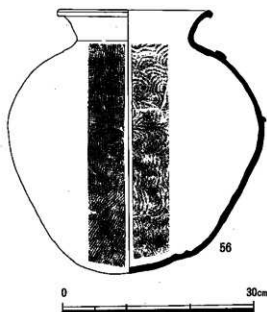


第91图 砂魚塚1号墳填丘土器群出土土器実測图③(1/4)

D群



F群



第92図 砂魚塚1号墳埴丘土器群出土土器実測図④(1/6)

3.1cm、区部で3.3cm、背厚は8cm、茎の長さは15.4cm、幅1.64~2.2cm 厚さは5.2cmを測る。

鋤先(第83図-126, 127、図版41) 126は完形で全長12.9cm、幅8.4cm、127は半分が遺存する。全長は14.4cmほどと推定され、前者より一回り大きい。

碧玉半製品(第86図、図版42-e) 2点出土しているが、いずれもE群から出土した。1は長さ3.6cm、幅2.4cm、厚さ2.2cmを測る。図上左側縁に未調整部を残すものの他面では埴打が施されている。色は浅緑色を呈す。2は長さ1.8cm、幅1.95cm、厚さ1.3cmを測る。前面に埴打痕を残している。色は碧緑色を呈する。玉湯町出雲玉造資料館の勝部衛氏に実見いただいたところ、いずれも出雲花仙山産の碧玉を素材とした勾玉半製品の可能性があることをご教示いただいた。

出土地	須恵器(平均口径・cm)					土師器			備考
	杯蓋	杯身	高杯	甕	壺	高杯	甕	碗	
A群	1 (14.20)	0	0	0	0	0	0	0	単体出土
B群	5 (14.18)	5 (12.40)	0	0	0	0	0	0	
C群	2 (14.85)	2 (13.00)	0	0	1	3	0	0	
D群	5 (14.46)	5 (12.70)	0	1	1	3	0	0	大刀、鋤先
E群	3 (13.60)	2 (11.50)	0	3	1	0	0	0	碧玉半製品2点
F群	4 (13.40)	4 (11.60)	0	3	1	0	0	1	
G群	0	0	0	0	0	0	1	0	単体出土
H群	1 (13.30)	1	0	0	0	0	0	0	1組出土
計	21	19	0	7	4	6	1	1	

第8表 砂魚塚1号墳出土土器地別器種内訳表

土器 (第89~92図、図版46)

各土器群毎の器種構成は第8表にまとめている。土器の主体を示すのは須恵器の杯であることがわかる。

須恵器 (1~16, 20~32, 36~50, 52, 53, 55, 56, 60~63)

杯は出土土器の主体を占める。蓋と身の各群の口径平均値を第8表中に示した。蓋ではH群が13.3cmと最小値を示し、E、F群の口径値が13.5cm前後と続くが、他は14cmをこえてC群では14.85cmと最大値となる。この傾向は杯身口径の平均値とほぼ同じである。各群内の土器の計測値をみると、3組以上の杯を出土したB、D、F各群の杯は蓋身ともに群内の計測値が近似しており、規格性の高いセットとの印象を受ける。次に杯の特徴を群単位でみる。

H群杯蓋52は天井部を平坦に成形し体部と天井部の境に沈線をめぐらせ、口縁端部は甘いながらも面をなしている。体部は直立きみである。53は受け、立ち上がりとも太く短めである。

C、D群杯蓋は天井部に丸みがあり天井部と体部の境に緩あるいは沈線をめぐらしているがかなり甘い。体部は外傾し口縁端部内面には段あるいは沈線がめぐらしている。

A、B、E群ではC、D群に比べて天井部が丸みをおび、天井部と体部の境に甘い沈線をめぐらす程度で境がより不明瞭になり、体部の外反度も大きくなる。また口縁端部は丸くおさめている。

F群ではB群より天井部と底部の丸みが強くまた体部の外傾度も増す。また天井部と底部のヘラケズリが簡略化している。

調整技法の共通した特徴としては蓋身ともに内面の天井部および底部に叩きの同心円状当て具痕を残すものが大半を占めるが、H群ではナデ消されている。

焼き上がり状況の特徴としてC、D群が一括して焼成不良の状況を呈していることが目を引く。

遺物番号	図版番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備 考
1	44-1	杯 蓋	墳丘土器群 A	4.9	14.2		金雲母砂粒	赤色、淡青褐色	堅緻	
2	-2	杯 蓋	墳丘土器群 B	4.7	14.0		砂 粒	灰色、明灰色	堅緻	内面に当具痕
3	-3	杯 身	墳丘土器群 B	4.4	12.2		砂 粒	灰色、明灰色	堅緻	内面に当具痕、ヘラ記号
4	-4	杯 蓋	墳丘土器群 B	4.9	14.3		砂 粒	灰色、淡黄褐色	堅緻	内面に当具痕
5	-5	杯 身	墳丘土器群 B	4.6	12.6		砂 粒	淡灰色、淡黄褐色	堅緻	ヘラ記号
6	-6	杯 蓋	墳丘土器群 B	4.7	14.2		白色砂粒	灰 色	堅緻	内面に当具痕
7	-7	杯 身	墳丘土器群 B	5.1	12.4		白色砂粒	淡黄茶灰色	堅緻	内面に当具痕、ヘラ記号
8	-8	杯 蓋	墳丘土器群 B	4.7	14.2		砂 粒	赤灰色、淡黄褐色	堅緻	
9	-9	杯 身	墳丘土器群 B	4.7	12.6		砂 粒	淡灰色、淡茶色	堅緻	内面に当具痕、ヘラ記号
10	-10	杯 蓋	墳丘土器群 B	4.9	14.2		砂 粒	灰色、淡黄褐色	堅緻	内面に当具痕、外面にヘラ記号
11	-11	杯 身	墳丘土器群 B	4.9	12.2		砂 粒	赤灰色、淡黄褐色	堅緻	内面に当具痕、ヘラ記号
12	-12	杯 蓋	墳丘土器群 C	4.9	14.4		金雲母砂粒	淡 茶 灰 色	良好	内面に当具痕
13	-13	杯 身	墳丘土器群 C	5.0	12.6		砂粒金雲母	淡灰色、淡黄褐色	良好	内面に当具痕
14		杯 蓋	墳丘土器群 C	5.0	15.3		白色砂粒	淡灰黄茶褐色	不良	
15	-15	杯 身	墳丘土器群 C	4.5	13.4		白色砂粒	淡灰色、淡黄褐色	不良	
16	-16	盞	墳丘土器群 C	16.0	12.4		砂 粒	淡黄淡黄褐色	良好	
17	-17	高 杯	墳丘土器群 C	14.1	15.5	12.4	白色砂粒	淡黄茶灰色	良好	
18	-18	高 杯	墳丘土器群 C	16.6	16.1	13.2	白色砂粒	淡 茶 灰 色	良好	内面に当具痕
19	-19	高 杯	墳丘土器群 C	14.0	16.2	12.7	白色砂粒	明黄茶灰色	良好	内面に当具痕

第9表 砂魚塚1号墳出土土器観察表①

遺物 番号	図版 番号	器 種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備 考
20	45-20	杯 蓋	墳丘土器群D	4.9	14.5		砂 粒	青 灰 色	良好	
21	-21	杯 身	墳丘土器群D	4.8	12.5		砂 粒	青 灰 色	良好	内面に当具痕
22	-22	杯 蓋	墳丘土器群D	4.8	14.0		金雲母、砂粒	灰 褐 色	良好	内面に当具痕
23	-23	杯 身	墳丘土器群D	5.0	13.0		金雲母、砂粒	灰 褐 色	良好	内面に当具痕
24	-24	杯 蓋	墳丘土器群D	5.0	14.3		金雲母、砂粒	灰 褐 色	良好	内面に当具痕
25	-25	杯 身	墳丘土器群D	4.9	12.5		砂 粒	灰 褐 色	良好	内面に当具痕
26	-26	杯 蓋	墳丘土器群D	5.1	14.5		小 砂 粒	淡灰黄褐色	良好	内面に当具痕
27	-27	杯 身	墳丘土器群D	5.3	12.8		白色砂粒	淡 茶 灰 色	良好	わずかに当具痕あり
28	-28	杯 蓋	墳丘土器群D	5.2	15.0		金雲母、砂粒	黄 灰 色	良好	
29	-29	杯 身	墳丘土器群D	5.1			砂 粒	黄 褐 色	良好	
30	-30	杯 蓋	墳丘土器群D	4.9	14.5		金雲母、小砂粒	黄 褐 色	良好	
31	-31	杯 身	墳丘土器群D				砂 粒	茶 褐 色	良好	
32		壺	墳丘土器群D	18.7			金 雲 母	灰 褐 色	良好	
33	-33	高 杯	墳丘土器群D (7.6)	16.0			砂 粒	明 赤 褐 色	良好	内面に当具痕、三方スカシ
34	-34	高 杯	墳丘土器群D	20.0	16.3	12.7	砂 粒	明 赤 褐 色	良好	内面に当具痕、三方スカシ
35	-35	高 杯	墳丘土器群E	11.0	15.2	11.2	白色砂粒	赤 茶 色	良好	外面にスス付着
36	-36	杯 蓋	墳丘土器群E	4.5	14.0		白色砂粒	黒灰色、淡緑灰色	良好	
37	-37	杯 身	墳丘土器群E	3.2	11.3		白色砂粒	青 灰 色	堅緻	
38	-38	杯 蓋	墳丘土器群E	4.2	12.9		白色砂粒	黒 灰 色	堅緻	
39	-39	杯 蓋	墳丘土器群E	44.8	14.0		白色砂粒	淡 灰 色	良好	内面に当具痕
40	-40	杯 身	墳丘土器群E	4.0	11.7		白色砂粒	青 灰 色	堅緻	
41	-41	壺	墳丘土器群E (15.0)				白色砂粒	青 灰 色	堅緻	内面にしぼり跡あり
42	46-42	杯 蓋	墳丘土器群F	4.9	13.5		砂 粒	青 灰 色	良好	内面に当具痕、ヘラ記号
43	-43	杯 身	墳丘土器群F	5.1	11.5		砂 粒	青 灰 色	堅緻	内面に当具痕
44	-44	杯 蓋	墳丘土器群F	4.9	13.5		砂粒、金雲母	黄 灰 色	堅緻	内面に当具痕、ヘラ記号
45	-45	杯 身	墳丘土器群F	4.3	11.8		砂粒、金雲母	黄 灰 色	堅緻	内面に当具痕
46	-46	杯 蓋	墳丘土器群F	4.3	13.3		砂 粒	灰 色	堅緻	内面に当具痕、ヘラ記号
47	-47	杯 身	墳丘土器群F	4.3	11.3		砂 粒	灰 色	堅緻	内面に当具痕
48	-48	杯 蓋	墳丘土器群F	4.5	13.3		砂 粒	黒 灰 色	堅緻	内面に当具痕、ヘラ記号
49	-49	杯 身	墳丘土器群F	4.9	11.8		砂 粒	灰 色	堅緻	内面に当具痕
50	-50	壺	墳丘土器群F	33.5	20.0		砂 粒	黄 灰 色	堅緻	ヘラ記号
51		壺	墳丘土器群G (26.0)				砂粒、金雲母	黄緑灰色、黒褐色	良好	
52	-52	杯 蓋	墳丘土器群H	4.0	13.3		砂 粒	灰 色	良好	
53	-53	杯 身	墳丘土器群H	4.1	10.7		砂 粒	黄 色	不良	内面に当具痕
54	-54	杯 身	墳丘土器群E	4.8	12.6		砂 粒	赤 褐 色	良好	
55		壺	墳丘土器群D	47.6	22.9		小 砂 粒	黒 灰 色	不良	
56		壺	墳丘土器群F	41.6	23.0		金雲母、砂粒	灰 褐 色	良好	
57	-57	杯 蓋	石 室 内 (3.5)				白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	
58	-58	提 瓶	玄室 倒埋土 (11.2)				白色砂粒	黒灰色~灰色	良好	
59	-59	提 瓶	石 室 内	24.7	10.4		白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	
60		短頸壺	墳丘土器群E (4.4)				白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	
61		高 杯	表土 (東北) (2.3)				白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	
62	-62	杯 身	東南側土器だまり (5.0)				白色砂粒	暗 青 灰 色	良好	
63		短頸壺	1号墳南ベルト (6.0)	9.8			砂 粒	赤 褐 色	不良	
64		短頸壺	南西盗掘壕	8.0	9.2		白色砂粒	青 灰 色	良好	
65		壺	南西盗掘壕 (3.7)				白色砂粒	淡 赤 茶 色	不良	
66		壺	南西盗掘壕 (3.5)				白色砂粒	青 灰 色	良好	

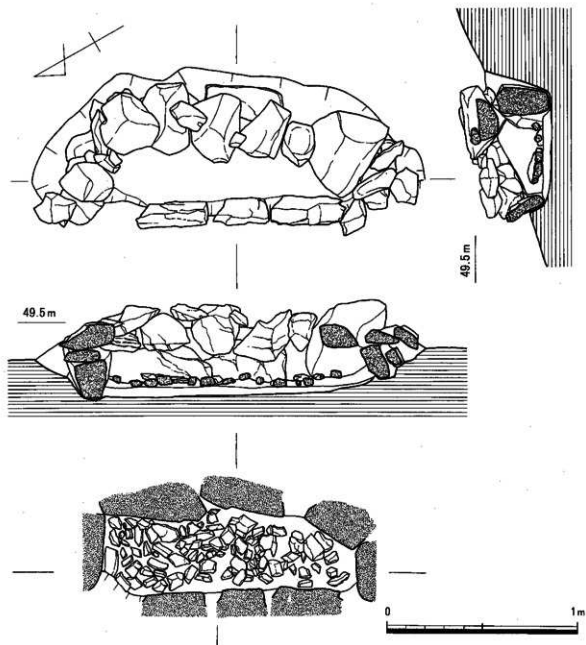
第10表 砂魚塚1号墳出土土器観察表②

塵はC群(16)とE群(41)から各1点が出土している。41は16よりも体部が一回り小さく、頸部の外傾度が大きい。口縁部は打ち欠きが行われている。16は底部に不定方向のヘラケズリを行うが41では当て具痕が残ったままである。

61はF群付近の表土から出土した長脚無蓋高杯片である。

土師器(17~19, 33~35, 51, 54, 63)

C群から3点、D群から2点、三方1段の透かし孔を有する高杯が出土している。須恵器の無蓋高杯に似せて作られたもので35とは趣を異にする。18がやや長脚化しているが、17、19、34はいずれも高さ16cm前後で形態も酷似する。脚柱部から杯部にかけてカキメ調整が施され、杯内面には同心円の当て具痕跡が残る。



第93図 砂魚塚1号墳北西裾箱式石棺墓実測図(1/20)

c. 竪穴式小石室 (第93図、図版39)

前方部の北西裾に近接して構築された小型の竪穴式石室である。長さ204cm、幅80cm、深さ24cmの不正長楕円形土境内に花崗岩角石、板石を並べて側壁、小口壁とする。

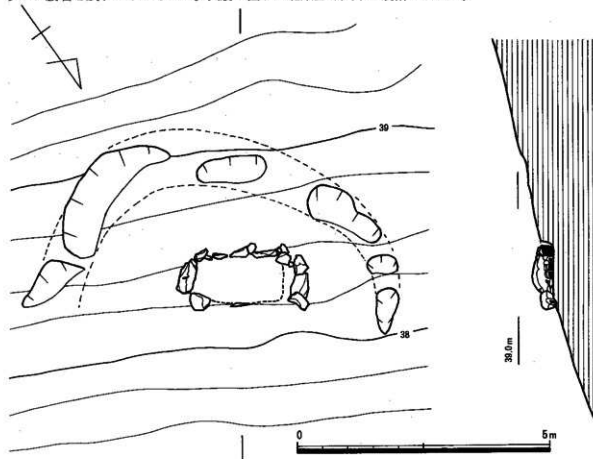
棺内の内法は全長133cm、北小口幅30cm (石材抜き取り痕から推定)、南小口幅20cm。南東、北西隅は小口付近で急に窄まる。これは天井に天井石を被せることなく、塊石を持ち送ることによって天井部の閉塞を行ったため、小口幅を減じ、持ち送りしやすくする必要に迫られたためとみられる。東側壁上に残る2段目の積み石列が内側に大きく迫り出しているのはその痕跡を留めたものである。床面には小角礫を敷く。主体部を被覆する盛土等の痕跡は確認できなかった。

d. 砂魚塚2号墳

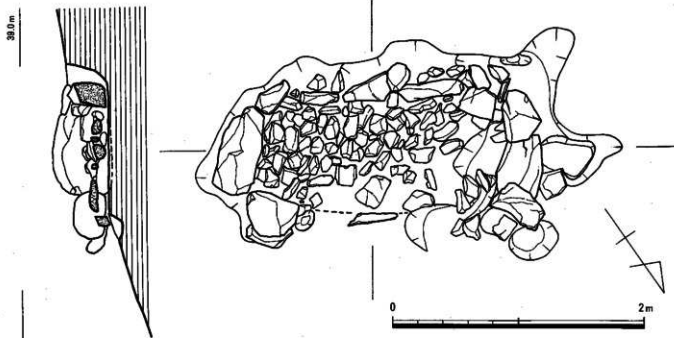
立地と墳丘 (第94図、図版47-a)

砂魚塚古墳の西北西40m、尾根筋から北に3mほど下った斜面途中で発見した小円墳である。墳丘盛土はほぼ完全に流失していたため、調査前の現況観察では確認することができなかった。尾根筋側にわずかに残る周溝の痕跡を繋げて推定される墳丘規模は径6m前後となる。

主体部は墳丘の中央やや北西寄りに築かれた横穴式石室である。石室の遺存状況は頗る悪く、わずかに腰石を残すのみであった。沢筋に面する北東壁も大半が崩落していた。



第94図 砂魚塚2号墳遺存状況図 (1/75)



第95図 砂魚塚2号墳石室実測図 (1/30)

石室 (第95図、図版47-b)

石室はN-56°-Wに主軸をとり北西に開口する横穴式石室である。奥壁腰石は花崗岩の転石1枚を据え右側壁では角、板石を5個並べている。前壁は大破しているが、框石とみられる花崗岩を深く据えていた。右片袖式であると考え、詳細は不明。石室は左側壁長195cm、右側壁長180cm、奥壁幅72cm、前壁幅72cmを測る。四隅は丸みを有す。

床面には花崗岩礫を敷き礫床としていたが北隅付近は礫が少なく、盗掘の痕をうかがわせる。

墳丘、石室からの出土遺物はない。

e. 小結

砂魚塚1号墳は全長23.8m、後円部径17.6m、前方部幅13mの1段築成による小形の前方後円墳である。墳形としては後円部に比べ前方部が著しく小さくかつ低いことが大きな特徴である。

埋葬主体は前方部と逆の南向きに開口する横穴式石室である。石室は墳丘構築と並行して築造されている。玄室の平面プランは玄室長230cm、幅210cmを測る方形プランを有している。

玄室周壁は花崗岩転石を用いて組まれており、腰石は大きいものの2段目から上部では小振りな

角張った石も多く用いていた。前壁は転石を3段積み重ねて羨道壁を兼ねる。同様の羨道の構築は前田古墳、石川古墳にもみられるが、前田古墳は腰石が大きく2段積み、石川古墳では、角石を小口積みしている。壁石材の大形化を石室変遷の流れとしてとらえれば1号墳はこの2古墳と比較するとちょうど中間的形態を有するものと解される。

玄室床面からは装身具が4箇所から出土したが、A～C群は被葬者が身につけていた位置を留めていたものとみられ、遺体は奥壁（A群）～手前（C群）と順に納めたと考える。最後に納められたC群では玉を纏っていた状態を良好に保って出土した。D群はC群被葬者の追葬時にA、B群から寄せ集められた可能性が高い。また玄室床面内ではガラス小玉が散乱状態で出土した。攪乱、清掃によるとみられるが、敷石の隙間に落ちていたものもあり散玉儀礼の可能性も考えられる。

石室外から多くの遺物が出土した。いずれも墓前に供献されていたものであろう。出土状況は①土嚢を掘りその中に納めた（廃棄した）もの（B群、C群）、②祭壇上のテラスを設けそこに並べたと考えられるもの（C群、D群、H群）、③土器底部を埋めて墳丘上に据えたもの（F群、G群）の3形態に分けられる。②は土層観察等では祭壇である確信はもてなかったが、D群では大刀、鑷先、土器が墳丘斜面に横一列に並んで出土し、墓道から南東に張り出した造出し状の突出部に面しており、墓前祭祀の空間として格好の位置にあること、C、D群土器は前後上下2段に置かれていた状態が推定できることなどからその可能性を指摘しておく。しかし、壇上に配置された遺物群の祭事後が埋め込まれたのか否か十分な判断ができなかった。今後の検討課題としたい。

E群から出土した碧玉玉半製品は出雲産である可能性が指摘され、玄室内から出土した多くの玉製品を含めた搬入経路、果ては造墓集団の生産活動を検討する上で興味深い資料である。

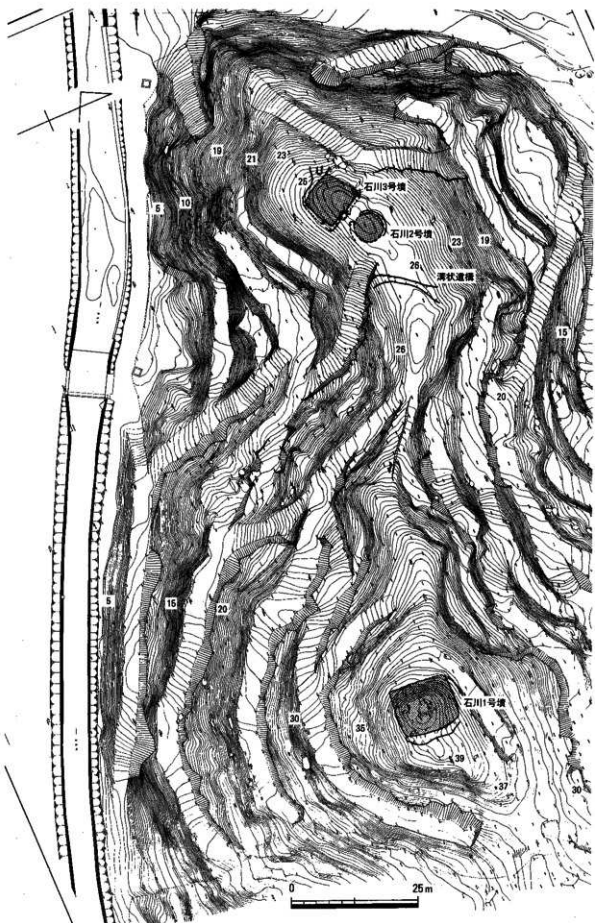
1号墳の築造時期については供献土器のうち墓道脇から出土したC、D群が古墳築造から初葬時に墓道が埋め戻される間に埋置されたものとみて古墳の築造期に最も近いと考える。須恵器杯蓋は天井部と体部の境にわずかに鈍い稜か沈線がめぐる程度で、口径は一様に大きいことからTK10型式に相当する。1号墳は6世紀第2四半期中の築造と考えられる。

竪穴式小石室の築造時期については、砂魚塚1号墳墳丘との切り合い関係が認められず前方部裾に構築されていることから1号墳と同時期か後出するものと考えられる。

2号墳は玄室長190cm、幅90cmの小形横穴式石室で、玄室プランから柳沢分類のB型石室に相当する。出土遺物が皆無で時期決定が難しいが、立地的に1号墳に規制を受け、斜面に築かれたと考えられることから後出する古墳で、1号墳とさほど時期を隔たずに築かれたと考える。

種	出土位置	A	B	C	D	E	その他埋土	計	備考
耳環	金環		2					2	
	銀環			2		2	1	5	
碧玉管玉		8	10	11	5			4	38
	メノウ勾玉		1	1					2
滑石勾玉							1	1	
							1	1	
ガラス製品	勾玉					3		3	
	管玉								
	小玉	13	42	45	55	49	155	359	
水金製品	勾玉				1			1	
	切小玉		6	9				14	
	丸玉			1				1	
計	21	60	69	64	51	162	427		

第11表 砂魚塚1号墳出土装身具の出土位置別種類内訳表



第96図 B-11・E-2 地点調査前地形と遺構の位置 (1/750)

(7) B-11・E-2地点

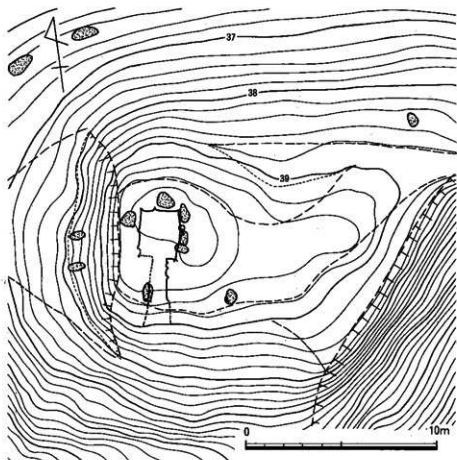
a. 概要

B-11・E-2地点は区画整理事業地の南西端に位置する。事業地内の最終調査地点であった。尾根筋の南斜面は急傾斜で裾には多久川が迫り西北西に向かって流れる。

石川1号墳は最初の踏査時に横穴式石室の古墳であることは確認していたが、樹木伐採後に再度踏査したところ石室の東が前方部状に張りだしてあり、東西に主軸を向ける小型の前方後円墳である可能性が生じた。しかし当時はC-6地点の調査を継続しており、当地点の現況測量を行う時間的余裕がなかったため、周辺部を含めた平板測量を委託した(第96図)。図面を検討したところ東西両端は後世の開墾によって削られていたものの、前方部を東にむけた前方後円墳である可能性が高まった。

調査の開始にあたり仮の墳丘主軸方向にトレンチをいれたところ石室の西5m地点で幅1.3mの周溝の一部を検出し、円墳あるいは方墳であることが判明した。

1号墳から西にのびる尾根筋西端部で花崗岩塊石の散乱が確認された。塊石群では石の間が隙間だらけで原位置を保っていないと判断し、石を除去したところ尾根筋から方形の土壌を検出し、さらに東隣接地からも箱式石棺の一部を検出した。西から2、3号墳とした。また、2号墳の東8mでは丘陵を縦断する浅い溝状遺構を検出した。



第97図 石川1号墳調査前地形図 (1/200)

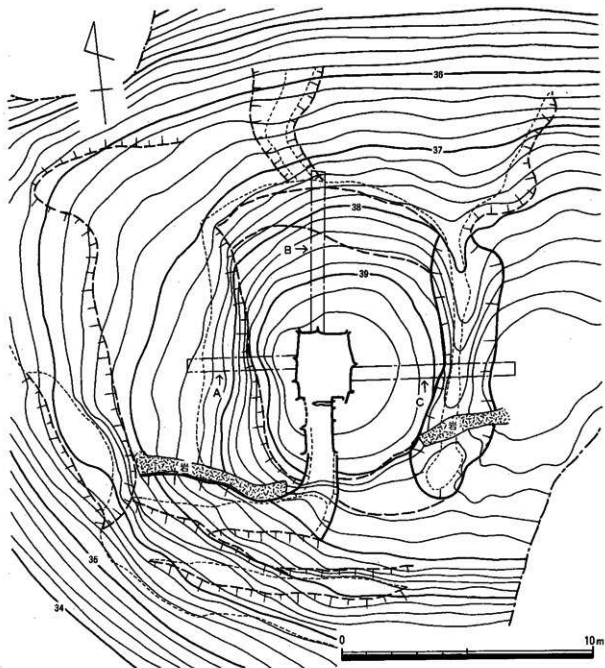
b. 石川1号墳

立地および墳丘（第96～99図、図版48）

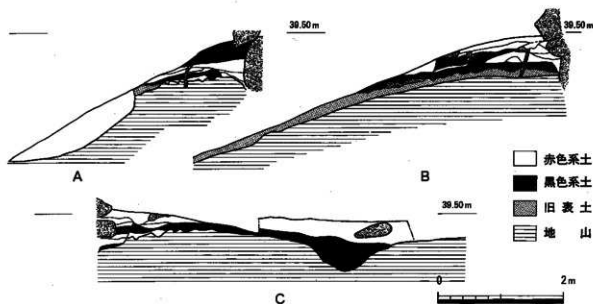
古墳群中最南端の丘陵頂部に位置する方墳である。古墳の南下の水田面からの標高差は40mを測り、北丘陵上に対峙する砂魚塚1号墳とは相互に見通しがよくきく位置関係にある。丘陵の南北斜面とも閉壟によって階段状に造成されていた（第96図）。

墳丘は東西に長い標高39mの丘陵頂部の中央付近に南北に横切る周溝を掘って東端を定め西半部に築造されていた。溝はほぼ直線的に掘られているが、南コーナー付近でベグマタイト質花崗岩脈に阻まれ一部掘り残されていた。コーナーは丸みを有す。

墳丘は盛土の多くが失われているため、古墳の南北墳裾は不明瞭であった。また西墳裾も閉壟に



第98図 石川1号墳墳丘遺存状況 (1/150)



第99図 石川1号墳墳丘土層断面図 (1/60)

よる土採りによって変形し、旧状を確定することは難しいが、東周溝が直線的に掘削されていることから、平面プランは方墳であったと考える。墳丘規模は南北長12.4m、東西幅11mほどに復元される。

盛土の状況は北および東西墳丘トレンチの土層観察を行った結果、北および西土層では地山直上で旧表土と考えられる腐食土層がみられ、その上に赤色土と黒色土が交互に堆積していたが、各層のブロックが大きく、版築作業が粗かったことを伺わせる。

石室 (第100図、図版50)

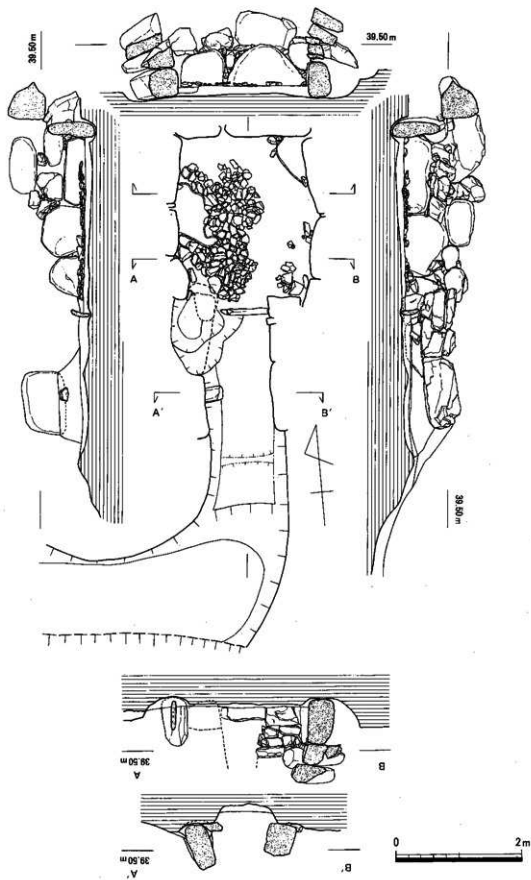
石室の上半部は破壊され、左玄門袖石も抜き取られて遺存状況はよくないが、腰石の配置および石材の抜き取り痕から石室の平面プランはほぼ復元できた。石室は表土から30~40cmほどの深さを基底部として構築された単室両袖式の横穴式石室である。

玄室は左側壁長2.5m、右側壁長2.6m、玄門部側幅1.88m、奥壁側幅1.9mを測り、幅広の長方形プランを有す。玄室腰石には左右壁はいずれも3個、奥壁で2個の花崗岩転石を配し、概ね高さ70cmほどで1段目石積みの天場を合わせている。

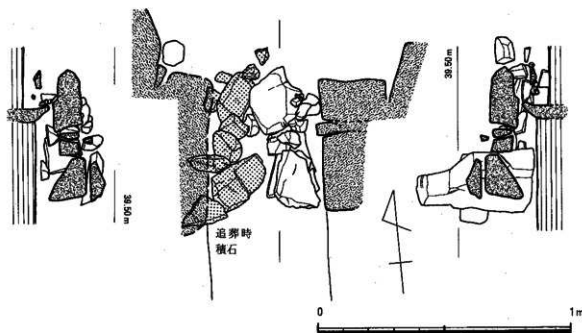
前壁は遺存する右袖の状況から花崗岩の角石を横積みして羨道壁を兼ねていた。この工法に砂魚塚1号墳、前田古墳との共通性があるが、前者に比べると腰石の高さは低く、使用された石材も小さく、丁寧に積み上げられた状況が認められる。

床面にはアブライト系花崗岩角礫を敷いて雑床としていたが、右半部と奥壁左隅角は盗掘時にはぎ取られ、床下地山も掘り返されていた。

羨道は幅84cm、長さ1mほどと考えられる。玄門床では幅11cm、高さ24cmの框石が埋設されていた。羨道中途から引き続き左右両壁に各々花崗岩の1枚岩を立てて側壁腰石としていたが、いずれも表土上に直接置かれ羨道腰石より1段高く据えられていたことから、前庭とした。現存する前庭は長さ1m、幅1mほどである。側壁石は表土上に置かれており、地山を掘り下げて整地された玄室、羨道との間に生じる床面の高低差を解消するため、前庭床面は断面浅いU字形に掘り



第100図 石川1号墳石室実測図 (1/60)



第101図 石川1号墳石室閉塞状況図 (1/15)

込んで床のレベルを下げていた。

側壁石から墳丘外にむけて素掘りの墓道が続き、墳裾付近では約60cmの段差がある。段下からは急に西に向きを変え墳裾沿いに西に下るが、中途から開墾によって削平され消失していた。

石室閉塞状況 (第101図、図版49-a~d)

閉塞は柩石の手前で左半部では高さ48cmほどの板石を立てかけ、右半部では塊石を積み上げていた。板石は基底面から立ち上がり、閉塞された状況をほぼ保っているものとみられるが、右半部の閉塞石の積み方は乱雑で、隙間を充填していた土砂からガラス玉が出土していることから、追葬時の閉塞痕と考えられる。

石室内遺物出土状況と出土遺物

玄室および羨道からは原位置を保った遺物の出土はなくいずれも盗掘廃土、埋土からの出土であった。鉄器、装身具が出土した。

鉄器 (第102図、図版52)

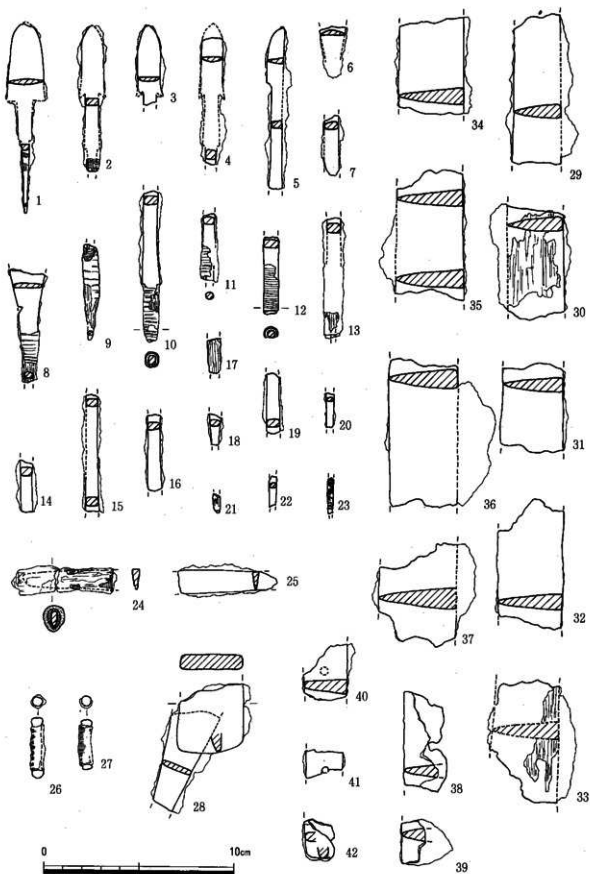
鉄鎌 (1~23, 28) 鎌身部の形態でみると1~4は長頸鎌で関に逆刺を有するが、5は片刃鎌、8は柳葉鎌である。1、2、4、10、11では陰被部に段を有す。頸部に布巻痕を残すものが多い。

鉄刀 (29~42) 13残片を図示したが、背厚の薄い29~33と厚くて刃幅が広い34~39の2振り分とみられる。茎部の40~42は厚さが近似する後者のものと考えられる。目釘穴が2孔残る。後者では器表に鞘の木質が錯着しているものが見受けられる。

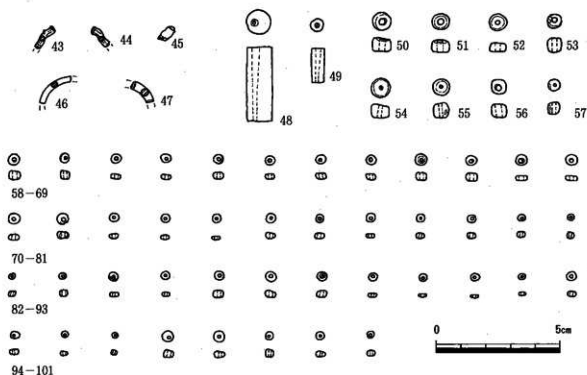
弓付風金具 (26, 27) 2点出土している。26は全長3.2cm、27は2.65cmを測り、26が長い。

刀子 (24, 25) 24は柄部片で木質が遺存する。25は刃部片で幅1.25cmを測る。

鉄斧 (28) 鉄鎌が錯着する。刃部のみ出土で刃幅3.5cmを測る。



第102图 石川1号墳出土鉄器実測図 (1/2)



第103図 石川1号墳出土装身具実測図(2/3)

装身具(第103, 図版52)

銀環(43~47) いずれも小片である。銅地に銀箔を貼る。

碧玉管玉(48) 1点のみの出土である。

ガラス管玉(49) 1点のみの出土である。

ガラス丸玉(50~101) 大粒の類(50~57)と小玉(58~101)がある。

石室外遺物出土状況(第104~105図、図版51-a~e)

石室墓道を挟んだ両サイド、墳丘I区、IV区墳裾付近から土器がまとめて出土した。葬礼ともなって供献された土器と考えられる。I区周辺をA土器群、IV区周辺をB土器群とした。

A群から計29個、B群から計13個の出土を確認したがこの他古墳周囲で出土した43個のうち13個はI区からの出土でありA群中の出土と考えられることから土器供献の中心はA群域であったと考えられる。器種構成をみると土器の中心を占めるのは杯である。

A土器群 I区で検出した。墓道の左壁面に沿って墳裾に露出していた花崗岩脈周辺から集中して出土した。杯蓋、身が多くを占める。32、40、41、43はあたかも岩脈上あるいは墳裾に据えられた状態で出土しているが、3、6、22、31、42、50、78、84等は破損、横転していることから墳丘斜面あるいは墳頂部から転落した状態であったと推測する。出土地点を明示した他にも周辺から多くの土器が出土したがいずれも原位置を離れていたものとする。杯セット群に混じって口頸部を打ち欠いた皮袋形土器が出土している。

B土器群 II区では墳裾コーナー付近から集中して出土したが、遺物配置および出土状態から3小グループに分けられたので、それぞれB-①、②、③群とした(第106図)。

B-①、②群は地山直上の黒色土層から出土し、現位置にほぼ同時期に供献されたとみられる。

B-①群は群中で最も石室近くに位置し墳丘裾部から出土した。須恵器の杯4セット、口頸部を打ち欠いた甕1個、土師器の直口壺等が、前列4個、後列2個の前後2列に整然と並んで置かれていた。B-②群はB-①群の背後、墳裾のやや上面から出土した。地山から若干浮いた状態で手ずくねのミニチュア脚付土師器直口壺が2個、高杯1個の計3個がいずれも横倒し状態で出土した。B-③群は周溝埋土中で墳丘から短期間に流れ込んだ状況が窺われる。大甕1個、大形器台1個であった。墳丘上に据えられていたものであろう。

B群間での供献時期の先後関係については明らかではない。

出土土器（第107～111図、図版53～57）

須恵器（1～60、73～85）

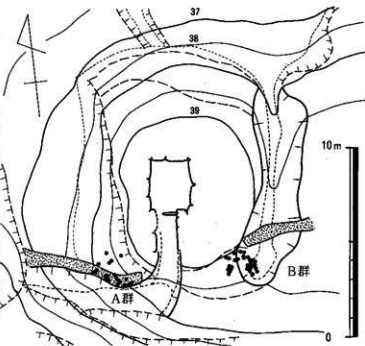
杯は施蓋状態で出土したものが5組で、そのうちB群からの出土が4組を占める。A群では遺物の散乱が顕著である。また、形態、分量にはかなりバリエーションが認められ一定期間の追葬を示しているものと考えられる。

全体の傾向として形態的には口縁と天井部との境の稜が不鮮明で、蓋の口縁は直立気味、口縁端部では面をなすかあるいは明瞭な段を有す。身は立ち上がり部は直立しているもの心持ち内傾化している。口唇部は丸くおさめている。技法上では内面にタタキの当具痕跡を残すものが11個ほど見られ、外面のヘラケズリは概ね中心から2/3ないし1/2である。分量は口縁径をA、B群相互で比較してみると蓋ではB群資料はA群資料よりも概して大形傾向が窺え、身も同様な傾向が窺える。焼成は堅緻である。

高杯は無蓋で、短脚の50～52と長脚2段透かしの53がある。50は脚柱にカキメを施し下部に小円形の透かし孔を三方に施している。51は脚柱上部にカキメが施される。長方形の三方透かしが入るものと考えられる。

甕は頸部が短い55、56と長頸の54がある。56は胴部にカキメを施し頸部は大きく開き口縁径は胴部径を上回る。焼きは甘い。54は胴部が小形化している。

57は皮袋形土器である。口頸部は打ち欠きによって欠失し両肩に凹環状の吊り手を貼り付けていたとみられるがこれも欠失している。体部の平面形は半円、上から見ると中膨らみの紡錘形、側面観は円形を呈し幅18.2cm、厚さ13.6cmを測る。既知の類資料と比べると胴の膨らみが顕著である。両側縁部から底部にかけて餃子状に擠みだし、胴部には片側に×状に粘土紐を貼り付け縫い目状の刺突文を施す。焼成はあまい。胴部の膨らみが顕著で、縫い目の表現が忠実であることから同類のなかでは古式の様相を呈する。

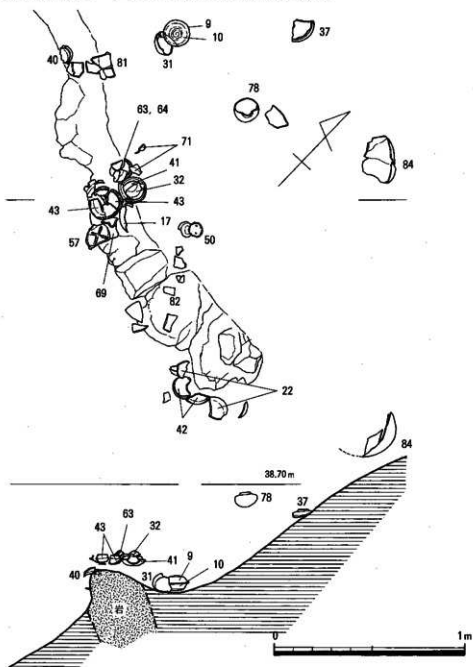


第104図 石川1号墳墳丘土器群出土地点描図 (1/200)

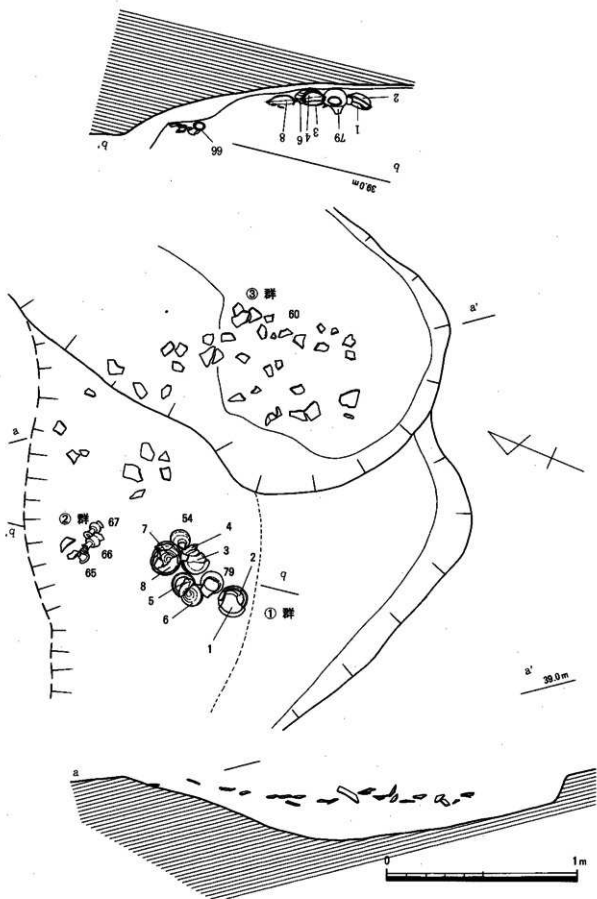
58は大形器台である。杯部は口縁部下で一度外に大きく屈曲した後再度上方に立ち上がり細くなっておさめる。杯部の深さは13.2cmと浅めで、脚部は接合部下が一部欠失するものの直線的に据って広がりが裾部付近では内湾して直立ぎみにおさめる。外面は杯上半部に二条のへら描き波状文がめぐり下半部は外面ではタキメ内面では同心円当具痕跡が明瞭に残る。脚部との境では4条の刻みを施す小凸帯が、脚部では上から5段のへら描き波状文帯がめぐり、各段の境は二条一組の凹線文帯で区画する。各段に底辺の長い正三角形の五方透かし孔がめぐる。焼成は甘い。

短頸壺は6点を図示した。73、74は閉蓋状態で出土した。口頸部は直立し胴部は肩が張る。

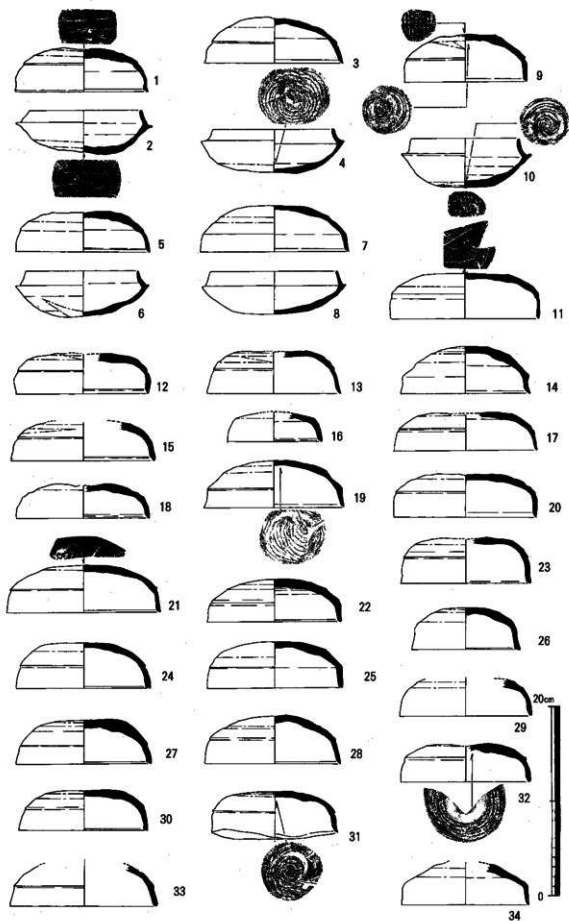
79は直口壺である。口頸部は若干外反し端部は細く尖る。胴部は扁平球形である。ヨコナデで整形しているが底部は手持ちへらケズリで仕上げる。焼成はあまい。



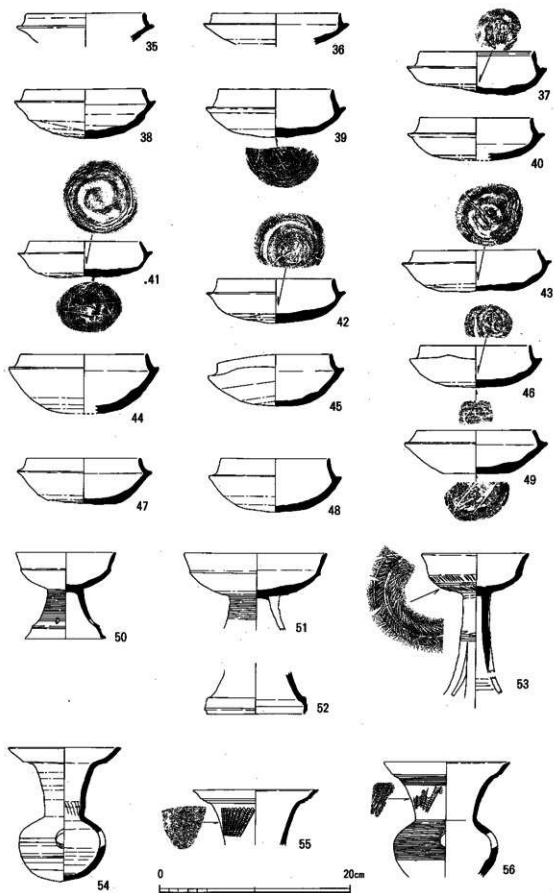
第105図 石川1号墳墳丘A土器群出土状況図 (1/20)



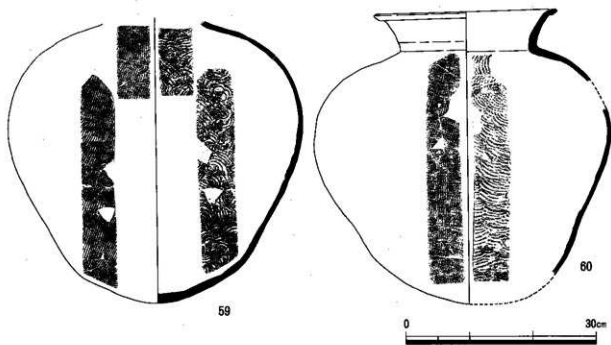
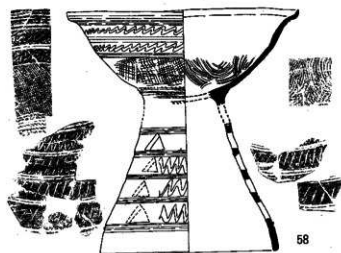
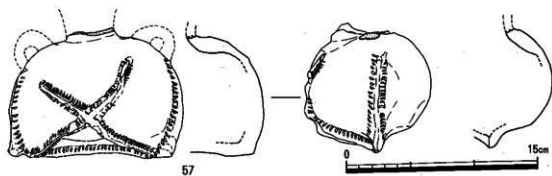
第106图 石川1号墳丘B土器群出土状況图 (1/20)



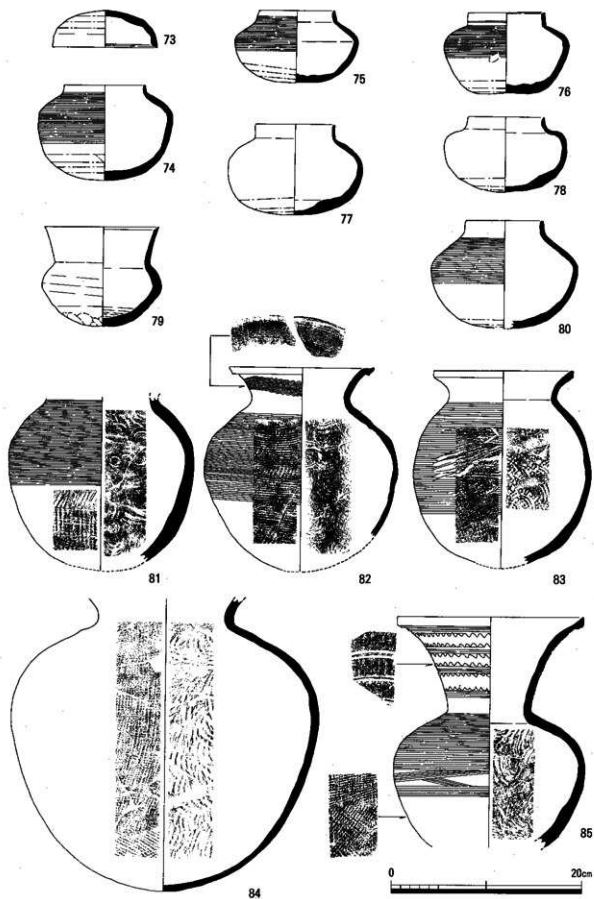
第107图 石川1号墳填丘出土土器実測図① (1/4)



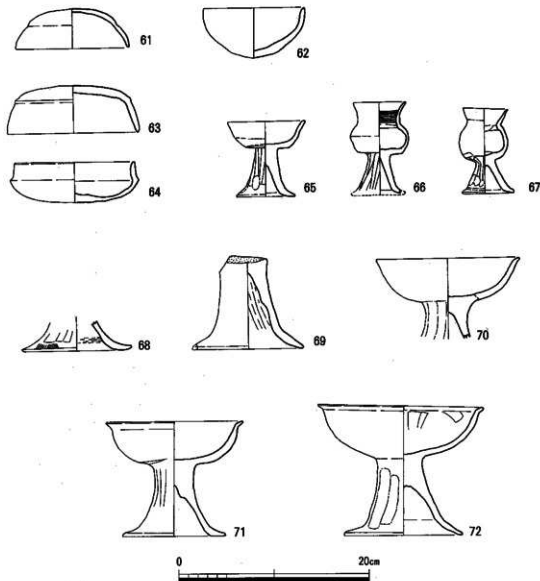
第108图 石川1号墳横丘出土土器実測图② (1/4)



第109図 石川1号墳填丘出土土器実測図③ (57は1/3、他は1/6)



第110图 石川1号墳丘出土土器实测图④ (1/4)



第111図 石川1号墳丘出土土器実測図⑤ (1/4)

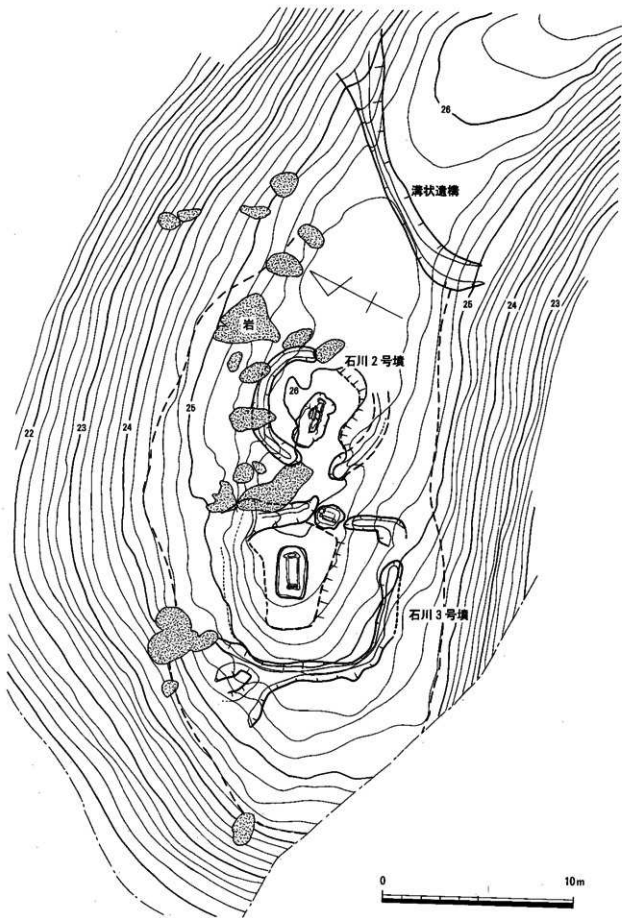
中形壺は頸の短い81、82、83と長頸化した85がある。いずれも胴上半部にはカキメを施す。壺は3点図示した。60は大形器台とともに出土した。胴部は肩が張り口縁端部は帯状に肥厚している。84は墳丘斜面に据えられていたものとみられる。

土師器 (61~72)

61、63、64は須恵器杯蓋、身を横して作られたものである。

65~67はB-①群からの一括出土のミニチュア土器である。いずれも脚裾は短く端部は細くなり脚柱部は縦方向の研磨が行われている。65は高杯である、杯底部は平坦で口縁部は上方に短く外反する。66、67は脚付壺である。66は口頸部が外反し胴部が扁平球形で底部が平面であるのに対し、67は口頸部が上外方に直線的に短く開く。

68~72は高杯で、71、72は全形を知りうる。基本的には腕に脚を付けたものと解され杯部は口縁端部が外反へ短く屈曲し丸くおさめ、脚部は太く裾に向かって緩やかに広がり裾部で短く外に屈曲し丸くおさめる。



第112図 石川2、3号墳周辺遺構配置図 (1/200)

c. 石川2号墳

立地と墳丘 (第112, 113図、図版58)

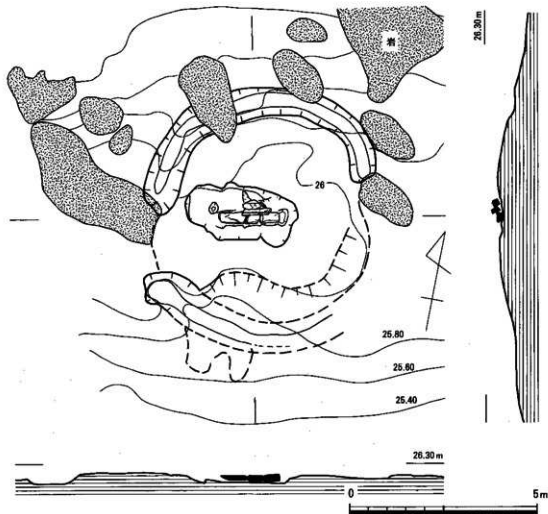
尾根西端に東西に並んで築かれた2基の低墳丘墳のうち東に位置する古墳である。

古墳周辺ではいたるところに花崗閃緑岩の露頭がみられ、近世以降石材の切りだしが頻繁に行われており、表土中から石屑が多く出土した。石材を切り出すために丘陵の掘削が行われたらしく、その際に3号墳ともども墳丘を大きく削平したようである。

2号墳の墳丘はほぼ完全に失われており、わずかに北半部と南西部の周溝の一部が残るにとどまる。尾根筋線では花崗閃緑岩塊に阻まれ周溝がとぎれていた。現況から想定される墳丘は南北にやや長い円形プランで長径6.25m、短径5.15mほどと考える。

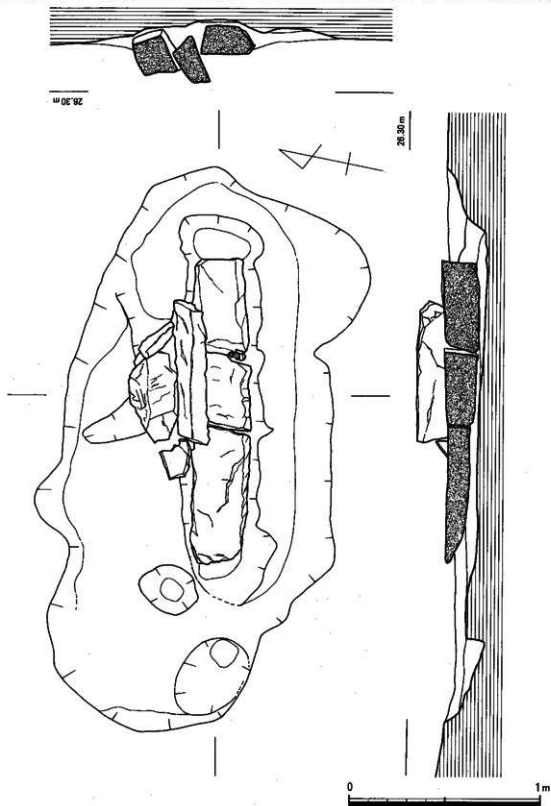
埋葬主体 (第114図、図版59)

墳丘の中央から少し南西に寄せ主軸を尾根筋と平行方向にとる箱式石棺が1基確認された。遺存状況は悪く、右側石1枚と床面の敷石3枚が残るのみであった。他の石材はすでに抜き取られていた。幸い敷石は現況を保った状態であることから、棺の内法は長さ160cm、幅26~33cm、深さは15cmを測る。現存する棺材は全てベグマタイト質の花崗岩切り石を用いていた。敷石は西



第113図 石川2号墳墳丘遺存状況図 (1/100)

側が薄く長いが、東に向かって徐々に厚くなるように並べられ、石棺掘り方もそれに呼応して東に向かって深く掘られていた。敷石最大幅が西端から110cmの位置にあることから、遺体の頭位は東向きに



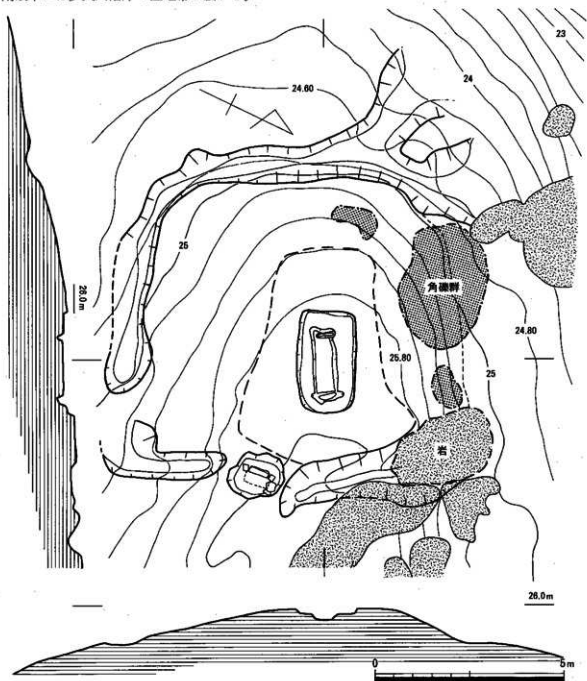
第114図 石川2号墳主体部実測図 (1/20)

あったと考えられる。主体部の破壊が激しく、主体部の掘り方は明らかにできなかった。
 墳丘、主体部からの出土遺物はない。

d. 石川3号墳

立地と墳丘（第112、115図、図版58）

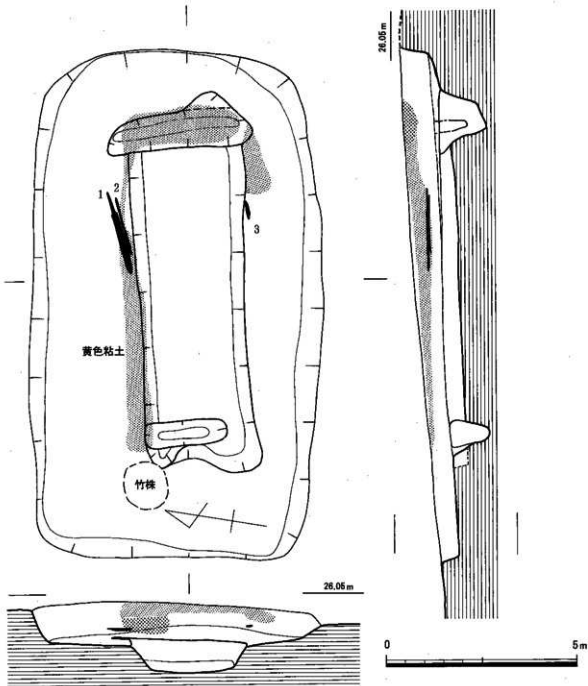
2号墳の西隣に隣接して丘陵先端に位置していた。墳頂から西には旧加布里湾一帯が一望でき、
 南眼下には多久川沿岸の湿地帯が広がる。



第115図 石川3号墳墳丘遺存状況図 (1/100)

墳丘は流失しており、表土を除去するとすぐに花崗岩バイラン土の地山層があらわれる状況であったが、墳丘の平面プランは墳裾部の地山整形痕跡と周溝から辛うじて確認できた。プランは方形に近いが、東墳裾長は8.8m、西7.6m、南7.6m、北8mを計り、東墳裾が広がる。

墳丘を南北に分けてその特徴を比べてみると、墳丘北側は地山の削り出しによって墳丘が明瞭に造り出され、墳裾には幅3mほどのテラス面が形成されていたのに対し南側では明瞭な墳丘立ち上がりは認められなかった。また東周溝の掘り方は北側が広く深いのに対し、南側では浅く幅も狭い。このことは北側を丘陵下から見上げた時の墳丘の見ばえを良くする視覚的な効果を狙った築造であったことをうかがわせる。北墳裾にテラス面を設けたために墳丘は尾根筋からかなり南に寄ってしまった



第116図 石川3号墳主体部実測図 (1/20)

たと考えられる。墳頂主体部が墳丘の北側に偏ったのはこのためであろう。

墳丘高は現状では1.25mを測る。墳丘上の削平が著しかったため、本来、墳丘に明瞭な盛土が行われていたか否かは確認できなかった。

上述のとおり墳頂部はかなり北に寄って尾根筋方向に長めの長方形に遺存していた。そのほぼ中央に尾根筋に主軸を持つ方形土壇1基が検出された。位置的に墳丘の中央から1mほど北に偏っていたため、複数主体部の存在も想定したが、他の主体部は検出されず、最終的には埋葬主体部は1基のみであるという結論に達した。主体部が北に寄ったのは墳頂部の平坦面が当初から北に偏って築造されていたためと判断した。

周溝は東から南、西墳裾にかけて巡るが、浅く幅も狭い。北西コーナーから北西に向けて排水溝が延びていた。また、東尾根筋線から少し南寄りの地点で幅1.7cmにわたって途切れ、陸橋部をなしていた。その中央で攪乱を受けた小石棺墓を検出した。

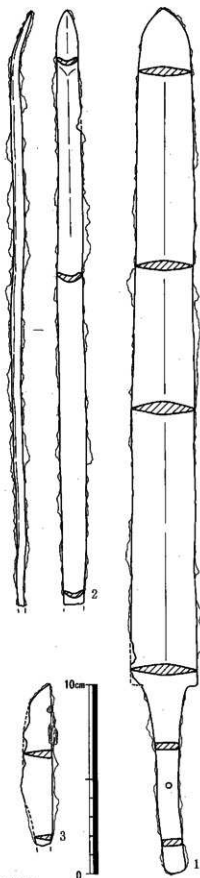
墳丘北東斜面上で人頭大の角石塊が集中して検出された(図版60-a, b)が、地山から浮き上がっていた上、配列が不規則だったので現況を保っていないものと判断し除去した。上方から転げ落ちたような状況を呈しており、墳丘斜面上方に置いていたものか、あるいは頂部に敷設していた可能性がある。

北東周溝は石材の切り出し時の攪乱を受けていたが、埋土内からは供献されたとみられる直口壺2個、高杯1個が出土した。

埋葬主体 (第116図、図版60-e, 61-d)

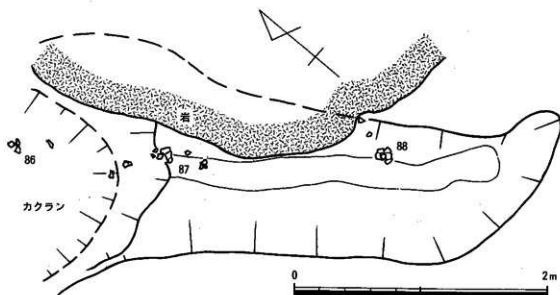
墳丘中央から1mほど北に寄った位置で尾根線と同方向に主軸を向けた長さ270cm、幅152cmを測る隅丸長方形の土壇を検出した(図版60-d)。土壇を10cmほど掘り下げてみたところ土壇中央から少し南東に寄って組合式木棺の痕跡を検出した(図版60-e)。土壇の掘り方が二段掘りとなっており、一段目は現状で深さ10~20cm。二段目は木棺の掘り方で、長さ184cm、幅は東小口付近で60cm、西小口付近で57cm、深さは1段目テラスから10cmを測り、掘り方の横断面は逆台形状を呈す。

木棺掘り方の土層観察では木棺検出時に想定した棺の



第117図

石川3号墳主体部出土鉄器実測図(1/2)



第118図 石川3号墳周溝土器出土状況図 (1/30)

立ち上がりを明確にはとらえることができなかった。しかし小口板の掘り方があることから組合式箱式木棺であることは明らかである。また棺内床には赤色顔料を少量混ぜた真砂土を厚さ10cmほど敷いていたため、その範囲の観察から棺内主軸長は170cmであることは確認できた。棺内幅は掘り方下場の幅を参考にすると東小口で46cm、西小口で42cmを測るが、当然板幅を考慮にいれると内幅は一回り狭くなる。また棺小口の処理は検出時には東西両小口で側板を挟み込むものと推定したが、小口板掘り方の状況から東小口では側板の外にあてたものの、西小口では逆に側板に挟み込まれる形態であったことがわかった。

蓋との継目には黄色粘土によって目張りされていたが、墳頂部が削平されていたため、表土を除去した際にはすでに粘土の一部が確認されていた。

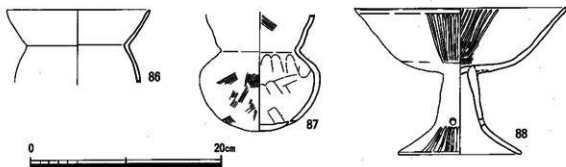
目張り粘土を除去すると、棺の右脇から鉄剣と鉈が重なった状態で、左脇から刀子1点がほぼ同レベルから出土した。木棺の掘り方と粘土の位置などからいずれも棺外に副葬されたものである。棺を組み立てた後に鉄器出土レベルまで棺周囲を埋め戻したのであろう。

副葬鉄器 (第117図、図版61-c)

1は鉄剣である。全長45.6cm、刃部長35.7cm、茎長9.9cm、幅は切先付近で2.7cm、根部で3.5cmを測る。鎧を造り、厚さは根部付近で5.4mmを測る。茎幅は目釘孔部で2.4cm、先端で3.5cm、厚さ7mmを測る。茎中央部に径3mmほどの目釘穴が認められる。表面には鞘、柄を想定させる有機物等の痕跡は認めなかった。

2は鉈である。基部が欠失しており、現存長31.3cm、刃、茎部ともに断面は三日月形をなし境が不明瞭である。幅は刃先端付近で1.1cm、中央で1.2cm、基部付近で1.3cmを測る。器表には木質の付着は認められない。

3は刀子である。茎の先端を欠失する。残存長8.5cm、刃部幅は1.6cmを測る。刃部に木質が錆着し鞘に収められていたとみられる。



第119図 石川3号墳周溝出土土器実測図(1/4)

周溝土器出土状況(第118図、図版59-d、e)

2号墳北東周溝底部直上から土器が出土した。周溝の東に隣接して花崗閃緑岩の露頭があり、後世の石切りの際に周溝が大きく攪乱を受けたことも手伝って土器はいずれも破砕していた。

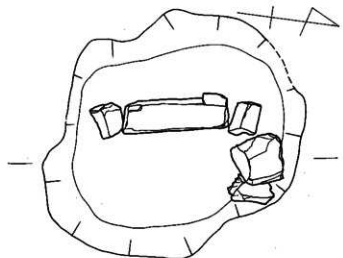
出土土器(第119図、図版59-f)

いずれも遺存状況はよくなかったが小型丸底壺と高杯は図上復元することができた。

86、87は小形丸底壺である。86は胴下半部を欠く。口頸部では鋭く「く」の字状に反転し、やや内湾しながら上外方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。器壁は薄い。87は小形丸底壺である。胴部外面は粗いタテハケ、内面はケズリの後、ナデによって仕上げる。88は高杯である。杯部は深く底部との境は不明瞭である。脚柱部から裾にかけてはなだらかに広がり、端部は尖り気味に丸く仕上げる。脚柱下端に三方の円形透かし孔がある。杯部は内外面と、また脚裾外面にタテ方向の暗文状の研磨が行われている。

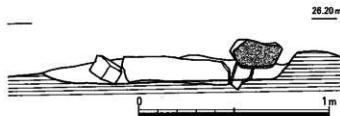
小形箱式石棺

陸橋部のほぼ中央で検出した。墓竈内は大きく攪乱をうけ原位置をとどめる石材はない。柱状の花崗岩を「ロ」の字形に並べて棺としていたものとみられる。土壌も攪乱により当初の掘り方は特定できなかった。現状で主軸長14cm、幅13cm、深さ16cmを測る。



e. 溝状遺構

2号墳の東6mで尾根筋を北東から南西に斜めに横切る幅1.2m、断面が浅いU字形の溝状遺構を検出した。暗黄褐色砂質土を埋土としており3号墳の周溝埋土に似る。出土遺物はなく時期の推定は難しいが、2、3号墳の墓域の区画溝である可能性がある。



第120図 石川3号墳小形箱式石棺実測図(1/20)

遺物 番号	図版 番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備 考
1	53-1	杯 蓋	1号墳墳丘B	4.7	13.8		白色砂粒	青灰色	良好	ヘラ記号
2	-2	杯 身	1号墳墳丘B	4.6	11.5		白色砂粒	黄灰色	良好	ヘラ記号
3	-3	杯 蓋	1号墳墳丘B	4.8	14.5		白色砂粒	黄灰色	良好	
4	-4	杯 身	1号墳墳丘B	4.5	12.7		白色砂粒	青灰色	良好	内面に当具痕
5	-5	杯 蓋	1号墳墳丘B	4.2	14.0		砂粒、雲母	青灰色	良好	
6	-6	杯 身	1号墳墳丘B	4.9	11.7		砂粒、雲母	黄灰色	良好	
7	-7	杯 蓋	1号墳墳丘B	4.9	15.6		砂粒、雲母	灰 色	不良	
8	-8	杯 身	1号墳墳丘B	4.5	13.3		雲母、砂粒	灰 色	不良	
9	-9	杯 蓋	1号墳墳丘A	5.0	12.8		砂粒、雲母	淡黄灰色	良好	内面に当具痕、外面にタタキ目痕
10	-10	杯 身	1号墳墳丘A	5.1	11.2		雲母、砂粒	淡黄灰色	良好	内面に当具痕、外面にタタキ目痕
11		杯 蓋	1号墳1~4区	4.1	15.4		砂粒、金雲母	黒灰色	良好	二条のヘラ記号あり
12		杯 蓋	1号墳1区(4.2)		13.9		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
13		杯 蓋	1区墳西斜面(4.5)				白色砂粒	暗灰色	良好	
14	-14	杯 蓋	1号墳墳丘A	5.0	13.5		白色砂粒	暗灰青色	良好	
15		杯 蓋	1号墳墳丘A(4.1)				白色砂粒	淡黄灰色	良好	
16		杯 蓋	1号墳北斜面(3.0)		10.0		白色砂粒	黒灰色	良好	
17		杯 蓋	1号墳墳丘A(4.0)				白色砂粒	灰 色	良好	
18		杯 蓋	1号墳1区(4.2)				白色砂粒	淡黄灰色	良好	
19		杯 蓋	1号墳墳丘A	4.9	14.7		白色砂粒	淡黄灰色	良好	内面に当具痕
20	-20	杯 蓋	1号墳墳丘A	4.5			白色砂粒	淡黄灰色	良好	
21		杯 蓋	1号墳4区	5.0	16.2		金雲母	黒灰色	良好	ヘラ記号
22	-22	杯 蓋	1号墳墳丘A	4.5	14.0		白色砂粒	青灰色	良好	
23	-23	杯 蓋	1号墳1区	4.8	13.5		白色砂粒	淡灰褐色	良好	
24	-24	杯 蓋	1号墳1区	4.8	14.0		白色砂粒	淡黄青灰色	堅緻	
25	-25	杯 蓋	1号墳1区	4.8	14.0		白色砂粒	黒灰色	堅緻	
26	-26	杯 蓋	1号墳1区	4.4	11.5		白色砂粒	淡灰色	堅緻	
27	-27	杯 蓋	1号墳1区	4.7	14.0		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
28	-28	杯 蓋	1号墳2区	5.1	14.5		白色砂粒	黒灰色	堅緻	
29		杯 蓋	1号墳1区(3.8)				白色砂粒	黒灰色	堅緻	
30	-30	杯 蓋	1号墳1区	4.3	13.5		白色砂粒	淡青灰色	堅緻	
31	-31	杯 蓋	1号墳墳丘A	5.0	13.2		砂粒、金雲母	淡黄灰色	良好	内面に当具痕
32	-32	杯 蓋	1号墳墳丘A	7.0	13.5		白色砂粒	淡青灰色	堅緻	内面に当具痕
33		杯 蓋	1号墳1区(4.2)				白色砂粒	黒灰色	良好	
34		杯 蓋	1号墳墳丘A(3.4)				砂 粒	淡黄灰色	良好	
35		杯 身	1号墳2区(3.1)		12.3		白色砂粒	黒灰色	良好	
36		杯 身	1号墳北斜面(3.3)				白色砂粒	淡青灰色	良好	
37	54-37	杯 身	1号墳墳丘A	4.1	12.0		砂粒、金雲母	淡黄茶灰色	良好	内面に当具痕
38	-38	杯 身	1号墳1区	5.1	12.4		白色砂粒	淡黄灰色	良好	
39		杯 身	1号墳1~4区(5.1)				白色砂粒	黒灰色	堅緻	ヘラ記号
40		杯 身	1号墳墳丘A	4.5	11.8		白色砂粒	黒灰色	堅緻	
41	-41	杯 身	1号墳墳丘A	3.8	11.6		砂粒、金雲母	淡黄灰色	良好	内面に当具痕、ヘラ記号
42	-42	杯 身	1号墳墳丘A	4.7	12.2		砂粒、金雲母	淡黄青灰色	良好	内面に当具痕
43	-43	杯 身	1号墳墳丘A	4.3	13.2		白色砂粒	淡黄茶灰色	堅緻	内面に当具痕
44		杯 身	1号墳南斜面(6.2)				白色砂粒	淡青灰色	良好	
45	-45	杯 身	1号墳墳丘A	5.5	12.0		白色砂粒	暗灰褐色	良好	

第12表 石川古墳群出土土器観察表①

遺物 番号	図版 番号	器種	出土遺構	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調(外面)	焼成	備考
46	54-46	杯身	1号墳1区	4.4	11.5		白色砂粒	淡灰色	堅緻	内面に当具痕、外面にクナキ目痕
47	54-47	杯身	1号墳1区	4.8	11.8		白色砂粒	黒灰色	堅緻	
48	54-48	杯身	1号墳2区	5.6	11.2		白色砂粒	淡青灰色	良好	
49		杯身	1号墳2区	4.5	12.4		白色砂粒	淡灰色	良好	へう記号あり
50	54-56	高杯	1号墳墳丘A	9.1	10.4		砂粒金雲母	淡黄茶灰色	良好	三方スカシ
51		高杯	1号墳南斜面	(8.1)	15.0		緻密	灰色	良好	
52		高杯	1号墳南斜面	(4.4)			金雲母	灰色	良好	脚、裾部
53	54-53	高杯	1号墳石室内1区	(15.8)	11.1		砂粒雲母	灰白色~黒灰色	良好	スカシあり、上段が2方向下段が3方向
54	54-54	蓋	1号墳墳丘B	14.2			緻密	茶褐色~黒色	良好	
55		蓋	1号墳1区	(5.9)			白色砂粒	淡黄黒灰色	良好	
56		蓋	1号墳尾根上	(11.9)			白色砂粒	淡茶褐色	良好	陶質
57	56-57	皮袋形土器	1号墳墳丘A	(10.3)	4.5		砂粒金雲母	淡褐色	不良	
58	56-58	特殊器台	1号墳2区				白色砂粒	淡黄灰褐色	軟質	
59	56-59	壺	1号墳前庭1区	44.0				灰褐色~明黄褐色	堅緻	
60	56-60	壺	1号墳墳丘土器B-2	46	(17)		砂粒	灰色~黄灰色	良好	
61		杯蓋	1号墳3区	4.2	11.9		小砂粒少含	明黄茶灰色	良好	
62		碗	1号墳北斜面	5.3			白色砂粒	明黄茶色	不良	
63	54-63	杯蓋	1号墳墳丘A	5.0	13.5		砂粒金雲母	淡黄茶色	良好	
64	54-64	杯身	1号墳墳丘A	4.2	12.5		金雲母	明淡黄茶色	良好	
65	54-65	小形高杯	1号墳墳丘B	7.9			雲母黒い粒	褐色	不良	ミニチュア土器
66	54-66	小形台付壺	1号墳墳丘B	9.5	5.5		雲母黒い粒	茶褐色	普通	ミニチュア土器
67	54-67	小形台付壺	1号墳墳丘B	9.0	4.7		雲母	茶褐色	普通	ミニチュア土器
68		高杯(脚)	1号墳墳丘A	(3.2)			緻砂粒	淡茶灰色	良好	
69		高杯(脚)	1号墳墳丘A	(9.8)			緻砂粒	明黄茶色	良好	
70	54-70	高杯	1号墳1~4区	(8.1)			砂粒雲母	淡茶色	良好	
71	54-71	高杯	1号墳墳丘A	12.0	14.3		白色砂粒	赤茶色	良好	
72	54-72	高杯	1号墳1区	13.3			砂粒雲母	茶褐色	良好	
73	55-73	壺	1号墳義道部	3.9	11.0		白色砂粒	白灰色	堅緻	
74	55-74	短頸壺	1号墳義道部	10.0	8.4		白色砂粒	淡黒灰色	堅緻	
75	55-75	短頸壺	1号墳坑T36の下	7.5	7.8		白色砂粒	淡黄灰色	堅緻	
76	55-76	短頸壺	1号墳1区	8.6	8.0		白色砂粒	淡青灰色	堅緻	
77	55-77	短頸壺	1号墳3区	9.5	8.3		白色砂粒	淡黄黒灰色	堅緻	
78	55-78	短頸壺	1号墳墳丘A	7.9	7.9		砂粒金雲母	淡黄黒灰色	良好	
79	55-79	直口壺	1号墳墳丘B	10.4	11.5		雲母黒い粒	灰白色	普通	
80		短頸壺	1号墳墳丘A	11.5	8.0		白色砂粒	淡灰色	堅緻	
81	57-81	壺	1号墳墳丘A	(16.9)			小砂粒	淡黄灰色	良好	
82	-82	壺	1号墳墳丘A	21.2	15.0		雲母	灰色	良好	
83	-83	壺	1号墳南斜面	(20.3)	14.6		白色砂粒	灰褐色~淡黄茶色	良好	
84	-84	壺	1号墳墳丘A	(30.8)			小砂粒少含	淡黄茶褐色	良好	
85	-85	広口壺	1号墳2区	(24.3)	19.2		白色砂粒	淡黄黒灰色	堅緻	
86		壺	3号墳周溝	(7.7)			白色緻砂粒	茶灰色	良好	
87	58-87	壺	3号墳周溝	(12.3)			砂粒	淡黄茶色	良好	朱を入れていた可能性あり
88	58-88	高杯	3号墳周溝	15.4	22.1		砂粒金雲母	淡茶色~赤茶色	良好	

第13表 石川古墳群出土土器観察表(2)

f. 小結

石川1号墳は尾根上に築造された方墳である。立地的には前田古墳、坂の下4号墳、砂魚塚1号墳と系統を同じくする。主体部の単室両袖式横穴式石室は南向きに開口する。

谷をはさんで北に対峙し構造も似た砂魚塚1号墳の石室と比較してみると、平面プランは羨道、前庭の長さ、幅は近似値を示す。玄室は幅広の長方形プランを呈し、幅はほぼ等しいが長さが24cmほど長い。石室の使用石材は砂魚塚1号墳に比べて腰石を低く組み使用石材は小振りである。右袖部の石積みは平石を積み上げており、転石を積み上げた砂魚塚1号墳よりも丁寧に築かれた感が強い。砂魚塚1号墳よりも古式の様相を呈す。

墳丘周囲、特に石室開口部周辺に土器供献が集中することも砂魚塚1号墳と似た状況を示す。供献土器の中心が杯であることも共通している。杯蓋は砂魚塚に比べ杯では口縁端部が面を残すあるいは明瞭な段を有すものが多く、砂魚塚1号墳よりも古い様相を呈す。高杯51、52、器台58、甕60、壺82などはTK47型式にさかのぼる可能性がある。これらを古墳の初葬時の供献品とすれば6世紀初頭となり築造時期は当該時期に比定できよう。土器量が多いのはMT15型式期のもので、B群土器は大方この時期であろう。また、29、49、53、54などはTK10型式期に位置付けられよう。石室形態と同様、砂魚塚1号墳よりも古い段階に築造、埋葬が行われ、砂魚塚1号墳の築造に前後して追葬が終了したものとみられる。

土器のなかでは皮袋形土器が目される。肩部に環状の吊り手を貼りつけており既知の資料に比べて胴部の膨らみが大きく、縫い目状の刺突文も細かく丁寧に施文され、皮袋をリアルに模している。環状吊り手を付けていることから古式に位置付けられるとみられ、皮袋の形態を忠実に再現していることなどを考慮すると、類品としては最も古い型式に位置付けられる。付近出土の須恵器杯などからTK10型式まで遡る可能性がある。

3号墳は方墳である。墳丘は地山整形を主体として築かれるが、北側のシャープな整形に比べ南側では周溝で墓域を区画する程度であることから北側の谷を意識して築造されたとみられる。

埋葬主体は組合せ式箱式木棺で墳丘中央から北に寄って築かれる。棺は東小口を外に出すが西小口は側板で挟み込む形態をとる。棺床は少量の朱を混ぜたマサ土で床を張っていた。また蓋との間には黄色粘土で目張りしていた。棺の内幅は東が広く頭位が東にあったものとみられ、東側棺外右に鉄剣と鉈、左に刀子が副葬されていた。北東周溝内から出土した高杯、小形丸底壺は柳田編年のⅡ-b期に相当するものと考えられる。立石1号墳に後続する古墳と考えられる。

2号墳は箱式石棺を主体とする円墳である。墳丘、主体部とも遺存状況は悪く墳丘にわずかに残る周溝によって墳形が確認できた程度である。棺床に厚い床石を埋設する例は糸島地方では知られていない。時期を推定する資料に乏しいが墳丘は3号墳の後背地に位置し、3号墳の立地に制約を受けて造墓されたとみられることから3号墳に後出の古墳と考えられる。

勾玉

(単位: mm, g)

遺構名	押図番号	遺物番号	長さ	最大幅	最大厚	孔径		重量	穿孔	色調	材質、備考
						上	下				
前田古墳	9	26	35.9	21.5	10.9	2.3	1.1	11.0	片側	赤茶色	メノウ
	9	33	18.3	16.2	7.9	3.3	1.3	3.12	"	茶白色	メノウ、一層欠損
板の下5号墳	66	39	31.8	16.4	10.0	2.6	1.2	7.26	"	白色透明	水晶
砂魚塚1号墳	77	B 29	24.7	14.8	8.3	2.6	0.9	3.97	"	赤褐色	メノウ
	78	C 87	26.1	16.0	17.2	3.5	1.7	3.68	"	うす茶色	"
	79	D154	23.2	14.8	8.6	2.8	1.0	3.89	"	白色透明	水晶
	"	" 267	20.5	13.0	7.7	2.7		3.37	有孔	半透明青緑色	ガラス
80	272	19.8	10.5	4.6	2.8	2.1	0.9	両側	灰白色	滑石	

切子玉

(単位: mm, g)

遺構名	押図番号	遺物番号	長さ	径			孔径		重量	穿孔	色調	材質	
				上	中	下	上	下					
前田古墳	9	27	27.8	8.2	16.2	6.9	4.4	1.3	8.04	片側	白色透明	水晶	
	"	28	18.8	7.8	15.8	7.2	4.2	1.6	5.14	"	"	"	
	"	34	9.0	5.9	10.2	6.2	3.2	1.7	1.14	"	"	"	
	"	35	13.9	8.1	12.4	8.0	2.9	1.8	2.81	"	"	"	
	"	36	13.2	7.7	11.2	5.4	3.3	1.6	1.92	"	"	"	
	"	37	14.6	9.3	12.8	8.3	3.9	1.7	2.93	"	"	"	
砂魚塚1号墳	"	38	15.4	8.0	14.1	9.2	1.4		3.70	"	淡緑色	ガラス	
	77	B 30	15.8	7.8	12.0	7.5	4.2	1.6	2.77	"	白色透明	水晶	
	"	" 30	10.7	6.1	9.2	6.0	3.0	1.0	1.10	"	"	"	
	"	32	16.8	8.2	12.7		4.2	1.4	3.28	"	"	"	
	"	33	11.4	7.2	11.3	7.0	3.6	1.6	1.74	"	"	"	
	"	34	13.0	7.3	11.5	7.1	4.0	1.5	1.96	"	"	"	
	"	78	C 88	15.7	7.9	13.0	7.3	4.0	1.6	2.96	"	"	"
	"	89	13.8	8.1	12.0	6.7	3.6	1.3	2.29	"	"	"	
	"	90	15.5	7.3	12.7	7.6	3.5	1.0	2.92	"	"	"	
	"	91	13.5	7.3	12.0	7.0	3.8	1.1	2.09	"	"	"	
	"	92	10.6	7.2	10.2	6.8	3.7	1.4	1.29	"	"	"	
	"	93	15.4	8.6	12.3	7.3	4.7	1.8	2.79	"	"	"	
"	94	20.0	7.6	10.5	7.1	3.5	1.5	1.71	"	"	"		
"	95	18.2	8.1	13.2	7.4	3.8	1.3	3.78	"	"	"		
"	96	14.4	7.1	12.2	6.7	3.7	1.6	2.27	"	"	"		

丸玉

(単位: mm, g)

遺構名	押図番号	遺物番号	長さ	径	孔径		重量	穿孔	色調	材質、備考
					上	下				
前田古墳	9	35	8.0	10.0	2.0	1.8	1.0	片側	赤茶色	メノウ
	"	36	10.0	11.6	2.0	1.8	1.93	"	オレンジ色	"
	"	37	12.0	13.9	1.9	1.7	3.27	"	朱色	"
	"	38	12.8	15.4	2.1	1.8	4.08	"	"	"
板の下5号墳	66	40	13.1	15.6	2.2	1.5	4.72	"	"	"
砂魚塚1号墳	78	C 97	8.2	10.2	3.7	1.2	1.07	"	白色透明	水晶

第14表 萩浦出土装身具観察表①

管 五

(単位: mm)

遺構名	押入 番号	遺物 番号	長さ	最大径	孔 径		重量	穿孔	色 調	材質	備 考	
					上	下						
砂魚塚1号墳	77	A 8	24.5	5.6	3.5	1.0	1.22	片側	白緑色	碧玉		
	"	" 9	22.0	8.0	2.4	1.2	2.57	"	黒緑色	"		
	"	" 10	19.1	7.5	2.5	0.8	1.95	"	"	"		
	"	" 11	19.5	7.6	2.7	0.7	1.89	"	暗緑色	"	割れ	
	"	" 12	21.1	7.5	2.7	1.1	1.98	"	"	"	一部欠損	
	"	" 13	22.2	5.9	2.7	0.7	0.96	"	白緑色	"		
	"	" 14	5.4	4.3	2.2	2.0	0.13	"	淡白青色	不明	欠損	
	"	" 15	20.0	7.5	3.0	1.0	1.90	"	暗緑色	碧玉	割れ	
	"	77	B 35	19.8	8.5	3.4	1.0	2.43	"	"	"	
	"	"	" 36	23.5	7.9	2.5	0.7	2.79	"	"	"	
	"	"	" 37	26.6	9.1	2.8	0.7	4.15	"	"	"	
	"	"	" 38	19.9	8.5	3.0	0.9	2.48	"	"	"	
	"	"	" 39	23.2	8.3	3.2	1.2	2.76	"	"	"	
	"	"	" 40	27.8	8.9	4.0	1.6	3.78	"	"	"	
	"	"	" 41	29.1	8.3	4.2	1.3	3.52	"	"	"	
	"	"	" 42	17.9	5.8	2.5	1.3	0.85	"	白緑色	"	割れ
	"	"	" 43	25.7	9.7	2.4	0.9	4.68	"	暗緑色	"	
	"	"	" 44	11.1	4.2	2.2	2.2	0.30	両側	淡緑青色	不明	
78	C 98	23.1	10.8	3.0	1.2	6.07	片側	暗緑色	碧玉			
	"	" 99	29.5	10.4	3.0	1.1	6.09	"	"	"		
	"	" 100	27.1	10.1	2.2	2.4	5.17	両側	"	"		
	"	" 101	25.6	9.6	3.4	1.0	4.27	片側	"	"		
	"	" 102	21.8	8.5	2.5	1.1	2.98	"	"	"		
	"	" 103	22.7	8.6	3.2	1.0	2.96	"	"	"		
	"	" 104	23.3	9.0	3.2	1.1	3.43	"	"	"	割れ	
	"	" 105	24.7	8.9	3.3	1.5	3.46	"	"	"		
	"	" 106	28.0	10.6	3.3	1.3	5.91	"	"	"		
	"	" 107	27.4	10.8	3.2	1.0	5.82	"	"	"		
79	"	" 108	28.1	10.7	2.8	1.2	5.96	"	"	"		
	D155	19.3	8.3	3.8	2.8	2.22	両側	"	"	一部欠損		
	"	" 156	20.0	7.7	3.2	0.9	2.24	片側	"	"		
	"	" 157	16.3	7.0	2.4	0.7	1.35	"	"	"		
	"	" 158	19.4	8.1	3.3	1.5	2.10	"	"	"		
	"	" 159	20.3	8.0	3.1	0.9	2.07	"	暗緑色	"	一部欠損	
	"	" 160	9.1	7.4	3.6	2.9	0.98	有孔	青緑色	ガラス		
	"	" 161	19.9	7.1	3.1	3.1	1.52	"	青	"		
79	"	" 162	17.8	6.8	2.6	1.7	1.25	"	青緑色	"		
	他268	23.5	9.3	2.4	0.7	3.79	片側	暗緑色	碧玉			
	"	" 269	24.9	9.0	2.3	0.9	3.81	"	"	"		
	"	" 270	18.4	7.2	2.2	0.9	1.66	"	"	"		
	"	" 270	18.0	8.6	3.0	0.7	2.60	"	"	"		
石川1号墳	103	48	29.2	9.7	2.9	1.2	5.21	"	"	"		
	"	49	13.9	5.2	2.0	0.9	0.63	"	"	"		

第15表 荻浦出土装身具観察表②

ガラス玉

(単位: mm)

遺構名	押図 番号	遺物 番号	径	孔径	厚さ	色調	遺構名	押図 番号	遺物 番号	径	孔径	厚さ	色調	
前田古墳	9	39	7.8	1.8	5.1	ダークブルー	砂倉1号墳	77	B54	4.1	1.6	1.8	コバルトブルー	
		40	7.5	1.4	5.9	ブラック			55	3.7	1.2	2.7		
		41	7.2	1.4	5.4				56	3.9	1.6	2.2		
		42	7.2	2.0	5.1				57	4.2	1.5	1.8		
		43	7.4	1.7	5.0				58	3.9	1.2	2.0		
		44	7.0	1.8	4.7				59	4.4	1.6	2.0		
		45	7.1	1.6	4.9				60	4.0	1.5	2.2		
		46	7.0	1.5	5.9				61	4.5	1.7	2.5		
		47	6.7	1.9	4.4				62	4.0	1.4	1.7		
		48	6.8	1.3	5.5				63	3.9	1.4	2.4		
		49	6.9	1.5	5.2				64	4.2	1.6	2.6		
		50	47	1.6	2.8				65	4.2	1.7	1.9		
		51	7.0	1.5	4.7				66	4.0	1.1	2.9		
		52	7.1	1.7	4.0				67	3.8	1.3	1.7		
		53	7.2	1.5	4.2				68	4.0	1.4	2.6		
		54	6.7	1.6	4.3	ダークブルー			69	3.6	1.2	2.5		
		55	5.0	1.3	4.0	コバルトブルー			70	3.7	1.1	1.8		
		56	5.6	1.5	4.2	コバルトブルー			71	3.9	1.5	1.6		
坂の下5号墳	66	41	7.3	2.0	5.6	ダークブルー			72	2.7	1.1	1.3		
		42	6.7	1.7	5.7				73	3.7	1.1	1.5		
		43	8.2	2.0	6.1				74	3.4	1.2	2.0		
		44	8.8	1.7	6.6				75	3.3	1.2	1.3		
		45	7.6	2.3	4.2				76	3.4	1.6	1.6		
		46	7.4	1.5	5.5				77	3.8	1.3	1.8		
砂倉1号墳	77	A16	4.9	1.0	3.3	ブルー			78	3.5	1.1	1.4		
		17	3.8	0.8	4.0	ブラック			79	3.2	1.3	1.5		
		18	3.3	1.1	3.6	ライトブルー			80	3.0	1.3	2.1		
		19	4.1	1.0	3.1	ブルー			81	3.1	1.3	1.7		
		20	4.4	1.2	2.8	ライトブルー			82	3.1	1.1	1.7		
		21	3.8	0.8	3.1	ブルー			83	3.4	1.2	2.1		
		22	3.9	1.4	2.3	グリーン			84	3.4	1.3	2.0		
		23	3.5	1.2	2.6	ブルー			85	2.9	1.2	1.1		
		24	4.0	1.3	2.8	ブルー			86	3.1	1.1	1.7	ダークブルー	
		25	3.1	1.5	2.6	ライトブルー			78	C109	8.1	2.0	5.2	ダークブルー
		26	4.8	1.3	2.8	ブルー			110	7.4	1.8	5.5		
		27	3.5	1.5	2.2	ブルーグリーン			111	7.2	2.8	4.1		
		28	2.8	0.8	2.9	ブルー			112	3.9	1.6	2.0	コバルトブルー	
		77	B45	5.0	1.7	2.7	イエロー			113	3.1	1.2	2.1	
		46	3.7	1.0	3.8				114	3.1	1.0	2.0	ブルー	
		47	3.7	1.7	2.0				115	2.9	1.3	1.8		
		48	3.6	0.7	3.3				116	2.6	1.0	1.3		
		49	3.7	1.3	2.0	ダークブルー			117	2.8	1.0	2.4		
		50	4.7	1.5	3.5	コバルトブルー			118	2.9	1.1	1.5		
		51	4.3	1.5	2.2				119	3.0	1.1	1.7		
		52	4.1	1.6	2.4				120	2.9	1.0	1.8		
		53	4.4	1.6	2.2				121	2.8	1.0	2.1		

第16表 荻浦出土装身具観察表③

ガラス玉

(単位: mm)

遺構名	押図番号	遺物番号	径	孔径	厚さ	色調	遺構名	押図番号	遺物番号	径	孔径	厚さ	色調
砂魚眼号墳	78	C122	3.3	1.0	1.6	ブルー	砂魚眼1号墳	79	D177	5.0	1.7	1.9	
	"	123	3.3	1.1	2.0	"		"	178	3.9	1.5	2.0	"
	"	124	3.0	0.8	1.8	"		"	179	4.4	1.4	2.2	"
	"	125	2.8	1.1	2.4	"		"	180	3.5	1.3	4.0	"
	"	126	3.4	0.8	2.7	"		"	181	4.2	1.4	2.0	"
	"	127	3.4	1.0	2.1	"		"	182	4.2	1.4	2.3	"
	"	128	3.8	1.4	2.1	"		"	183	4.2	1.7	2.2	"
	"	129	3.4	0.9	2.3	"		"	184	4.6	1.8	2.1	"
	"	130	3.8	1.2	1.5	"		"	185	4.0	1.9	1.4	"
	"	131	3.6	1.7	1.8	"		"	186	4.5	1.3	2.3	"
	"	132	2.7	0.9	2.4	"		"	187	4.2	1.6	1.9	"
	"	133	3.4	1.2	2.0	"		"	188	4.4	1.2	2.4	"
	"	134	3.4	1.0	2.2	"		"	189	4.3	1.6	2.0	"
	"	135	3.3	1.1	2.7	"		"	190	4.2	1.3	2.5	"
	"	136	3.5	1.0	2.5	"		"	191	4.2	1.4	2.2	"
	"	137	3.8	1.5	2.1	"		"	192	4.4	1.5	2.6	"
	"	138	3.7	1.2	2.1	"		"	193	4.1	1.5	1.9	"
	"	139	4.4	1.5	2.3	タークブルー		"	194	4.6	1.4	2.5	"
	"	140	3.9	1.7	2.2	"		"	195	3.6	1.4	1.7	"
	"	141	3.6	1.4	2.0	ブルーグリーン		"	196	3.6	1.6	1.7	"
	"	142	3.4	1.4	1.8	"		"	197	4.0	1.3	2.2	"
	"	143	2.8	1.0	2.1	"		"	198	4.2	1.5	1.8	"
	"	144	3.5	1.3	2.1	"		"	199	4.4	1.7	2.5	"
	"	145	3.0	1.1	2.1	"		"	200	4.0	1.6	1.6	"
	"	146	3.5	1.1	2.0	ブルー		"	201	4.3	1.4	2.2	"
	"	147	3.5	1.2	2.0	"		"	202	4.3	1.3	2.2	"
	"	148	3.3	1.2	1.7	ブルーグリーン		"	203	4.6	1.8	2.4	"
	"	149	3.3	1.4	2.0	ブルー		"	204	4.1	1.5	2.1	"
	"	150	3.3	1.3	1.7	"		"	205	4.2	1.3	2.3	"
	"	151	3.8	1.3	3.0	"		"	206	4.4	1.4	3.3	"
	"	152	3.6	1.3	2.2	タークグリーン		"	207	3.8	1.5	1.8	"
	"	153	3.3	1.2	2.5	"		"	208	3.6	1.3	2.0	"
	79	D163	6.2	2.3	4.0	"		"	209	3.6	1.5	1.7	"
	"	164	4.7	1.5	2.6	"		"	210	3.9	1.7	1.6	"
	"	165	3.8	1.4	1.7	"		"	211	3.6	1.7	1.8	"
	"	166	3.7	1.4	1.8	"		"	212	3.8	1.5	1.9	"
	"	167	3.6	1.3	1.6	"		"	213	4.3	1.6	2.2	"
	"	168	4.2	1.3	1.8	"		"	214	4.2	1.6	1.7	"
	"	169	4.3	1.5	2.0	"		"	215	3.8	1.8	2.0	"
	"	170	4.0	1.3	2.0	"		"	216	3.3	1.5	1.3	"
	"	171	3.8	1.4	1.9	"		"	217	3.4	1.6	1.5	"
	"	172	4.3	4.3	2.2	"		79	E218	5.3	1.6	2.1	ブルーグリーン
	"	173	3.5	3.5	1.7	"		"	219	3.8	1.3	2.3	タークブルー
	"	174	4.1	4.1	1.8	"		"	220	4.0	1.2	2.0	ブルー
	"	175	3.7	3.7	2.0	"		"	221	3.5	0.9	2.7	"
	"	176	4.2	4.2	2.5	"		"	222	3.6	1.4	2.4	"

第17表 荻浦出土装身具観察表④

ガラス玉

(単位: mm)

遺構名	押図番号	遺物番号	径	孔径	厚さ	色調	遺構名	押図番号	遺物番号	径	孔径	厚さ	色調
砂魚眼号墳	79	E223	3.3	1.4	2.5	ダークブルー	砂魚眼号墳	80	275	7.9	2.7	5.8	ダークブルー
	"	224	3.7	1.7	2.0	"		"	276	3.5	1.3	2.6	ブルーグリーン
	"	225	3.3	1.1	2.5	"		"	277	2.8	1.2	2.2	"
	"	226	3.9	1.7	1.8	"		"	278	3.3	1.3	2.4	"
	"	227	3.7	1.3	1.9	"		"	279	3.4	1.2	2.9	"
	"	228	3.7	1.1	2.1	"		"	280	3.5	1.5	1.9	"
	"	229	3.8	1.1	2.1	"		"	281	3.4	1.3	2.2	"
	"	230	3.9	1.5	2.1	"		"	282	3.2	1.2	2.2	"
	"	231	3.3	1.1	2.1	"		"	283	2.9	1.1	2.0	"
	"	232	3.8	1.2	2.2	"		"	289	2.8	1.3	2.6	"
	"	233	3.6	1.2	2.1	"		"	285	3.6	1.4	2.1	"
	"	234	4.1	1.1	3.0	"		"	286	3.2	1.3	3.0	"
	"	235	3.7	1.2	1.8	"		"	287	4.0	1.6	2.8	"
	"	236	3.7	1.1	2.1	"		"	288	4.2	1.5	1.8	"
	"	237	3.9	1.2	2.1	"		"	289	3.8	1.4	2.9	"
	"	238	3.8	1.3	2.1	"		"	290	3.3	1.3	2.1	"
	"	239	3.5	1.2	2.9	"		"	291	3.1	1.2	2.2	"
	"	240	3.5	1.2	2.1	"		"	292	3.2	1.4	2.0	"
	"	241	3.7	0.9	2.3	"		"	293	3.5	1.3	2.5	"
	"	242	3.5	1.3	2.9	"		"	294	3.7	1.5	1.9	"
	"	243	3.7	1.2	2.4	"		"	295	2.9	1.3	1.9	"
	"	244	3.8	1.7	2.7	"		"	296	3.3	1.3	2.2	"
	"	245	3.8	1.7	1.8	"		"	297	3.4	1.2	1.9	"
	"	246	4.2	1.5	2.3	"		"	298	3.5	1.3	2.0	"
	"	247	3.8	1.4	2.4	ダークブルー		"	299	3.2	1.2	2.4	"
	"	248	3.8	1.5	2.0	"		"	300	3.9	1.8	2.0	"
	"	249	3.5	1.1	2.1	"		"	301	3.4	1.2	2.1	"
	"	250	3.9	1.4	2.3	"		"	302	3.7	1.4	2.6	"
	"	251	3.8	1.5	2.3	"		"	303	3.4	1.7	1.8	"
	"	252	3.5	1.0	3.1	"		"	304	3.8	1.6	2.2	"
	"	253	3.5	1.3	2.0	"		"	305	4.3	1.6	2.5	"
	"	254	4.3	1.5	2.9	"		"	306	3.7	1.3	2.4	"
	"	255	3.7	1.5	2.6	"		"	307	3.5	1.3	2.4	"
	"	256	4.4	1.5	2.7	"		"	308	3.3	1.2	2.7	"
	"	257	3.9	1.4	2.1	"		"	309	3.1	1.4	2.8	"
	"	258	3.8	1.5	2.4	"		"	310	3.6	1.4	1.6	"
	"	259	3.8	1.4	2.3	"		"	311	3.3	1.4	1.5	"
	"	260	3.0	1.4	2.6	"		"	312	3.9	1.5	2.4	"
	"	261	4.0	1.4	2.0	"		"	313	3.7	1.4	2.5	"
	"	262	4.1	1.5	2.0	"		"	314	4.2	1.4	2.8	"
	"	263	3.8	1.1	2.3	"		"	315	3.6	1.4	2.4	"
	"	264	3.6	1.0	2.5	"		"	316	4.0	1.5	2.0	"
	"	265	3.3	1.1	3.1	ダークグリーン		"	317	3.5	1.4	2.0	"
	"	266	3.3	1.2	2.2	"		"	318	3.0	1.3	2.4	"
	80	273	6.8	1.7	5.5	ダークブルー		"	319	3.3	1.5	2.0	"
	"	274	7.5	1.8	5.4	"		"	320	4.4	1.6	2.9	"

第18表 荻浦出土装身具観察表⑤

ガラス玉

(単位: mm)

遺構名	押込 番号	遺物 番号	径	孔径	厚さ	色調	遺構名	押込 番号	遺物 番号	径	孔径	厚さ	色調
砂魚堀1号墳	80	321	4.0	1.7	1.6	ブルーグリーン	砂魚堀1号墳	80	367	3.6	1.4	2.6	コバルトブルー
	"	322	2.7	1.3	2.1	"		"	368	3.8	1.7	1.9	"
	"	323	3.3	1.3	2.7	"		"	369	4.9	1.8	2.2	"
	"	324	3.5	1.3	2.4	"		"	370	4.2	1.8	2.0	"
	"	325	3.4	1.3	2.3	"		"	371	5.2	1.5	2.9	"
	"	326	4.0	1.5	3.2	"		"	372	5.0	1.8	4.0	"
	"	327	3.9	1.3	2.1	"		"	373	4.6	1.5	2.1	"
	"	328	3.8	1.2	2.6	"		"	374	4.4	1.7	2.3	"
	"	329	4.2	1.5	2.7	"		"	375	4.4	1.2	2.9	"
	"	330	3.9	1.5	2.0	"		"	376	3.9	1.5	1.9	"
	"	331	3.7	1.2	2.1	"		"	377	4.7	1.6	1.9	"
	"	332	3.5	1.4	2.3	"		"	378	3.9	1.5	2.0	"
	"	333	3.6	1.5	2.5	"		"	379	3.8	1.6	3.0	"
	"	334	3.7	1.5	1.7	"		"	380	3.0	0.9	2.0	ターコブルー
	"	335	3.7	1.6	2.2	"		"	381	4.3	1.7	2.5	"
	"	336	4.8	1.8	2.4	"		"	382	3.5	1.4	2.0	"
	"	337	4.0	1.3	2.6	"		"	383	3.4	1.1	2.2	"
	"	338	3.6	1.6	1.8	"		"	384	4.2	1.1	2.8	"
	"	339	3.1	1.0	1.7	"		"	385	3.6	1.2	2.3	"
	"	340	3.5	1.5	2.8	"		"	386	3.8	1.0	2.6	"
	"	341	3.0	0.9	1.9	"		"	387	3.8	1.3	2.3	"
	"	342	3.4	1.5	2.4	"		"	388	2.9	1.1	1.7	"
	"	343	3.7	1.3	2.2	"		"	389	3.8	1.3	2.7	"
	"	344	3.9	1.5	2.7	"		"	390	4.8	1.4	2.9	"
	"	345	3.6	1.7	3.2	"		"	391	3.4	1.1	3.3	"
	"	346	3.9	1.8	2.0	"		"	392	4.1	1.2	2.8	"
	"	347	3.1	1.3	2.8	"		"	393	3.1	1.2	2.7	"
	"	348	3.5	1.1	2.3	ブラック		"	394	3.4	1.3	2.5	"
	"	349	3.4	1.3	2.5	ライトグリーン		"	395	3.3	1.3	2.2	"
	"	350	2.9	1.1	3.6	"		"	396	4.0	1.3	2.4	"
	"	351	4.6	1.6	3.3	"		"	397	4.4	1.4	2.2	"
	"	352	3.6	1.6	1.4	コバルトブルー		"	398	3.2	1.1	2.0	"
	"	353	4.6	1.6	2.3	"		"	399	3.9	1.2	2.5	"
	"	354	3.1	1.2	2.3	"		"	400	4.4	1.5	2.7	"
	"	355	3.2	1.1	2.0	"		"	401	4.2	1.3	2.0	ライトグリーン
	"	356	4.2	1.5	2.2	"		"	402	4.5	1.3	2.4	"
	"	357	4.5	1.7	2.1	"		"	403	4.0	1.4	2.9	"
	"	358	3.3	1.3	1.9	"		"	404	3.9	1.1	3.1	"
	"	359	4.7	1.6	2.6	"		"	405	3.8	1.1	2.8	"
	"	360	4.2	1.5	2.4	"		"	406	3.7	1.0	3.2	"
	"	361	4.0	1.6	1.9	"		"	407	3.1	1.1	2.3	"
	"	362	3.8	1.6	2.0	"		"	408	4.0	1.2	2.3	"
	"	363	4.0	1.7	2.1	"		"	409	3.9	1.3	2.9	"
	"	364	3.7	1.1	3.4	"		"	410	3.6	0.9	2.4	"
	"	365	3.4	1.1	2.1	ターコブルー		"	411	4.0	1.0	2.8	"
	"	366	4.0	1.6	1.9	コバルトブルー		"	412	3.5	0.9	2.1	"

第19表 荻浦出土装身具観察表⑥

ガラス玉

(単位: mm)

遺構名	押円 番号	遺物 番号	径	孔径	厚さ	色 調	遺構名	押円 番号	遺物 番号	径	孔径	厚さ	色 調
砂倉1号墳	80	413	3.7	1.2	3.0	ライトグリーン	石川1号墳		69	4.9	1.7	2.3	コバルトブルー
		414	4.0	1.1	2.8	"			70	4.4	1.7	2.3	"
		415	3.5	1.2	2.6	"			71	4.6	1.6	2.9	"
		416	4.6	1.1	3.7	"			72	3.7	1.2	2.3	"
		417	3.2	1.0	2.7	"			73	3.5	1.1	1.7	"
		418	4.0	1.1	3.4	"			74	3.5	1.3	1.4	"
		419	4.3	1.3	2.5	"			75	3.8	1.4	2.4	ブラック
		420	3.6	1.2	3.0	"			76	3.8	1.5	2.3	"
		421	4.3	1.0	3.0	"			77	3.8	1.5	2.0	"
		422	4.7	1.3	2.8	イエロー			78	3.7	1.2	2.3	"
		423	5.4	1.9	2.7	"			79	3.6	1.4	2.4	"
		424	3.3	0.9	2.1	ライトブルー			80	3.2	1.2	2.3	"
		425	3.0	1.3	1.3	"			81	2.8	1.2	2.6	"
		426	3.2	1.5	2.0	"			82	2.8	1.0	2.1	"
		427	3.2	1.3	2.2	コバルトブルー			83	3.3	1.6	2.8	ブルー
石川1号墳		50	7.4	2.8	5.2	コバルトブルー			84	4.0	1.1	1.8	ライトグリーン
		51	7.2	2.4	4.9	"			85	3.2	1.0	2.0	"
		52	6.8	2.0	3.5	"			86	4.1	1.6	3.0	コバルトブルー
		53	5.7	1.8	5.9	"			87	4.3	1.4	2.9	"
		54	7.3	1.6	5.6	ダークブルー			88	4.1	1.7	2.9	"
		55	6.8	1.1	6.0	"			89	3.4	1.2	1.5	"
		56	6.1	2.6	5.5	コバルトブルー			90	3.3	1.6	1.6	"
		57	4.8	1.5	4.9	ダークブルー			91	3.4	1.3	1.4	"
		58	4.7	1.9	3.3	"			92	2.7	1.2	1.8	ライトブルー
		59	3.7	1.5	3.5	"			93	3.9	1.6	2.2	ブラック
		60	4.0	1.6	2.1	"			94	3.7	0.9	2.2	ダークブルー
		61	4.1	1.3	2.2	"			95	2.7	1.1	1.7	"
		62	4.3	1.3	2.8	"			96	2.6	1.0	2.2	ブラック
		63	4.1	1.4	2.2	"			97	4.6	1.6	3.2	グリーン
		64	4.2	1.5	2.7	"			98	4.2	1.3	2.6	"
		65	4.0	1.4	2.3	"			99	3.2	1.0	3.1	ライトグリーン
		66	4.5	1.5	3.2	コバルトブルー			100	3.2	1.0	2.3	"
		67	4.4	1.7	3.1	"			101	3.2	1.0	2.3	"
		68	4.8	2.3	2.2	"							

第20表 荻浦出土装身具観察表⑦

3. 自然科学的調査の結果

(1) 板の下4号墳出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田光子

a. はじめに

前原市荻浦坂の下4号墳出土の赤色顔料について、赤色の由来が何であるかを知るために、顕微鏡観察、X線分析を行った。

赤色物の出土例に関する今までの知見によれば、墳墓出土の赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄：赤鉄鉱（Hematite）を主成分とするベンガラと硫化水銀（赤）：辰砂（Cinnabar）を主成分とする朱の2種が用いられている。その他に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、まだ出土例はない。またこれら3種類の赤色顔料のうちベンガラには、赤色の由来は鉄にあるが赤鉄鉱は確認されないものが存在し、広義のベンガラと呼んでいる。ここではこれらの赤色顔料を考えて分析を行った。

試料

赤色物は石室床面にまとまって認められた（第54図右）もので、土と混じって残っていたものである。実体顕微鏡下で観察すると赤色物が集合した小塊が含まれていたため、これを分離した。針先につく程度の量で検鏡試料を作成した。蛍光X線分析の測定には、数gを研和したものをを用いた。

顕微鏡観察

実体、生物顕微鏡により検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の3種の赤色顔料（朱、ベンガラ、鉛丹）は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

本試料には赤色顔料としてはベンガラ粒子を認めた。ベンガラにはいわゆるパイプ状粒子と呼ばれる、20ミクロン前後の中空透明な管状の粒子が多量に含まれていた。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置システム3511を用い、X線管球、クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。

赤色の由来となる主成分元素としては鉄が検出され、水銀、鉛は検出されなかった。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、これらはみな主として混入の土砂に由来するものと考えられる。ただし、鉄は土砂成分にも必ず含まれるので、赤色の由来のものとしての区別は蛍光X線強度から判断した。

b. 結果と考察

顕微鏡観察で管状粒子を含むベンガラを認められ、蛍光X線分析で水銀が検出されていないことから、赤色顔料はいわゆるパイプ状粒子を含むベンガラからなることがわかった。

墳墓から赤色顔料が出土するのは汎世界的な現象であるが、日本列島では特に朱とベンガラを使い分ける風習が弥生時代後期から見られる。埋葬施設の内面にはベンガラを塗り、遺骸には朱を施すという使われ方は、古墳時代に盛んとなり、6世紀中頃まで続いている。この朱とベンガラの使い分けは、北部九州地方に始まったものであるが、古墳時代には極めてオーソドックスな葬送儀礼となっている。これに対して、朱やベンガラが単独で出土する古墳はあまり多くなく、被葬者の性格等を考える上で何らかの情報と成りうる要素である可能性がある。本例はおそらく遺骸にベンガラだけが施されたものと考えられるが、今後の類例に期待したい。

なお、いわゆるパイプ状粒子を含むベンガラは、かつて産地を特定する可能性が高いという論議で注目されたものである。最近では、出土例が少しずつ増加し鹿児島県から北海道まで列島の各地で報告されるようになり、縄文時代早期から古代まで認められている。これまで古墳時代の例は宮崎、鹿児島県の地下式横穴出土のものが多かったが、本例は北部九州地方の古墳出土のものとして良好な試料であり、これについても今後の類例に期待したい。

調査の機会をいただいた前原市教育委員会の岡部裕俊氏、蛍光X線分析にご協力いただいた九州産業大学総合機器センターの古賀啓子氏に感謝いたします。

(2) ICP-MSによる立石1号墳および東真方古墳群出土青銅鏡の鉛同位体比分析

(財)九州環境管理協会 松岡信明

1) 緒言

天然の鉛には質量数204、206、207および208の4種類の安定同位体があり、化学記号でそれぞれ ^{204}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb と表している。これらの同位体間の比を正確にもとめグラフ上に表現すると、銅鐸や青銅鏡の製作原料の産地推定が行えることは、既に馬淵、室住らによって実証されている¹⁾。

鉛の同位体比で青銅原料の産地推定を行う場合、一般に横軸に ^{207}Pb と ^{206}Pb の比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比) をとり、縦軸に ^{208}Pb と ^{206}Pb の比 ($^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比) をとったグラフが用いられる。この理由は、同位対比の存在量の関係で ^{204}Pb をいれた同位体比よりこれらの同位対比を用いたほうが、より、精度の高い評価が行えることによる。

同位対比の分析には質量分析装置を用いるが、従来青銅器の鉛同位体比の分析に用いられてきた装置は表面電離法質量分析装置といわれるものである。この装置は現在市販されている装置の中では最も高精度で金属の同位対比を分析できるもので、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ や $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の比を誤差0.03%程度で測定できる²⁾。しかし、このような高精度装置を備えている施設は数少なく、気軽に鉛同位対比の分析を行なえる状況ではない。

一方、近年誘導結合プラズマを利用する微量元素分析法が飛躍的に発展し、誘導結合プラズマ質量分析法 (ICP-MS) も小型化、低価格化が進み環境調査等への適用が可能な状況になっている。ICP-MSは、元素の濃度分析と同時に同位体分析も可能であるので、原理的にはこれを鉛同位体比の分析に利用できる。しかし、現在市販されている四重極型質量分析計を備えたICP-MSは、いくつかの理由で表面電離法質量分析装置に比べて同位対比分析の精度が劣る。従ってICP-MSを青銅器原料の産地推定に利用する場合は、分析値の精度評価を十分にを行い、これを結果の解釈に反映させるべきである。

本稿では前原市教育委員会文化課文化財係の岡部裕俊氏から提供いただいた標記2面の鏡の錆についてICP-MSの精度評価を行った上で鉛同位体比を分析したので、その結果を報告する。

2) 方法

a. 装置および器具

ICP-MS装置は、横川アナリティカルシステムズのPMS2000型を使用した。分析条件は次の通りである。

プラズマ条件	高周波出力	1210W (反射波3W)
	ネブライザガス流量	1.0 ℓ/min
	プラズマガス流量	15 ℓ/min
	補助ガス流量	0.5 ℓ/min

質量分析条件	検出器形式	四重極型
	積分時間	2.5 s/同位体
	積分回数	10回/同位体
分析回数		10回/試料

試料の分解に使用するテフロン製分解瓶等は、使用前に塩酸に十分浸せきした清浄なものをイオン交換水で洗浄して使用した。

b. 薬品

分析に使用する塩酸および硝酸は、和光純薬工業製精密分析用試薬を使用した。

鉛同位体比の分析では、分析値を米国国家標準局 (NIST) が頒布している鉛同位体標準物質 SRM-981 (重量 1 g の鉛の棒線) から 130mg 切り取り、これを硝酸に溶解し段階的に 1 規定硝酸で希釈して、最終的に鉛濃度 13ppb の SRM-981 標準溶液を調製して、鉛同位体比分析用の基準溶液として用いた。

c. 試料

分析試料は前原市教育委員会文化財係岡部裕俊氏から提供いただいた。すなわち、東真方 1 号墳出土の鏡 (真方鏡) については、同鏡修復の際に採取された錆 36.2mg を試料とした。立石 1 号墳出土の鏡 (立石鏡) については、鏡表面の腐食部分から痕跡量 (1 mg 以下) の錆を採取し、これを試料とした。

d. 分析方法

鉛同位体の分析は次の手順で行った。

- ① 試料をテフロン製分解瓶に入れ、硝酸 2ml および塩酸 4 ml を加え、密栓する。
- ② 分解瓶を 110°C に設定したホットプレートにのせ、1 時間加熱する。
- ③ 加熱終了後分解瓶の蓋を開け、さらに加熱を続けて溶液を蒸発乾固させる。
- ④ 蒸発残さを 1 規定の硝酸に溶解し、不溶性物質はろ紙 (5 C ろ紙) で除去する (実際には不溶性物質は無かったがる過を行った)。
- ⑤ ろ液を 1 規定の硝酸で 100 ml 定容とする。溶液はテフロン容器で保存する。
- ⑥ 溶液中の鉛濃度をフレイムレス原子吸光光度法で分析する。
- ⑦ 溶液中の鉛濃度が数 10ppb となるように 1 規定の硝酸で希釈し、ICP-MS 分析用試料とする。
- ⑧ a に示した分析条件で ICP-MS による鉛同位体比の分析を行う。

e. 鉛同位体比の計算

本稿では $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ および $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ を分析対象とした。ICP-MS による同位体比分析は実際には次の 4 種類の試料について行った。

- ① 鏡の錆について前節①～⑦の操作を行ったもの。
- ② 前節①～⑦の全操作ブランク。

③ SRM-981から調製した13ppb 鉛溶液（1 規定硝酸溶液）。

④前記③のブランク溶液（1 規定硝酸溶液）。

①および②のデータセットから、鏡試料の鉛同位体の正味計数値をもとめ、とりあえず同位体比を算出した。③および④のデータセットから、SRM-981から調製した13ppb 鉛溶液の鉛同位体の正味計数値をもとめ、同位体比を計算した。SRM-981にはNISTが推奨する鉛同位体比のデータが添付されているのでこの推奨値と実測値の比を求めて、鏡の鉛同位体比を決定するための補正係数とした。この補正係数をとりあえず求めた鏡試料の同位体比に乗じて、鏡試料の鉛同位体比とした。

3) 結果と考察

a. ICP-MSによる同位体比分析の精度評価

一般にICP-MSで金属元素の同位体比を分析すると、次に掲げた理由で、えられる同位対比に「ゆらぎ」が生じると言われる¹⁰⁾。

① ICP-MSに使われる四重極型質量分析計は質量走査を行なうので、厳密には各同位体を同時に分析しているわけではない。

② プラズマガスやキャリアガスの導人が動的であるので、元素のイオン化効率が瞬間的に変化する可能性がある。

③ 試料溶液の導入も動的であり、イオン化される原子数も瞬間的に変化する可能性がある。

以上を克服するためには、質量走査を行わない、すなわち複数の検出器を備えたICP-MSの開発が待たれるが、現状ではそのような装置が市販されていない。現段階で考えられる精度改良のための対策としては次の4点があげられる。

① ICP-MSの積分時間を適度に長く設定し積分回数を多くとることによって、1分析あたりの信頼性を高める。

② ICP-MSに導入する試料溶液の鉛濃度をできるだけ高くし、同位体計数値の信頼性を高くする。

③ バックグラウンドを低くすることによって、同位体計数値の信頼性を高くする。

④ 分析を多数繰り返して、平均値をとることによってできるだけ「ゆらぎ」の影響を少なくする。

このうち、①については、通常の微量成分分析の場合に行なう0.1~0.2秒程度の積分時間をここでは2.5秒とし、 ^{206}Pb → ^{207}Pb → ^{208}Pb の順に質量走査（同位体計数）を10回繰り返すこととした。従って、1分析について、それぞれの同位体当たり合計25秒の計数を行なっていることになる。通常のICP-MSによる微量成分分析では積分時間の合計が1~5秒であるので、これに比較するとかなり長い計数を行っていることになり、その分信頼性が向上していると考えられる。

②については、試料の鉛濃度を高くすると各同位体の計数値が多くなるので、結果の信頼性も高くなる。しかし、ICP-MSの検出器の劣化防止のため、1秒間あたりに検出器が受けることのできるイオンの数に制限がある。本調査で使用した装置では、1秒間あたり 10^4 個以上のイオンを受けるといふ分析を行なうてはいけないことになっている。試みにSRM-981から調製した13ppbの鉛溶液をICP-MSに導入してみたところ、最も同位体存在量が多い ^{208}Pb （存在比52.2%）で1秒あたり 6×10^4 カウントであった。従って100ppb程度まではICP-MSに導入可能であるので、この範囲でできるだけ高濃度の溶液を調製するようすれば同位体比分析の精度を高くすることが

できる。

③は基本的には試料以外の鉛が分析結果の精度や正確さに影響するという問題である。試料以外の鉛の影響とは、すなわち汚染の影響のことであり、汚染の種類としては分析に使用する試薬からの汚染、試料採取中や分析操作中に起こる汚染が考えられる。従って、試薬はできるだけ高純度のものを使用し、分析や採取は清浄な雰囲気の下で行なわなければならない。本調査では、可能な限りこれらの点を考慮した分析を行なった。しかし、以上のように注意深く分析しても最終的にいくらかのバックグラウンドは残る。これについては2)のeで述べたように、試料とまったく同じ分析操作を行なったブランク試料を同時に分析し、試料の鉛同位体の計数値からブランク試料のそれを差し引くことによってその影響を除いている。本調査の例では東真方1号墳出土の鏝から調製した試料溶液（鉛濃度31ppb）の²⁰⁸Pbが2.5秒当たり 2.5×10^5 カウントであったのに対して、ブランク試料のそれは 2×10^5 カウントであった。

以上の①～③に係わる対策を行った後本調査ではさらに④に係わる対策を行った。すなわち、一つの試料について分析を10回繰り返し同位対比の平均値および標準偏差を求めることとした。第21表はSRM-981から調製した鉛濃度13ppbの溶液の鉛同位体比の分析結果を示す。第21表から、10回の分析によって得られる鉛同位体比の誤差（相対標準誤差）は0.2～0.3%であり、表面電離法質量分析装置で行なった場合の誤差より1桁高い。しかし、得られた同位体比の平均値とNIST推奨値との差はほとんどなく、補正計数はほぼ1である。このことは、いつの分析の場合でも言えることである。従って、本調査の分析条件で10回程度の繰り返し分析を行なって同位対比の平均値を求めると、その値はほぼ真の値に近いと考えられる。さらに鏝等の試料では同時に分析したSRM-981の結果から得られる補正係数で補正することによってSRM-981に規格化された値を得ることができる。

b. 前原市出土鏝の鉛同位体比

以上の考察を行った上で、前原市出土の青銅鏝について2)のdの方法に従って鉛同位体比の分析を行った。結果を第22表および第121図に示す。一つの試料について10回の分析を行った結果、同位体比の誤差（標準偏差）は0.2～0.4%であり、表面電離法質量分析装置に比べて1桁高い。本調査では、鉛濃度が23.6ppb（立石鏝）および31.0ppb（真方鏝）の1規定硝酸溶液をICP-MSに導入した。ICP-MSには100ppb程度まで導入可能であるので、この点を改善すればさらに高精度の分析が行えると考えられる。一方、前述のSRM-981の同位体比分析の結果から、10回分析の平均値として得られた青銅鏝の同位体比は真値にきわめて近いものと考えられる。

なお、これら2試料の分析に使用した日数はブランク試料、SRM-981試料等の前処理とICP-MS分析を含めて約2日である。ICP-MSの分析は約5時間を要した。

筆者は環境分析、放射能分析および分析値の環境科学的解析、評価を専門とするものであるため、考古学的な解釈については差し控えていただきたい。青銅器の鉛同位体分析の考古学的解釈については馬淵の成書^{1), 2)}等に詳しいので、それらを参照されたい。

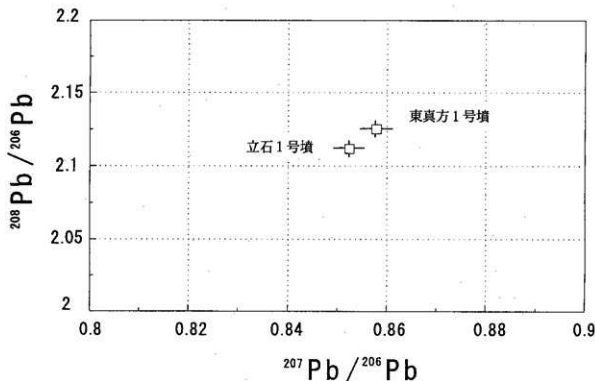
4) 結 語

ICP-MS による青銅器の鉛同位体比分析について検討し、以下のような知見が得られた。

- (1) 青銅器の銹から調製する ICP-MS 分析用溶液の鉛濃度は 100ppb 以下の範囲で可能な限り高くした方が高精度の結果が得られる。
- (2) 青銅器の銹から鉛濃度 20~30ppb 程度の 1 規定硝酸溶液を調製し、ICP-MS の積分時間、積分回数および分析回数を、それぞれ 2.5 秒、10 回および 10 回とすると、標準偏差 0.2~0.4% の精度で鉛同位体比の分析を行える。
- (3) ICP-MS で信頼性の高い鉛同位体比を得るためには、一つの試料について多数回(10回)の分析を行い、平均値を得るべきである。
- (4) ICP-MS で青銅鏡の鉛同位対比を分析すると、表面電離法質量分析装置に比べて精度は落ちるが、多数回分析することによって真値に極めて近い値が得られると考えられる。

参考文献

- 1) 馬淵久夫：古鏡の原料をさぐる—鉛同位体比法—馬淵久夫・富永健著「考古学のための化学 10 章」, P157~178 (1981年)
- 2) 馬淵久夫：鉛同位体比による青銅器原料産地の推定, 1989年第3回大学と科学公開シンポジウム組織委員会編「新しい研究法は考古学に何をもたらしたか」, p188~201 (1989年), クバプロ
- 3) 平田岳史：高周波誘導プラズマ源質量分析計 (ICP-MS) による高精度同位体組成分析, 地質ニュース, 469号 p7~17 (1993年)



第121図 前原市出土青銅鏡鉛同位体比

第21表 ICP-MSによるNIST-SRM-981の鉛同位体比分析の結果*

分析回数	鉛同位体比	
	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
1	0.91326	2.1721
2	0.91866	2.1777
3	0.91501	2.1740
4	0.91907	2.1769
5	0.92036	2.1811
6	0.92063	2.1823
7	0.91945	2.1828
8	0.92041	2.1849
9	0.92053	2.1774
10	0.92199	2.1828
平均**	$0.91894 \pm 0.00273(0.30)$	$2.1792 \pm 0.0042(0.19)$
NIST推奨値***	0.91464 ± 0.00017	2.1681 ± 0.0004
補正計数****	0.9953 ± 0.0030	0.9949 ± 0.0019

*鉛濃度13ppbの1規定硝酸溶液を分析したもの。

**誤差は10回の分析の標準偏差。括弧内は%表示。

***誤差は標準偏差。

****NIST推奨値/平均。誤差は誤差伝播の式に従って計算。

第22表 ICP-MSによる前原市出土鏡の鉛同位体比分析結果

試料	鉛同位体比*	
	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
立石1号墳出土 青銅鏡	0.85244 ± 0.00319	2.1117 ± 0.0054
東真方古墳出土 青銅鏡	0.85787 ± 0.00333	2.1252 ± 0.0055

*有効数字の桁数はNIST推奨値と合わせた。

(3) 立石1号墳出土人骨について

九州大学大学院比較社会文化研究科 中橋孝博

1) はじめに

福岡市の西隣、前原市一帯は古くは魏志倭人伝に伊都国としてその名を表す地域であり、これまでも弥生、古墳時代を中心とした夥しい遺跡、遺物が発見、調査されている。しかし、残念ながらこれまでのところこうした考古学的成果のなかで古人骨の出土例は少なく、各時代の住人の形質などについて不明な点が多く残されている。地理的、歴史的状況からみて、古代の当地の住人の特徴を明らかにすることは今後の重要な課題となろう。

1991年から前原市荻浦地区の丘陵地帯において、土地区画整理に伴う発掘調査が実施された。その成果の一つとして立石1号墳と名付けられた前方後円墳の北西裾から土器棺に埋葬された人骨が出土した。北部九州では稀な古墳時代の土器棺埋葬例であり、人骨の保存状態はよくないものの貴重な一例になるものと考えられる。以下にその知り得たところを報告する。

2) 遺跡・資料

立石1号墳は福岡県前原市大字荻浦字立石の丘陵上で発見された前方後円墳である。1992年の市教育委員会の調査によって後円部の埋葬主体部から方格規矩鏡が出土している。

古墳の北西裾から2個の山陰系二重口縁壺を合わせた土器棺墓が検出され、中から一体の人骨が山上した。棺の所属年代は考古学的な検証から4世紀前葉と考えられている。

3) 観察結果

全体的に保存状態が悪く、頭蓋と四肢骨の破片のみ回収された。頭蓋は、前頭骨、左頭頂骨の一部が確認され、その他歯が多数出土した。以下にその歯式を示す。

(M ⁴) (M ³) (P ³) (C)		(I ³) (C) (P ³) (P ²) (M ¹)
/ m ² / c / /		/ m ¹ m ¹ / /
(M ₂) (M ₁) m ₂ / / / (I ₁)		/ / (C) (P ₁) (P ₂) (M ₁) (M ₂)

{ / : 欠失、 () : 未萌出 }

以上の歯の萌出状況、歯根の形成状況、第一大臼歯にほとんど咬耗がみられない点などからみて、5～6歳の幼児骨とみなされる。また永久歯のサイズがかなり大きいことから判断して、男性であった可能性が高い。その他四肢骨の破片が4片出土したが、大腿骨の1片が同定できただけで、他の部位は不明である。

参考文献

藤田恒太郎 (1949) 「歯の計測基準について」 『人類学雑誌』 61 : 27-32

Ⅲ おわりに

今回の調査によって区画整理事業地と周辺の丘陵上から未調査分を含め古墳16基、甕棺、土器棺墓などが発見された。各墳墓の消長の変遷の推移をまとめてみたのが第23表である。

この地で最も古い墳墓は前田古墳下から発見された甕棺墓と考えられる。その後、立石1号→石川2号→3号→坂の下4号墳丘下土器棺墓へと続くものと想定した。ただし、甕棺、土器棺については日用雑器との並行関係の検討が不十分であり再度の検討を要するだろう。また、5世紀前半代の墳墓の動向が明らかではないことも課題である。5世紀代の墳墓として最初に現れたのが坂の下4号墳であるが、古式横穴式石室としては、すでに周壁材が玄武岩板石から花崗岩転石へと変化を遂げつつある段階で、腰石も配されるなど形態的にはやや新しい5世紀後半代のものとする。5世紀前半といえば糸島地方において古墳主体部に横穴式石室が導入されはじめた時期にあたり、首長の階層によっては横穴式石室の導入が遅れ、前代的な石棺系主体部を有する古墳が引き続き築造されていたのかもしれない。現地で保存されている八幡裏古墳は低墳丘の円ないし方形で、墳頂部に箱式石棺状の立石が露出している。この期の空白を埋める墳墓である可能性がある。

坂の下4号墳以後は石川1号→砂魚塚1号、2号→前田、坂の下1号→坂の下2、3、5号→(立屋敷1号)→立石2号の順に築造されたと考えられる。立石2号墳は荻浦地区では最後に築かれた古墳で、周壁の石積み掘り方の埋め戻しが粗い。この古墳を最後に古墳の築造は終わりを告げ8世紀初頭を前後する火葬土墳、蔵骨器埋納土墳の出現へと続くものとみられる。

墳墓名	調査地点	年代 (A.D)					備考
		300	400	500	600	700	
前田甕棺墓	A-1	●					単棺?甕棺墓
前田古墳	A-1				●—		円墳・横穴式石室
立石1号墳	A-3	●					前方後円墳・割竹形木棺
立石土器棺墓	A-3	●					1号墳新・香口式土器棺墓
立石2号墳	D-1					○……—	円墳?横穴式石室
坂の下1号墳	A-4				○……		方墳・横穴式石室
坂の下2号墳	B-20-b				●	—	方墳・横穴式石室
坂の下3号墳	B-20-b				●	—	方墳・横穴式石室
坂の下4号墳	B-20-b			●—			円墳・横穴式石室
坂の下5号墳	B-20-b				●	—	方墳・横穴式石室
坂の下土器棺墓	B-20-b		●				単棺?二重口縁土器棺墓
砂魚塚1号墳	C-6				●—		前方後円墳・横穴式石室
砂魚塚2号墳	C-6				○……		円墳・横穴式石室
石川1号墳	E-2				●—		方墳・横穴式石室
石川2号墳	B-11		○				円墳・横穴式石室
石川3号墳	B-11		●				方墳・横穴式石室
火葬墓・蔵骨器						●—	丘陵各所から出土

第23表 荻浦地区内における古墳、墳墓の変遷

(●は築造期で、○は時期に不明確さを残すもの。——は使用期間を示す。)

最後に荻浦の古墳群において検討すべき課題のうち2点について述べる。

確認された16基の古墳のうち立石1号墳と砂魚塚1号墳が前方後円墳であった。立石1号墳は布留式古段階の前方後円墳で、前方部は狭長、おそらく墳高も低い形態であつたらうと推測している。この後、約200年間、前方後円墳築造は行われず、突如として砂魚塚1号墳が築造される。旧加布里湾を眼下に望む絶好の丘陵上に築かれていたが、前方後円墳古墳としてはごく小形で、前方部は短く低い。出土遺物のなかでは玉製の装身具は一括して出土し、水晶切子玉、碧玉管玉の多量出土が目を引いた。

この時期の離れた2古墳に共通する要素はいずれも典型的な「前方後円形」を呈さない、前方部にやや甍がある、いわば「垂流」の前方後円墳であることである。主体部に副葬された遺物は立石1号墳では銅鏡、砂魚塚では水晶、碧玉を中心とした豊富な装身具であった。しかし、立石1号墳から出土した方格T字鏡について、松浦有一郎は鏡を出土した古墳を評して「『圧倒的に中・小古墳、しかも多くが円墳』であるが、比較的副葬品を豊富に有する古墳が多いという傾向がみられる」とし、続いて「こうした状況は古墳自体のランクと共に被葬者が入手し得る鏡に一定の限度があり、被葬者のクラスに応じた鏡の保有ということを示唆している」と論及しており、立石1号墳の被葬者層を検討していく上で重要な示唆となる。荻浦丘陵の古墳造営を支えた集団の位置付け、前方後円墳築造の背景ともからみ、興味深い指摘といえる。

横穴式石室構造では、前壁袖部と羨道を同時に構築する糸島独自に展開された構築技法が注目される。荻浦地区では横穴式石室はその規模に関わらず前壁石積みの変化によって石室の変遷が追えるようである。石川1号→砂魚塚1号→前田へと墳丘、石室規模の差に関わらず玄門～羨道の石積みの簡易化傾向が時期を追って認められた。今後、糸島地方の横穴式石室の変遷の検討を行う上でひとつの検討指針となるものと考えられる。近年同様の前壁・羨道形態を有する古墳として前原市古賀崎古墳、井ノ浦古墳、辻の田1号墳、また福岡市飯氏二塚古墳などが発見、調査されており、関連資料の蓄積も進んでいることから、これについての検討をすすめるべきであろう。

以上、荻浦丘陵における古墳の変遷推定と若干の課題の提示を行った。荻浦における墳墓の築造年代は古墳前期から終末期までの長さにおよび、今回は報告にいたらなかった律令期以後の火葬墓、蔵骨器埋納土壌にいたるまで、約500年以上にわたる。今回のように限られた小集団によって営まれたと考えられる古墳時代から律令期にかけての墓制の変容を一連の調査で把握できた意義は大きい。墓制を介した当時の社会構造について検討を行う上でも貴重な成果であったと考える。

しかし、本書は古墳調査内容の報告に主眼を置いたため、個々の遺構、遺物、古墳群全体を通した内容分析、そこから導かれるいにしへの荻浦の歴史等について十分に検討を加えるまでにはいたらなかった。この残された課題の検討は来る再度の報告機会に譲りたい。

註1 松浦有一郎「日本出土の方格T字鏡」『東京国立博物館紀要』第29号 1994年

註2 岡部 裕俊『井原地区周辺の古墳群』前原市文化財調査報告書 第51集 1994年

註3 林 覚『井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群』前原市文化財調査報告書 第53集 1994年

註4 常松 幹夫『飯氏二塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第435集 1995年